intra-mart AppFramework
Ver.7.0

セットアップガイド

2011/06/30 第 8 版

<< 変更履歴 >>

変更年月日	変更内容
2008/07/07	初版
2008/08/22	第 2 版 「3.3.1.2.4 WebSphere にプロパティを追加」を削除しました。 WebSphereに関する設定の「3.3.1.2.1 im_portal_commonの組み込み」および「3.3.1.2.4 WARファイルのデプロイ」を修正しました。 WebLogicに関する設定の「3.3.2.1.2 WARファイルの作成」を修正しました。
2008/09/30	第 3 版 「3.4.1 準備」に DB2 利用時の注意点を追加しました。
2009/02/27	第 4 版 「3.2.4 diconファイルの設定について」を追加しました。
2009/06/30	第 5 版 「3.2.1 インストーラの起動と操作」の誤字を修正しました。
2009/10/30	第 6 版 「8 アンインストール」にデータベースの初期化に関する内容を追加しました。
2010/11/30	第 7 版 「3.4.1.1 Oracle Database 11g リリース 1 (11.1) 以降の注意点」を追加しました。 「3.6.1 かんたんログイン機能の利用について」を追加しました。 「5 intra-martへのログイン」を追加しました。 「6.5 試験環境等から環境を移行する場合」を追加しました。 「6.6 コンテキストルートを変更する場合」の記述を追加しました。 その他のドキュメント内の誤字を修正しました。
2011/06/30	第 8 版 「6.5.3 移行先データベースへデータベース格納データのインポート6.6」の誤字を修正しました。

<< 目次 >>

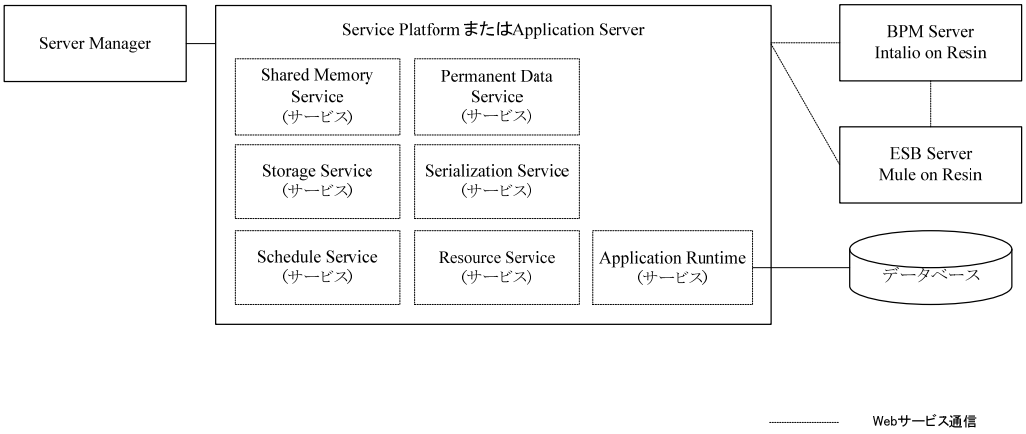
1 システム構成 1
1.1 intra-mart AppFramework 1
1.2 intra-mart DebugServer 1
1.3 各モジュールについて 2
1.4 用語解説 3
1.5 前提条件 4
1.6 データベースの使用について 4
2 インストールの流れ 5
2.1 サーバ構成図作成 5
2.2 データベースのインストール 5
2.3 データベース接続ドライバのインストール 5
2.4 Javaランタイムのインストール 5
2.5 Application Serverのインストール 5
2.6 intra-mart Ver7.0 のインストール 6
2.7 Application Serverの設定 6
2.8 データベース接続の設定 6
2.9 intra-martの起動 6
3 インストール 7
3.1 準備 7
3.1.1 サーバ構成 7
3.1.2 JDBCドライバのインストール 7
3.1.3 Javaランタイムのインストール 9
3.1.4 Application Serverのインストール 10
3.2 intra-mart Ver7.0 のインストール 11
3.2.1 インストーラの起動と操作 11
3.2.2 インストールディレクトリ構成 12
3.2.3 運用マシン構成とインストール 19
3.2.4 diconファイルの設定について 33
3.2.5 ライセンス登録について 34
3.2.6 インストーラのサイレント・モードについて 35
3.3 Application Serverの設定 36
3.3.1 WebSphereの設定 36
3.3.2 WebLogicの設定 62
3.4 データベース接続の設定 85
3.4.1 準備 85
3.4.2 data-source.xmlの設定 87
3.5 JavaMailおよびJAF(Javabeans Activation Framework)について 88
3.6 携帯端末の利用について 89
3.6.1 かんたんログイン機能の利用について 89
4 起動と停止 92
4.1 起動と停止の順番について 92
4.1.1 intra-mart AppFrameworkの場合 92
4.2 Server Manager／Service Platformの起動・停止方法 93
4.2.1 Windowsの場合 93
4.2.2 UNIX系OSの場合 98
4.3 Application Serverの起動・停止方法 100

4.3.1 ヘッドレスモードの設定方法 100
5 intra-martへのログイン 101
5.1 システム管理者でログイン 101
5.2 ログイングループの作成 103
5.3 初期データインポート 106
5.4 ログイングループ管理者でログイン 109
6 intra-mart環境の再構築方法 110
6.1 JDKを変更する場合 110
6.1.1 Windowsの場合 110
6.1.2 UNIX系OSの場合 110
6.1.3 修正例 111
6.2 IPアドレスを変更する場合 113
6.2.1 imSPをインストールしたマシンのIPアドレスを変更する場合 113
6.2.2 HTTPサーバのIPアドレスを変更する場合 113
6.2.3 imSMのIPアドレスを変更する場合 113
6.3 ポート番号を変更する場合 114
6.3.1 HTTPサーバのポート番号を変更する場合 114
6.3.2 imSMのポート番号を変更する場合 114
6.4 ログイングループ名を変更する場合 115
6.5 試験環境等から環境を移行する場合 117
6.5.1 移行元のログイングループ管理者で、移行情報のエクスポート 117
6.5.2 移行元データベースからデータベース格納データのエクスポート 118
6.5.3 移行先データベースへデータベース格納データのインポート 118
6.5.4 移行先環境へintra-martのインストール 118
6.5.5 各種ファイル、ディレクトリの移動 118
6.5.6 移行先のグループ管理者で移行情報のインポート 118
6.6 コンテキストルートを変更する場合 119
7 エクステンションおよびアプリケーションのインストール 120
7.1 エクステンションおよびアプリケーションのインストール 120
7.2 imart.warの再作成と再登録 120
8 アンインストール 121
8.1 コマンドプロンプトで動作させている場合 121
8.2 サービスとして動作させている場合 121
8.3 Windowsの場合 121
9 付録A intra-mart システム管理シート 123
10 付録B インストールトラブルシューティング 125
10.1 注意事項 125
11 付録C 運用開始及び運用にともなうTips（安定稼動を目指すために） 126
11.1 運用開始後 126
11.2 運用 126
11.3 備考 127
12 付録D Oracle11gでの表領域、およびユーザの作成方法 128
12.1 表領域の作成 128
12.2 ユーザの作成 132
12.2.1 CREATE VIEW権限の付与 135

Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

1 システム構成

1.1 intra-mart AppFramework



intra-mart AppFramework Ver7.0 は4つのサーバ（Server Manager、Service Platform、BPM Server、ESB Server）から構成されています。

1.2 intra-mart DebugServer

デバッグサーバは、intra-mart e-Builder で利用するデバッグ専用のサーバです。

デバッグサーバのインストール方法は、intra-mart e-Builder のインストールガイドを参照してください。

1.3 各モジュールについて

- **Server Manager**
  Service Platform と、その上のサービス群の運用状況を統括的に管理します。
  その情報はクライアントの管理ツールである intra-mart Administrator に送信され、遠隔からのモニタリングを可能にします。また、ライセンス情報もここで管理されます。

- **Service Platform（各サービスが動作します）**
  下記のサービス群を実行するプラットフォームです。いわゆる、サーバプロセスがこれにあたります。

- **サービス（JavaVM 上で動作します）**
  - **Application Runtime**
    アプリケーションプログラム実行エンジンです。
    ※分散構成でインストールを行う場合、Application Serverには、他のサービスをインストールすることはできません。（詳細は「3.2.3 運用マシン構成とインストール」をご覧下さい。）
    ※ScheduleServiceで時間起動されるバッチプログラムは、このApplication Runtimeで実行されます。
    ※ユニークなIDの生成もこのServicePlatformで行います。

  - **Shared Memory Service**
    共有メモリを管理するサービスです。
    このサービスが提供する情報管理はセッションレスです。タイムアウトなどによりデータが消失することはありません。

  - **Permanent Data Service**
    サーバが動作するために必要なデータを保存・管理するサービスです。
    このサービスでは情報をファイルに保存するので、サービスが停止した場合も、次の起動時に以前に保存されたデータを復元することができます

  - **Resource Service**
    intra-mart システムの動作に必要な各プレゼンテーションページ、ファンクションコンテナのソースを管理し、Application Runtime に対して必要なプログラムを配布するサービスです。

  - **Storage Service**
    共有ファイルを管理するサービスです。
    複数の Application Runtime を用いた分散システムで運用しているとき、アップロードされたファイルや、システムで共有化したいファイルを一元管理するときに利用します。

  - **Serialization Service**
    システム全体における統括的な利用を目的とした機能の集合体です。
    このサービスでは、アプリケーションのロック制御を行います。

  - **Schedule Service**
    バッチ処理のスケジューリングサービスです。
    このサービスでは、指定時間になると該当するバッチプログラムの実行を Application Runtime に依頼します。したがって、バッチプログラムは Application Runtime で実行されます。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

- **intra-mart Administrator　(JavaVM 上で動作します)**
  クライアント側で動作し、Server Manager と通信しながら 各サービス群の管理を行います。
  Server Manager、Service Platform の起動、停止、設定などができます。
  また Server Manager、Service Platform を運用しているコンピュータ以外からも、リモートで運用管理を行うことができます。
- **BPM Server (Intalio on Resin)**
  業務フローのデザインツール・**BPM Desinger** を搭載した、**BPEL の実行エンジン**です。
  BPM Desinger で作成した業務フローを実行し、intra-mart のドキュメントワークフローと連携させることができます。
- **ESB Server (Mule on Resin)**
  様々なアプリケーションサーバや、業界標準、プロトコルに対応し、アプリケーションの統合または連携を行います。

1.4 用語解説

intra-mart AppFramework Ver7.0	以下、**AFW** と略します。 **AFW** をインストールしたディレクトリを**<%im_path%>**と略します。
intra-mart DebugServer Ver7.0	以下、**DS** と略します。 **DS** をインストールしたディレクトリを**<%im_path%>**と略します。
intra-mart Server Manager	システム全体を管理するサーバです。以下、**imSM** と略します。
intra-mart Service Platform	サービスを起動するためのサーバ本体です。以下、**imSP** と略します。
Application Runtime	アプリケーションの実行エンジンです。以下、**AppRuntime** と略します。
Shared-Memory Service	共有メモリを管理するサービスです。以下、**SharedMemSrv** と略します。
Permanent-Data Service	永続データを管理するサービスです。以下、**PermDataSrv** と略します。
Resource Service	スクリプト開発モデルのプログラムファイルを管理するサービスです。 以下、**ResourceSrv** と略します。
Storage Service	ファイルを管理するサービスです。以下、**StorageSrv** と略します。
Serialization Service	排他制御機能のためのサービスです。以下、**SerializeSrv** と略します。
Schedule Service	バッチの時間起動を制御するサービスです。以下、**ScheduleSrv** と略します。
intra-mart Administrator	システム全体の状態を見るためのビューアです。以下、**imAdmin** と略します。
BPM Server(Intalio on Resin)	業務フローデザインツールを搭載した、BPEL 実行エンジンです。以下、**BPMS** と略します。
ESB Server(Mule on Resin)	アプリケーションの統合または連携を行います。以下、**ESBS** と略します。

1.5 前提条件

本製品をご使用になる際は、リリースノートに記載されているシステム要件を満たしている必要があります。
詳しくはリリースノートをご覧ください。

AFW では、データベースと連動させながら運用することが前提となります。
（このインストールガイドでは、データベースへの接続方法も合わせて解説しております）

1.6 データベースの使用について

- **Oracle を使用する場合**
  Oracle へは、JDBC 経由で接続します。
  弊社では JDBC ドライバは Oracle JDBC Driver 11.1.0 で動作試験をしております。

（注意） Oracle をインストールすると、Java ランタイムのバージョンが変わってしまう場合があります。
必ず Oracle をインストールしたあとに Java ランタイムをインストールして下さい。

- **Microsoft SQL Server 2005 を使用する場合**
  Microsoft SQL Server 2005 へは、JDBC 経由で接続します。
  弊社では JDBC ドライバは Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver 1.2(Type4)で動作試験をしております。

- **DB2 を使用する場合**
  DB2 へは、JDBC 経由で接続します。
  弊社では JDBC ドライバは DB2 JDBC Driver (IBM DB2 9 に付属) Type4 で動作試験をしております。

- **PostgreSQL を使用する場合**
  PostgreSQL へは、JDBC 経由で接続します。
  弊社では JDBC ドライバは postgresql-8.3-603.jdbc3 で動作試験をしております。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

2 インストールの流れ

本製品を運用するにあたって、以下の手順でインストールを行ってください。

2.1 サーバ構成図作成

インストールを行う前に、運用するサーバ構成図の作成を行ってください。

サーバ構成図の作成には「9 付録A intra-mart システム管理シート」（123ページ）を利用ください。

参照		ページ
3.1.1	サーバ構成	7
3.2.3	運用マシン構成とインストール	19～30

2.2 データベースのインストール

ご利用になるデータベースをインストールしてください。

Oracle11g での、表領域およびユーザ登録の方法

参照		ページ
12	付録D Oracle11gでの表領域、およびユーザの作成方法	128

2.3 データベース接続ドライバのインストール

データベース接続ドライバをインストールしてください。

	参照		ページ
Oracle	3.1.2.1	Oracle JDBCドライバのインストール	7
Microsoft SQL Server 2005	3.1.2.2	Microsoft SQL Server 2005 JDBCドライバのインストール	7
DB2	3.1.2.3	DB2 JDBC ドライバのインストール	8
PostgreSQL	3.1.2.4	PostgreSQL 8.3 JDBCドライバのインストール	8

2.4 Javaランタイムのインストール

intra-mart を運用するすべてのコンピュータにインストールします。

参照		ページ
3.1.3	Javaランタイムのインストール	9

2.5 Application Serverのインストール

AFW をご利用になる場合には、以下の Application Server のいずれかをインストールする必要があります。

参照		ページ
3.1.4.1	WebSphereのインストール	10
3.1.4.2	WebLogicのインストール	10

2.6 intra-mart Ver7.0 のインストール

サーバ構成にしたがって、本製品のインストールを行ってください。

参照		ページ
3.2.1	インストーラの起動と操作	11
3.2.3	運用マシン構成とインストール	19

2.7 Application Serverの設定

AFW をご利用になる場合には、Application Server の設定が必要です。

参照		ページ
3.3.1	WebSphereの設定	36
3.3.2	WebLogicの設定	62

2.8 データベース接続の設定

intra-mart Ver7.0 はデータベースの使用が前提となっています。

intra-mart がデータベースに接続するための設定を行います。

参照		ページ
3.4.1	準備	85
3.4.2	data-source.xmlの設定	87

2.9 intra-martの起動

■ 起動と停止の順番について

参照		ページ
4.1.1	intra-mart AppFrameworkの場合	92

■ **Server Manager／Service Platform の起動・停止方法**

参照		ページ
4.2.1	Windowsの場合	93
4.2.2	UNIX系OSの場合	98

■ **ApplicationServer の起動・停止方法**

参照		ページ
4.3	Application Serverの起動・停止方法	100

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3 インストール

3.1 準備

3.1.1 サーバ構成

3.1.1.1 サーバ構成図

インストール前にサーバ構成図を作成することをお勧めします。
サーバ構成図には、各マシンの IP アドレスと、各 Service Platform のポート番号と、Service Platform 上で運用する各サービス名を明記します。
サーバ構成図を作成することで、インストールを簡単に行うことができます。
サーバ構成図は「3.2.3 運用マシン構成とインストール」を参考にしてください。

3.1.2 JDBCドライバのインストール

本製品でデータベースを使用する場合は、JDBC ドライバのインストールが必要です。

インストールした JDBC ドライバは、
Application Runtime が動作する Application Server のクラスパスに追加してください。
※ **Application Server をインストールする、すべてのコンピュータにインストールする必要があります。**

3.1.2.1 Oracle JDBCドライバのインストール

本製品で Oracle を使用する場合は、インストールが必要です。
すでにインストールされている場合は、行う必要はありません。

Oracle JDBC Driver は、オラクルのサイトから配布されております。
http://www.oracle.com/technetwork/database/features/jdbc/index-091264.html からダウンロードできます。
（2010 年 11 月 22 日現在）
上記サイトから **Oracle JDBC Driver** をダウンロードし、インストールしてください。
詳しくは、Oracle のサイトを参照してください。

※ 弊社では JDBC ドライバは Oracle JDBC Driver 11.1.0 で動作試験をしております。

3.1.2.2 Microsoft SQL Server 2005 JDBCドライバのインストール

本製品で Microsoft SQL Server 2005 を使用する場合はインストールが必要です。
すでにインストールされている場合は、行う必要はありません。

Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver は、Microsoft Developer Network のサイトから配布されております。
http://www.microsoft.com/downloads/details.aspx?familyid=C47053EB-3B64-4794-950D-81E1EC91C1BA&displaylang=ja
からダウンロードできます。 （2008 年 7 月 7 日現在）

上記サイトより **Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver** をダウンロードし、インストールしてください。
詳しくは、Microsoft Developer Network のサイトを参照してください。

※ 弊社では JDBC ドライバは Microsoft SQL Server 2005 JDBC Driver 1.2(Type4)で動作試験をしております。

3.1.2.3 DB2 JDBC ドライバのインストール

本製品で DB2 を使用する場合はインストールが必要です。
すでにインストールされている場合は、行う必要はありません。

IBM DB2 に付属の DB2 JDBC Driver Type4 をインストールしてください。
詳しくは、DB2 のマニュアルを参照してください。

※ 弊社では JDBC ドライバは DB2 JDBC Driver (IBM DB2 9 に付属) Type4 で動作試験をしております。

3.1.2.4 PostgreSQL 8.3 JDBCドライバのインストール

本製品で PostgreSQL 8.3 を使用する場合はインストールが必要です。
すでにインストールされている場合は、行う必要はありません。

PostgreSQL JDBC Driver は PostgreSQL JDBC web site から配布されております。
http://jdbc.postgresql.org/download.html からダウンロードできます。
（2008 年 7 月 7 日現在）
上記サイトより **PostgreSQL JDBC Driver** をダウンロードし、インストールしてください。

※ 弊社では JDBC ドライバは postgresql-8.3-603.jdbc3 で動作試験をしております。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.1.3 Javaランタイムのインストール

サーバモジュールをインストールするコンピュータすべてにインストールします。
すでにインストールされている場合は、行う必要はありません。

3.1.3.1 インストール前の注意点

3.1.3.1.1 データベースにOracleを使用する場合

Oracle をインストールすると、Java ランタイムのバージョンが変わってしまう場合があります。
必ず Oracle をインストールした後に、Java ランタイムをインストールして下さい。

3.1.3.1.2 Solaris版 Javaランタイム をインストールする場合

Solaris 版 Java ランタイムをインストールする場合は、事前に Solaris OS の必須パッチをインストールしてください。
適切な Solaris パッチがインストールされていないと、正しく動作しないことがあります。
Solaris 10 OS 用の Java 2, Standard Edition クラスタ パッチは、
http://jp.sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access からダウンロードできます。
（2008 年 7 月 7 日現在）
詳細は Java ランタイムをダウンロードしたサイトをご覧ください。

3.1.3.2 インストール手順

1. Javaランタイム(JavaTM 2 SDK, Standard Edition 1.5.0_x) をダウンロードします。Javaランタイムのインストーラは、下記のサイトからダウンロードできます。
   http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/download.html （2008 年 7 月 7 日現在）

2. ダウンロードしたインストーラから、インストールを行います。
   インストールに関する詳細は、下記のサイトを参照してください。
   http://java.sun.com/j2se/1.5.0/ja/install.html （2008 年 7 月 7 日現在）

3. コマンドラインに「**java –version**」と入力し、リターンキーを押します。

4. コマンドラインにバージョン情報が表示されたら、インストールは成功です。

3.1.4 Application Serverのインストール

AFW をご利用になる場合は、Application Server のインストールが必要となります。

Application Server は、以下のいずれか1つを選択できます。

- **IBM WebSphere Application Server 6.1**
- **BEA Weblogic Server 10J**

3.1.4.1 WebSphereのインストール

WebSphere Application Serverのインストーラから IBM WebSphere Application Server 6.1をインストールしてください。

※ 詳細は WebSphere のマニュアルを参照してください。

3.1.4.2 WebLogicのインストール

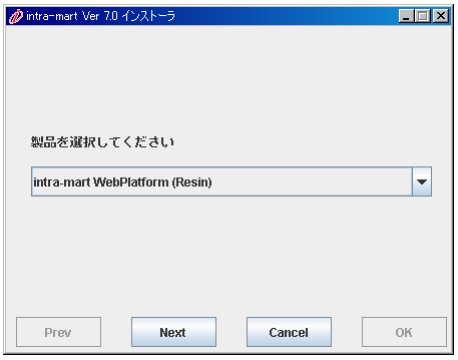
WebLogic Server のインストーラから BEA Weblogic Server 10J をインストールしてください。

※ 詳細は WebLogic Server のマニュアルを参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2 intra-mart Ver7.0 のインストール

3.2.1 インストーラの起動と操作



インストーラの起動および操作は以下のように行います。

■ **Windows の場合**

1. java.exe コマンドにパスが通っていることを確認します。
2. エクスプローラで本製品の CD-ROM があるディレクトリに移動します。
3. iwp_iaf¥install ディレクトリへ移動します。
4. **setup.jar** をダブルクリックし起動します。
   (**setup.bat** をダブルクリックしても起動できます。)
5. インストーラの画面が表示されます。
6. 画面の設定項目を設定して、[Next]ボタンを押します。以下同様
7. 最後に設定項目一覧が表示されます。その設定でよろしければ[OK]ボタンを押します。
   (間違っていた場合は、[Prev]ボタンで戻り、設定し直してください)
8. インストールが開始されます。

■ **UNIX 系 OS の場合**

1. java コマンドにパスが通っていることを確認します。
2. コンソール画面で本製品の CD-ROM があるディレクトリに移動します。
3. iwp_iaf/install ディレクトリへ移動します。
4. コンソールから **java -jar ./setup.jar** と入力します。
   (**setup.sh** を実行しても起動できます。)
5. インストーラの画面が表示されます。
6. 画面の設定項目を設定して、[Next]ボタンを押します。以下同様
7. 最後に設定項目一覧が表示されます。その設定でよろしければ[OK]ボタンを押します。
   (間違っていた場合は、[Prev]ボタンで戻り、設定し直してください)
8. インストールが開始されます。

なお、Solaris および Linux などの UNIX 系 OS では、Xwindow が起動しているマシンでインストールする場合だけ、インストーラのウィンドウが表示されます。
Xwindow が起動していない場合、コンソールでの対話形式でインストールを行います。

強制的に対話形式でインストールを行うには、インストーラの起動コマンド末尾に「-con」を追加してください。
例 ： **java -jar ./setup.jar** -con

3.2.2 インストールディレクトリ構成

インストールディレクトリ構成について説明します。

3.2.2.1 Server Manager ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
│
├ bin/                          サーバモジュール 実行ファイル格納ディレクトリ
│  │
│  ├ manager.bat                Server Manager 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
│  │
│  ├ manager.sh                 Server Manager 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
│  │
│  ├ MgrService.exe             サービス化モジュールファイル （Windows 用）
│  │
│  ├ MgrService.ini             サービス化初期設定ファイル （Windows 用）
│  │
│  ├ service/                   ServiceManager 格納ディレクトリ （Windows 用）
│  │
│  └ tools/                     ツール格納ディレクトリ
│     │
│     ├ licedit.bat             ライセンス登録用コマンドファイル（Windows 用）
│     │
│     └ licedit.sh              ライセンス登録用コマンドファイル（UNIX 用）
│
├ conf/                         サーバモジュール 共通初期設定ファイル 格納ディレクトリ
│  │
│  ├ imart.xml                  intra-mart 基本設定ファイル
│  │
│  ├ system.xml                 intra-mart システム設定ファイル
│  │
│  ├ data-source.xml            データソース設定ファイル
│  │
│  ├ access-security.xml        アクセスセキュリティ設定ファイル
│  │
│  ├ design/                    デザイン関連設定ファイル格納ディレクトリ
│  │
│  ├ i18n/                      国際化関連設定ファイル格納ディレクトリ
│  │
│  ├ message/                   メッセージ・ファイル格納ディレクトリ
│  │
│  ├ log/                       ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
│  │
│  └ mail/                      メール送信 API 定義ファイル格納ディレクトリ
├ licenses/                     ライセンス情報保存ディレクトリ
│
├ log/                          intra-mart ログ出力ディレクトリ
│
└ specification/                仕様情報格納ディレクトリ
```


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.2.2 Application Runtime ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
  │
  ├ bin/                    サーバモジュール 実行ファイル格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ im_portal_common/    ポータルモジュールライブラリ格納ディレクトリ
  │  │
  │  └ service/             Service Manager 格納ディレクトリ（Windows 用）
  │
  ├ conf/                   サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ imart.xml            intra-mart 基本設定ファイル
  │  │
  │  ├ log/                 ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
  │  │
  │  └ datastore/           アプリケーション共通マスタ設定ファイル格納ディレクトリ
  │
  ├ doc/                    Web コンテンツ（JavaEE ベース開発モデルプログラム）格納ディレクトリ
  │
  ├ log/                    intra-mart ログ出力ディレクトリ
  │
  └ lib/                    intra-mart サーバモジュール 共通ライブラリ 格納ディレクトリ
```

3.2.2.3 Shared Memory Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
 │
 ├ bin/                    サーバモジュール 実行ファイル格納ディレクトリ
 │  │
 │  ├ server.bat          Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
 │  │
 │  ├ server.sh           Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
 │  │
 │  ├ SrvService.exe      サービス化モジュールファイル （Windows 用）
 │  │
 │  ├ SrvService.ini      サービス化初期設定ファイル （Windows 用）
 │  │
 │  └ service/            ServiceManager 格納ディレクトリ （Windows 用）
 │
 ├ log/                    intra-mart ログ出力ディレクトリ
 │
 └ conf/                   サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
    │
    ├ log/                 ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
    │
    └ imart.xml            intra-mart 基本設定ファイル
```

3.2.2.4 Permanent Data Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
 │
 ├ bin/                    サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
 │  │
 │  ├ server.bat          Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
 │  │
 │  ├ server.sh           Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
 │  │
 │  ├ SrvService.exe      サービス化モジュールファイル （Windows 用）
 │  │
 │  ├ SrvService.ini      サービス化初期設定ファイル （Windows 用）
 │  │
 │  └ service/            ServiceManager 格納ディレクトリ （Windows 用）
 │
 ├ log/                    intra-mart ログ出力ディレクトリ
 │
 └ conf/                   サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
    │
    ├ log/                 ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
    │
    └ imart.xml            intra-mart 基本設定ファイル
```


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.2.5 Storage Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
  |
  ├ bin/                          サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  ├ server.bat                 Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
  |  |
  |  ├ server.sh                  Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
  |  |
  |  ├ SrvService.exe             サービス化モジュールファイル（Windows 用）
  |  |
  |  ├ SrvService.ini             サービス化初期設定ファイル（Windows 用）
  |  |
  |  └ service/                   ServiceManager 格納ディレクトリ（Windows 用）
  |
  ├ conf/                         サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  ├ log/                       ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  └ imart.xml                  intra-mart 基本設定ファイル
  |
  ├ log/                          intra-mart ログ出力ディレクトリ
  |
  └ storage/                      Storage Service のリソース格納ディレクトリ
     |
     ├ bpw/                       BPW 用ディレクトリ
     |  |                         (アドバンスト版またはエンタープライズ forBPM 版のみ)
     |  |
     |  ├ database/                ワークフローで使用するインデックス生成用 SQL 等格納ディレクトリ
     |  |
     |  ├ excel_template/          プロセス定義情報のテンプレートファイル格納ディレクトリ
     |  |
     |  └ mail_template/           ワークフロー用メール文章のテンプレートファイル格納ディレクトリ
     |
     ├ bpms/                      BPMS 用 SQL ファイル格納ディレクトリ
     |                            (エンタープライズ for BPM 版のみ)
     |
     ├ portal/                    ポータル関連ファイル格納ディレクトリ
     |
     ├ system/                    システム用ディレクトリ
     |  |
     |  ├ basic/                   ログイングループ初期化用データ格納ディレクトリ
     |  |
     |  ├ sample/                  サンプルデータ格納ディレクトリ
     |  |
     |  ├ master/config/           アプリケーション共通マスタバッチインポートエクスポート用ディレクトリ
     |  |
     |  └ template/calendar/3      <IMART type="calendar">用テンプレートファイル格納ディレクトリ
     |
     ├ format_creator/            FormatCreator 用ディレクトリ
     |                            (アドバンスト版またはエンタープライズ for BPM 版のみ)
     |
     └ view_creator/              ViewCreator 用ディレクトリ
                                  （ViewCreator のソース出力機能を利用すると、
                                  storage/ 内の任意のディレクトリにソースを作成します）
```

3.2.2.6 Resource Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
  |
  ├ bin/                          サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  ├ server.bat                 Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
  |  |
  |  ├ server.sh                  Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
  |  |
  |  ├ SrvService.exe             サービス化モジュールファイル（Windows 用）
  |  |
  |  ├ SrvService.ini             サービス化初期設定ファイル（Windows 用）
  |  |
  |  ├ service/                   ServiceManager 格納ディレクトリ（Windows 用）
  |  |
  |  └ tools/                     ツール格納ディレクトリ
  |     |
  |     └ js2class.bat            JavaScript コンパイラコマンドファイル（Windows 用）
  |
  ├ conf/                         サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  ├ log/                       ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
  |  |
  |  └ imart.xml                  intra-mart 基本設定ファイル
  |
  ├ log/                          intra-mart ログ出力ディレクトリ
  |
```


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

```
└ pages/                          スクリプト開発モデルプログラム格納ディレクトリ
  │
  ├ platform/src/                 AFW スクリプト開発モデルプログラム格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ bpms/                      BPMS 格納ディレクトリ
  │  │                            (エンタープライズ for BPM 版のみ)
  │  │
  │  ├ bpw/                       BPW 格納ディレクトリ
  │  │                            (アドバンスト版またはエンタープライズ for BPM 版のみ)
  │  │
  │  ├ format_creator/            FormatCreator 格納ディレクトリ
  │  │                            (アドバンスト版またはエンタープライズ for BPM 版のみ)
  │  │
  │  ├ event_navigator/           イベントナビゲータ格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ system/                    システム設定ページ格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ template/                  テンプレートページ格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ tools/                     ツールページ格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ setup.js                   システム用の初期起動スクリプトファイル
  │  │
  │  ├ setup_bpms.js              BPMS 用の初期起動スクリプトファイル
  │  │
  │  └ source-config.xml          ソース設定ファイル
  │
  ├ product/src/                  intra-mart アプリケーション(イントラネット・スタートパックなど)の
  │                               スクリプト開発モデルプログラム格納ディレクトリ
  │
  │                               開発者が作成したスクリプト開発モデルプログラム格納ディレクトリ
  └ src/
    │                             初期起動スクリプトファイル
    └ init.js
```

3.2.2.7 Serialization Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
  │
  ├ bin/                          サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ server.bat                 Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
  │  │
  │  ├ server.sh                  Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
  │  │
  │  ├ SrvService.exe             サービス化モジュールファイル（Windows 用）
  │  │
  │  ├ SrvService.ini             サービス化初期設定ファイル（Windows 用）
  │  │
  │  └ service/                   ServiceManager 格納ディレクトリ（Windows 用）
  │
  ├ log/                          intra-mart ログ出力ディレクトリ
  │
  └ conf/                         サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
     │
     ├ log/                       ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
     │
     └ imart.xml                  intra-mart 基本設定ファイル
```

3.2.2.8 Schedule Service ディレクトリ構成

```
<%im_path%>
  │
  ├ bin/                    サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
  │  │
  │  ├ server.bat           Service Platform 起動用スクリプトファイル（Windows 用）
  │  │
  │  ├ server.sh            Service Platform 起動用スクリプトファイル（UNIX 用）
  │  │
  │  ├ SrvService.exe       サービス化モジュールファイル（Windows 用）
  │  │
  │  ├ SrvService.ini       サービス化初期設定ファイル（Windows 用）
  │  │
  │  └ service/             ServiceManager 格納ディレクトリ（Windows 用）
  │
  ├ log/                    intra-mart ログ出力ディレクトリ
  │
  └ conf/                   サーバモジュール 共通初期設定ファイル格納ディレクトリ
     │
     ├ log/                 ログ関連設定ファイル格納ディレクトリ
     │
     └ imart.xml            intra-mart 基本設定ファイル
```

3.2.2.9 サンプル

インストーラで「サンプルをインストール」を選択した場合、上記ディレクトリ構成に加えてサンプル用のディレクトリ・ファイルがインストールされます。

3.2.2.10 改行コードの制限

intra-mart を Windows にインストールする場合、以下の拡張子のファイルは改行コードが LF となります。

- .xml
- .license
- .dtd
- .xsd
- .wsdl

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3 運用マシン構成とインストール

本製品は、さまざまなマシン構成で運用することができます。
いくつかのマシン構成を例にとり、インストール手順を説明します。

3.2.3.1 注意事項

インストールの際に必要となる、入力項目の注意点を説明します。

（※1）**Server Manager** または **Service Platform** のアドレスを入力する項目では、
必ず **マシンの IP アドレス** を入力してください。
「localhost」と入力してしまうと、intra-mart は動作しません。
（例）**192.168.0.2**

（※2）**Service Platform の ID** とは、intra-mart のサーバを**ユニークに判定するための ID** です。
必ず他の Service Platform と 異なる ID を指定してください。
重複した ID を指定してしまうと、intra-mart は正しく運用できません。
また、intra-mart Administrator の表示用にも使用されます。
入力可能な文字列は **半角英数字** と、「**_(アンダースコア)**」、「**:(コロン)**」、「**.(ドット)**」のみです。

マシン構成の例では Service Platform の ID に［IP アドレス:ポート番号］を指定しています。
（例）Service Platform をインストールした **IP アドレス: 192.168.0.2**
Service Platform をインストールした **ポート番号: 49150**
のとき、**Service Platform の ID : 192.168.0.2:49150**

（※3）**HTTP サーバ** のアドレスを入力する項目では、
Application Server の IP アドレス を入力してください。
（例）**192.168.0.2**

（※4）**HTTP サーバ**のポートを入力する項目では、
Apache や **IIS** などの **HTTP サーバ**のポート番号を入力してください。

なお、**Oracle11g** を標準でインストールすると、ポート番号「**8080**」を使用してしまうため、
Application Runtime（Standalone 型時も含む）を同じコンピュータにインストールした場合に、
ネットワークのポート設定が衝突してサーバが起動できないことがあります。
インストールを行う際は、**ポート番号が重複しないように**、設定には十分注意してください。

（※5）**多言語環境を構築する際は、「サーバモジュールの文字コード」**、および、
「ウェブブラウザへ送信する文字コード」に**「UTF-8」**を選択してください。

（※6）AFW で **Application Runtime** をインストールする場合に指定する JDK のパスは、
Application Server に内包された JDK のパス、または、別途インストールした
JDK のパスのどちらを指定しても構いません。

（※7） **BPMS** の **HTTP サーバ**のアドレスを入力する項目では、**BPMS** に当てるサーバの IP アドレスを
入力してください。また、**BPMS** を標準でインストールすると、ポート番号「**8080**」を使用してしまうため、
Application Server（Standalone 型時も含む）を同じコンピュータにインストールした場合に、ネットワーク
のポート設定が衝突してサーバが起動できないことがあります。

インストールを行う際は、**ポート番号が重複しないように**、設定には十分注意してください。

（※8） ヒープサイズに関する注意事項について

初期ヒープサイズ、最大ヒープサイズについて

マニュアルに記載されている値は、あくまで**サンプル値**です。

この値につきましては、環境にあわせて変更していただく必要がございます。

ヒープサイズが小さすぎますと OutOfMemory が発生いたしますのでご注意ください。

（※9） なお、**Server Manager** はデフォルトではポート番号「**49152**」を使用します。

このポート番号は **Windows Vista** など、OS によっては既に使用されている場合がありますので、

その場合は、インストール時に別のポート番号を指定してください。

また、インストール後に、**Server Manager** のポート番号を変更する場合は、

<%im_path%>/conf/imart.xml を編集してください。

記入例

```
<intra-mart>
  <administration>
      <host address="192.168.0.1"/>
      <network port="49152" timeout="30">
...
</intra-mart>
```

デフォルトポート番号一覧

サーバ/OS	ポート番号
Oracle HTTP Server	8080
BPMS	8080
WebSphere	49152
WebLogic	49152
Windows Vista	49152

（※10） **AFW 7.0 Patch 3** 以上を適用しないで稼動する場合は、

必ず「**3.2.4** diconファイルの設定について」に記述されている作業を行ってください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3.2 intra-mart AppFrameworkのマシン構成

これから説明するマシン構成は、下記の状況を想定してインストールする場合の <例> となっています。

- ■ OS : Windows
- ■ サーバモジュールの文字コード : Windows-31J
- ■ ウェブブラウザへ送信する文字コード : Windows-31J
- ■ 製品の種類 : AFW Standard

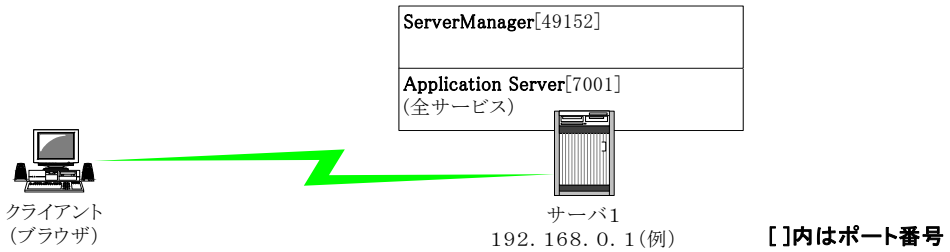
他の OS にインストールする場合は、OS に合わせて各文字コードを選択してください。
（ただし、**多言語環境を構築する際は、「サーバモジュールの文字コード」**、および、**「ウェブブラウザへ送信する文字コード」**に**「UTF-8」**を選択してください。）

※ マシン構成を分散にする場合（以下の例では「マシン構成 2～マシン構成 3」）は、Application Runtime を動作させる Application Server に、他のサービスをインストールすることはできません。

3.2.3.2.1 **マシン構成 1**

■ **サーバを 1 台で運用する**

サーバに **Application Server** と **すべてのサービス** をインストールします。



3.2.3.2.1.1 **サーバ 1 へのインストール**

■ **すべてのサービスをインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください（※6）
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	1
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
ウェブブラウザへ送信する文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.1 （※1）
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.1 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001 （※4）
Server Manager が使用するポート番号を入力してください	49152 （※9）
Service Platform の ID を入力してください	APP:192.168.0.1 （※2）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

アドバンスト、エンタープライズ for BPM をインストールする場合は、インストールを行う製品の種類で「2:アドバンスト」または「3:エンタープライズ for BPM」を選択してください。エンタープライズ for BPMの詳細については、「3.2.3.3 エンタープライズ for BPMのインストール」を参照してください。

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

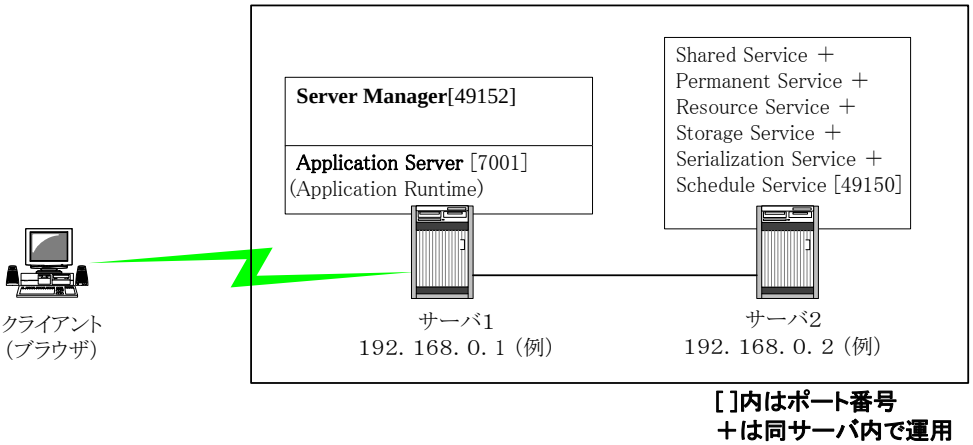
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3.2.2 **マシン構成 2**

■ **サーバを 2 台で運用する**

サーバ 1 に **Application Runtime** と **Server Manager** をインストールします。

サーバ 2 に **その他のサービス（Application Runtime 以外）** をインストールします。



3.2.3.2.2.1 **サーバ 1 へのインストール**

■ **Server Manager と Application Runtime をインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください（※6）
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	1
Service Platform の種類を選択してください (1:Application Runtime 2:その他のサービスを選択する)?	1
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
ウェブブラウザへ送信する文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.1 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001（※4）
Server Manager が使用するポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	APP:192.168.0.1（※2）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

3.2.3.2.2.2 サーバ 2 へのインストール

■ その他のサービス（Application Runtime 以外）をインストールします

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	3
Service Platform の種類を選択してください (1:Application Runtime 2:その他のサービスを選択する)?	2
Shared Memory Service をインストールする (y/n)?	y
Permanent Data Service をインストールする (y/n)?	y
Resource Service をインストールする (y/n)?	y
Storage Service をインストールする (y/n)?	y
Serialization Service をインストール (y/n)?	y
Schedule Service をインストールする (y/n)?	y
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.2（※1）
Service Platform が使用するポート番号を入力してください	49150
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.1 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001（※4）
Server Manager のアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
Server Manager のポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	192.168.0.2:49150（※2）
Service Platform の初期ヒープサイズ (-Xms) [MB] (例：64)	64（※8）
Service Platform の最大ヒープサイズ (-Xmx) [MB] (例：128)	128（※8）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3.2.3 **マシン構成 3**

■ **サーバを 4 台で運用する**

サーバ 1 に **Server Manager** をインストールします。

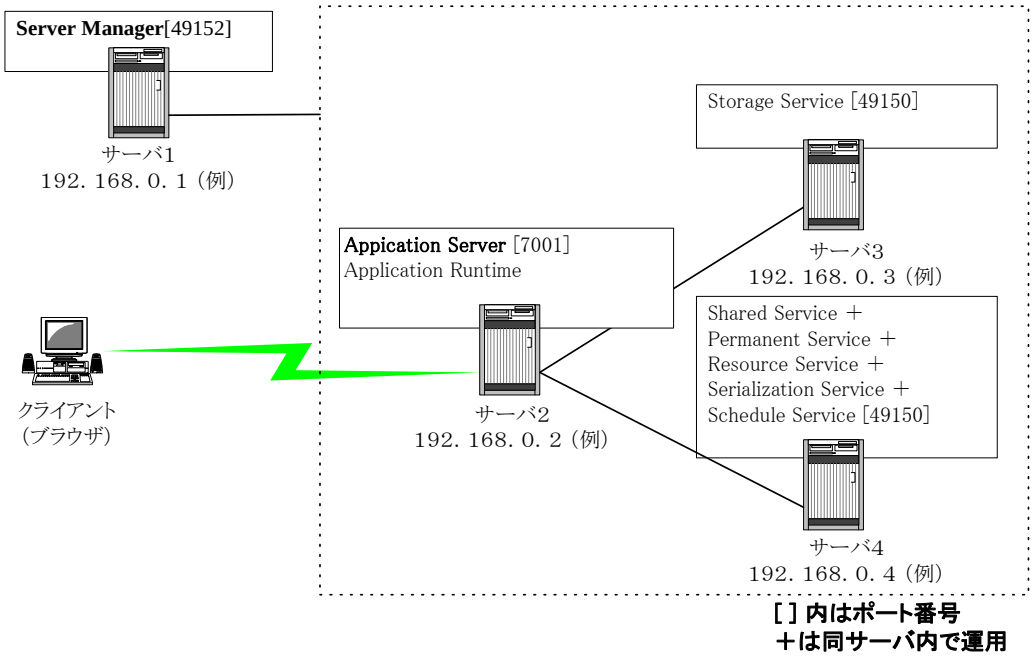
サーバ 2 に **Application Runtime** をインストールします。

サーバ 3 に **Storage Service** をインストールします。

サーバ 4 に **その他のサービス** をインストールします。

※ Storage Service は、利用度が低ければ、サーバ 4 にインストールすることもできます。

※ アクセス頻度やアプリケーションの内容にもよりますが、サーバ 2 またはサーバ 3 を DB サーバと兼用することもできます。



3.2.3.2.3.1 サーバ 1 へのインストール

■ **Server Manager をインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	2
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
ウェブブラウザへ送信する文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
Server Manager が使用するポート番号を入力してください	49152 （※9）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3.2.3.2 サーバ 2 へのインストール

■ **Application Runtime をインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください（※6）
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	3
Service Platform の種類を選択してください (1:Application Runtime 2:その他のサービスを選択する)?	1
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
ウェブブラウザへ送信する文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.2（※1）
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.2 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001（※4）
Server Manager のアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
Server Manager のポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	APP:192.168.0.2（※2）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

3.2.3.2.3.3 サーバ 3 へのインストール

■ **Storage Service をインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	3
Service Platform の種類を選択してください (1:Application Runtime 2:その他のサービスを選択する)?	2
Shared Memory Service をインストールする (y/n)?	n
Permanent Data Service をインストールする (y/n)?	n
Resource Service をインストールする (y/n)?	n
Storage Service をインストールする (y/n)?	y
Serialization Service をインストール (y/n)?	n
Schedule Service をインストールする (y/n)?	n
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.3（※1）
Service Platform が使用するポート番号を入力してください	49150
Server Manager のアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
Server Manager のポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	192.168.0.3:49150（※2）
Service Platform の初期ヒープサイズ (-Xms) [MB] (例：64)	64（※8）
Service Platform の最大ヒープサイズ (-Xmx) [MB] (例：128)	128（※8）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.3.2.3.4 サーバ 4 へのインストール

■ その他のサービス（**Application Runtime**、**Storage Service** 以外） をインストールします

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin) 2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework 4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	1
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください (1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	2
インストールするモジュールを選択してください。 (1:Server Manager と Service Platform 2:Server Manager のみ 3:Service Platform のみ)?	3
Service Platform の種類を選択してください (1:Application Runtime 2:その他のサービスを選択する)?	2
Shared Memory Service をインストールする (y/n)?	y
Permanent Data Service をインストールする (y/n)?	y
Resource Service をインストールする (y/n)?	y
Storage Service をインストールする (y/n)?	n
Serialization Service をインストール (y/n)?	y
Schedule Service をインストールする (y/n)?	y
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.4（※1）
Service Platform が使用するポート番号を入力してください	49150
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.2 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001（※4）
Server Manager のアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
Server Manager のポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	192.168.0.4:49150（※2）
Service Platform の初期ヒープサイズ (-Xms) [MB] (例：64)	64（※8）
Service Platform の最大ヒープサイズ (-Xmx) [MB] (例：128)	128（※8）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

3.2.3.3 エンタープライズ for BPMのインストール

エンタープライズ for BPM を選択すると、**BPMS** 用の **Web サービス**等のモジュールがインストールされます。

エンタープライズ for BPM のインストールの際は、以下の点にご注意ください。

※エンタープライズ **for BPM** インストール時の注意点

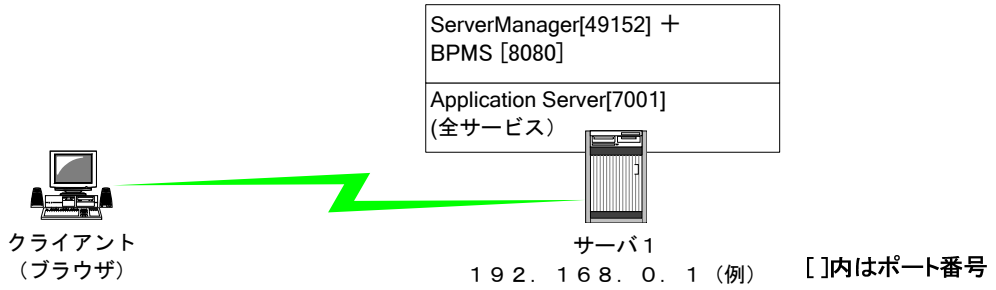
■**BPMS** をご利用になる際は、別途インストールする必要があります。
詳しくは、「BPM|Server セットアップガイド」を参照してください。
■エンタープライズ for BPM をインストールした場合は、**BPMS** の HTTP サーバの設定が必要となります。**BPMS** の HTTP サーバは**デフォルトで**ポート番号「**8080**」を専有してしまいますので、サーバ 1 台で運用する場合は、他のネットワークポートを重複しないように設定する必要があります。

エンタープライズ for BPM のインストール手順をマシン構成 4 を例に解説します。
（**エンタープライズ for BPM による他のマシン構成の設定に関しては、この手順を参考にしてください。**）

3.2.3.3.1 マシン構成 4

■ **サーバを 1 台で運用する**

サーバに **Application Server**、**すべてのサービス**をインストールします。
（サーバ 1 台での運用となるため、**ポート番号が重複しないように**、設定には十分注意してください。）



3.2.3.3.1.1 サーバ1へのインストール

■ **すべてのサーバモジュールをインストールします**

1. インストーラを起動します。（詳しくは 3.2.1 インストーラの起動と操作 を参照）
2. 以下の手順でインストールを進めます。 (以下の例は Windows、スタンダードで説明しています)

手順	入力
製品を選択してください (1:intra-mart WebPlatform (Resin)　2:intra-mart WebPlatform (JBoss) 3:intra-mart AppFramework　4:intra-mart DebugServer)?	3
製品の種類を選択してください (1:スタンダード 2:アドバンスト 3:エンタープライズ for BPM)?	3
サーバモジュールをインストール(y/n)?	y
IM-Administrator をインストール(y/n)?	y
JDK のホームディレクトリを入力してください	パスをフルパスで入力してください（※6）
インストール先を入力してください	パスをフルパスで入力してください (この場所を%im_path%と表現します)
サーバモジュールの構成を選択してください	1

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

(1:スタンドアロン環境を構築 2:分散環境を構築)?	
サーバモジュールの文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
ウェブブラウザへ送信する文字コードを選択してください (1:Windows-31J 2:Shift_JIS 3:EUC-JP 4:UTF-8)?	1（※5）
このホストのアドレスを入力してください	192.168.0.1（※1）
HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.1 (※3)
HTTP サーバのポート番号を入力してください	7001（※4）
BPMS の HTTP サーバのアドレスを入力してください	192.168.0.1 (※7)
Server Manager が使用するポート番号を入力してください	49152（※9）
Service Platform の ID を入力してください	APP:192.168.0.1（※2）
サンプルをインストール(y/n)?	n
以下のスタートメニューに登録します	intra-mart AppFramework Ver7.0
この構成でよろしいですか(y/n)?	y

注釈（※）の詳細については、「3.2.3.1 注意事項」を参照してください。

3.2.3.4 その他のマシン構成

本製品では、各サービスを 各マシンに どのように配置しても運用できるように設計されています。
最低限必要なサービスが存在すれば、各サービスが どの Service Platform 上に存在しても運用が可能となります。

■ **運用に必要となる各サービスの数**

Server Manager×1
Application Server×1～∞
Shared Memory Service×1～2
Permanent Data Service×1～2
Resource Service×1～2
Storage Service×1～2
Serialization Service×1～2

これらのサービスは、
待機系の**セカンダリサービス**を立てることができます。
（詳細は「**3.2.3.4.1 各サービスの待機系を立てる場合**」を参照）

Schedule Service×0～2（使用しない場合は、インストールの必要はありません。）

■ **運用に最低限必要になる各サービスの数**

Server Manager×1
Application Server×1
Shared Memory Service×1
Permanent Data Service×1
Resource Service×1
Storage Service×1
Serialization Service×1

これまでに説明したマシン構成は、あくまでも運用の「**マシン構成の例**」となります。
前記以外のマシン構成でも運用は可能です。
インストールを行う前に、マシン構成の例を参考にしてマシン構成図を作成することをお勧めします。
マシン構成図を作成するポイントは、各マシンの IP アドレスと、運用する各 Service Platform のポート番号と、Service Platform 上で運用する各サービスを明記することです。
以上のことが明記してあれば、インストールはスムーズに行うことができるでしょう。

3.2.3.4.1 各サービスの待機系を立てる場合

各サービスは**セカンダリサービス**を立てることができます。
それによって、プライマリのサービスが落ちてもセカンダリが処理を引き継ぐことができます。

前記のマシン構成では、ApplicationRuntime 以外の各サービスは1つだけをインストールする例を挙げてきましたが、同じサービスの2つ目をどこかのサーバにインストールすると、Server Manager へ自情報が通知されて、自動的にセカンダリサービスを立てることになります。

同サービスを2つインストールした場合の、プライマリとセカンダリの位置づけは、
先に起動させたサービスが **プライマリ**、後に起動させたサービスが **セカンダリ** となります。

Permanent Data Service、Resource Service、および Storage Service にセカンダリサービスを立てたときは、指定のディレクトリをディスク共有する必要があります。

■ ディスクの共有方法について

以下の表の「ディスク共有するディレクトリ」を、各コンピュータ間で共有させます。
（Windows のときは、ネットワークドライブ。 UNIX のときは NFS や Samba などで行う。）
同一のサービスを複数台同時に稼動させて、**フォールトトレランス機能** を利用したシステム構築をする場合は、すべての同一サービスが 共通のデータを読み書きできるようにする必要があります。

サービス	ディスク共有するディレクトリ	**imart.xml の設定項目**
Permanent Data Service	<%im_path%>/treasure	intra-mart/platform/permanent/treasure-root
Resource Service	<%im_path%>/pages	intra-mart/platform/resource/jssp /source-path/・・・・/ directory
Storage Service	<%im_path%>/storage	intra-mart/platform/storage/file-root

ディスク共有するディレクトリが、各サービスをインストールした場所と異なる場合、ディレクトリの参照先を変更することができます。
各サービスのインストール先に保存されている 設定ファイル**<%im_path%>/conf/imart.xml** を編集します。
上記の表の、各サービスの「imart.xml の設定項目」に示した設定項目に対して、絶対パス形式でディレクトリを指定することにより、コンピュータ内の任意のディレクトリをデータ保存ディレクトリとして動作させることが可能です。
例えば、ネットワークドライブに設定されているディレクトリを指定することにより、他のコンピュータとデータを共有することが可能になります。
※各設定項目の詳細に関しては Service Platform 設定ガイドを参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.4 diconファイルの設定について

この作業は、**AFW 7.0 Patch 3** 以上を適用することで自動的に行われます。 **AFW 7.0 Patch 2** 以前の環境で稼動する場合、この作業を必ず行ってください。

Application Runtime をインストールしたディレクトリを <**%im_path%**> とします。
<%im_path%>/doc/imart/WEB-INF/classes/im_hotdeploy.dicon をテキストエディタで開き、以下のように <include>、<component>の 4 行をコメントアウトします。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<!DOCTYPE components PUBLIC "-//SEASAR//DTD S2Container 2.4//EN"
  "http://www.seasar.org/dtd/components24.dtd">
<components>
  <!--
  <include path="convention.dicon"/>
  <include path="customizer.dicon"/>
  <include path="creator.dicon"/>
  <component class="org.seasar.framework.container.hotdeploy.HotdeployBehavior"/>
  -->
</components>
```

編集後 dicon ファイルを保存しテキストエディタを終了してください。
以上で、dicon ファイルの設定は終了です。

3.2.5 ライセンス登録について

以下の手順でライセンスの登録を行ってください。

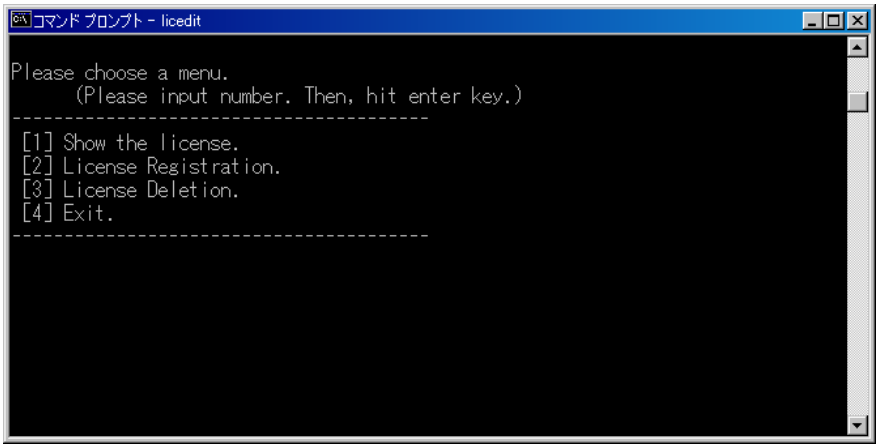
※ 試用版としてご利用の場合は、ライセンスを登録する必要はありません。

ライセンスの登録後は、全てのサーバの再起動が必要です。

Server Manager をインストールしたディレクトリを <%**im_path**%> とします。

1. <%im_path%>/bin/tools に移動して、以下のコマンドを実行します。
   （この際、Server Manager は停止させてください。）
   Windows の場合 ： **licedit.bat**
   UNIX の場合 ： **./licedit.sh**

2. ライセンスツールが起動し、ライセンス登録用メニューが表示されます。



3. メニューから[2]を入力して、ライセンスキーを登録します。
   正常に登録されると、登録されたライセンスが表示されます。
4. ライセンスの状態を参照するには、メニューから[1]を入力します。
5. ライセンスキーの削除を行うには、メニューから[3]を入力します。
   登録済みのライセンスキーが表示されるので、削除するライセンスキーの番号を入力してください。
6. ライセンスツールを終了するには、メニューから[4]を入力します。
7. 全てのサーバを再起動してください。

以上で、インストール後のライセンス登録は終了です。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.2.6 インストーラのサイレント・モードについて

intra-mart のインストーラには、一度行ったインストール手順を再現させる「サイレント・モード」が用意されています。サイレント・モードでインストールを行う手順を以下に示します。

1. インストールの設定手順をファイルに書き出す
   （詳細は「3.2.6.1 インストールの設定手順をファイルに書き出す」を参照）

2. 設定ファイルを読み込んでインストール
   （詳細は「3.2.6.2 設定ファイルを読み込んでインストール」を参照）

3.2.6.1 インストールの設定手順をファイルに書き出す

インストーラ起動時に、オプション「**-s 設定ファイル名**」を指定することにより、これから行うインストールの設定手順を保存することが出来ます。

1. java コマンドにパスが通っていることを確認します。
2. 本製品の CD-ROM の iwp_iaf/install/setup.jar を適当なディレクトリにコピーします。
3. コンソール画面にて、コピーした setup.jar のあるディレクトリに移動します。
4. コンソールから以下のコマンドを入力します。

```
java -jar ./setup.jar -s 設定ファイル名
```

※ 設定ファイル名は setup.jar のあるディレクトリからの相対パスで指定してください。

5. インストーラが起動します。(コンソールでの対話形式でインストールを行います)
6. インストーラの指示にしたがって、値を入力します。
7. 最後に設定項目一覧が表示されます。その設定でよろしければ[y]を入力します。
8. インストールが開始されます。

上記で行ったインストールの設定手順が、設定ファイルに出力されます。

3.2.6.2 設定ファイルを読み込んでインストール

インストーラ起動時に、オプション「**-f 設定ファイル名**」を指定することにより、「3.2.6.1 インストールの設定手順をファイルに書き出す」にて行ったインストール手順に則って、インストールが自動的に開始されます。

1. コンソール画面にて、コピーした setup.jar のあるディレクトリに移動します。
2. コンソールから以下のコマンドを入力します。

```
java -jar ./setup.jar -f 設定ファイル名
```

※設定ファイル名は setup.jar のあるディレクトリからの相対パスで指定してください。

3.3 Application Serverの設定

3.3.1 WebSphereの設定

AFW を WebSphere で利用できるように設定を行います。
ここでは、WebSphere をインストールしたディレクトリを **<%WAS_path%>** と表記します。
また、Application Runtime をインストールしたディレクトリを **<%im_path%>** と表記します。

WebSphere 上で AFW を稼働させる場合には、以下の条件を満たしている必要があります。

- WebSphere に DataSource が登録されていること
- デプロイする WAR ファイルが存在すること
- <% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml が設定されていること

これらの条件を満たしている環境で、WAR ファイルのデプロイを行います。

3.3.1.1 デプロイ作業前の注意点

AFW をインストールした際に、文字コードの選択で『EUC-JP』を指定した場合は、デプロイの前に文字コードの設定を変更する必要があります。
[サーバモジュールの文字コード]および[ウェブブラウザへ送信する文字コード]のどちらかひとつでも該当する場合は、以下の作業を行ってください。

1. WebSphere のインストール先にある、converter.properties ファイルをテキストエディタで開きます。

2. converter.properties 内の「EUC-JP」の設定値が、導入直後は[EUC-JP=Cp33722c]になっています。
この設定を、[EUC-JP=EUC-JP] に変更してください。

[converter.properties]の変更内容

```
Shift_JIS=Cp943C
EUC-JP=EUC-JP
EUC-KR=Cp970
EUC_KR=Cp970
EUC-TW=Cp964
Big5=Cp950
GB2312=EUC_CN
ISO-2022-KR=ISO2022KR
```

3. converter.properties ファイルを保存します。

以上で、文字コードの設定を変更する作業は終了です。
詳細は、日本アイ・ビー・エム社の「テクニカル情報」のサイト、
http://www-6.ibm.com/jp/software/websphere/developer/w40/v40hintstips.html をご覧ください。
（2008 年 7 月 7 日現在）

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.1.2 WebSphere Application Serverのデプロイ例

AFW へアクセスする URL は「/imart」で説明します。
（「/imart」以外のコンテキストルートを利用する場合、「6.6 コンテキストルートを変更する場合」を参照してください。）

以下の説明では、**IBM WebSphere Application Server 6.1（Windows 版）**を例にしています。
（WebSphere の他のリビジョン、エディションの場合、設定方法が異なる場合がありますので、ご不明な点は WebSphere の販売元または製造元へお問い合わせください。）

WebSphere Application Server のデプロイ手順を、以下に示します。

1. im_portal_commonの組み込み
   （詳細は「3.3.1.2.1 im_portal_commonの組み込み」を参照）
2. WARファイルの作成
   （詳細は「3.3.1.2.2 WARファイルの作成」を参照）
3. WebSphere にDataSource（JDBC）を登録
   （詳細は「3.3.1.2.3 WebSphere にDataSource（JDBC）を登録」を参照）
4. WARファイルのデプロイ
   （詳細は「3.3.1.2.4 WARファイルのデプロイ」を参照）
5. ibm-web-ext.xmiの編集
   （詳細は「3.3.1.2.5 ibm-web-ext.xmiの編集」を参照）

※ 3. は毎回行う必要はありません。

3.3.1.2.1 im_portal_commonの組み込み

im_portal_common を組み込み、intra-mart のポータルを有効にさせます。
<%**im_path**%>/bin/im_portal_common/ディレクトリに格納されている **portlet-api-1.0.jar 以外**の全 jar ファイルを、<%**im_path**%>doc/imart/WEB-INF/lib にコピーします。

3.3.1.2.2 WARファイルの作成

AFW の WAR ファイルを作成します。
コンテンツの変更やクラスの再コンパイル等を行った場合、この作業が必ず必要となります。

1. コンソール画面で以下のディレクトリに移動します。
   <%**im_path**%>/bin

2. 以下のコマンドを実行して WAR ファイルを作成します。

```
zippack  -o  <WAR ファイル名>  <コンテキストルートパス>
```

［例］

Windows	:	zippack -o ..¥imart.war ..¥doc¥imart
UNIX	:	zippack.sh -o ../imart.war ../doc/imart

```
$ cd <%im_path%>/bin
$ ./zippack.sh -o ../imart.war ../doc/imart
```

このコマンドを実行することで、**<%im_path%>/imart.war** として WAR ファイルが作成されます。

3.3.1.2.3 WebSphere にDataSource（JDBC）を登録

DataSource を登録する方法について、例を挙げて説明します。

（ここでは Oracle、DB2、Microsoft SQL Server 2005、PostgreSQL について説明します。各 DB の JDBC ドライバがインストール済みであるものとします）

※ DataSource の登録は、一度だけ行えばよい作業です。デプロイ作業毎に行う必要はありません。

3.3.1.2.3.1 管理コンソールへのログイン

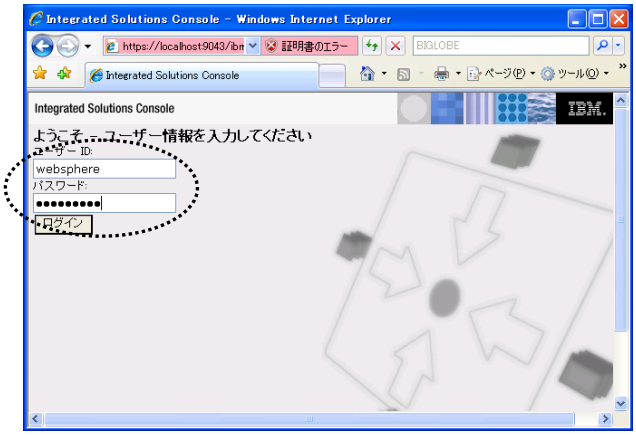
1. WAS の「ファースト・ステップ」を起動します。

2. WAS が停止している場合、「ファースト・ステップ」の [サーバの始動]で WAS を始動します。

3. 「ファースト・ステップ」の [管理コンソール]で管理コンソールを起動します。

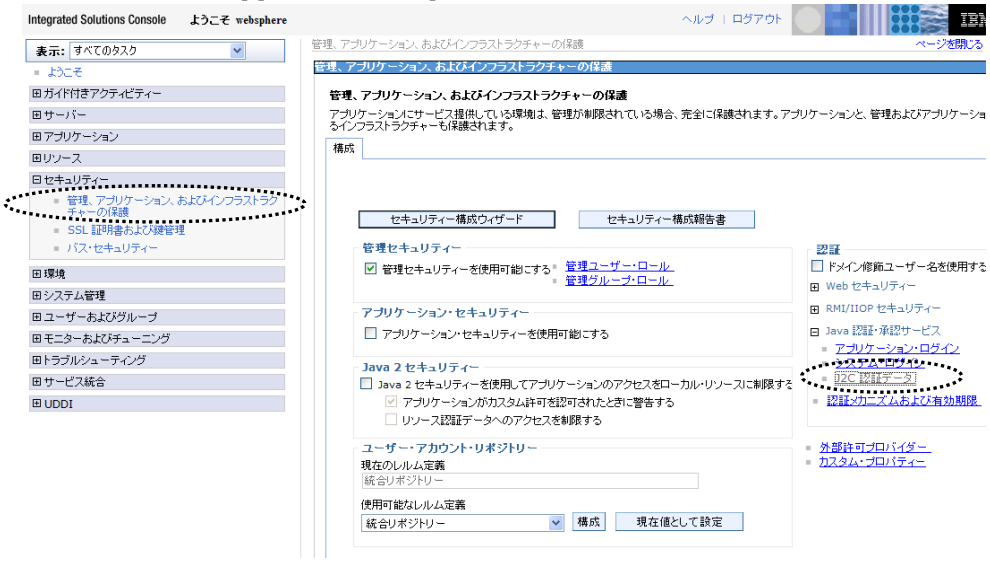
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4. 管理コンソールにログインします。

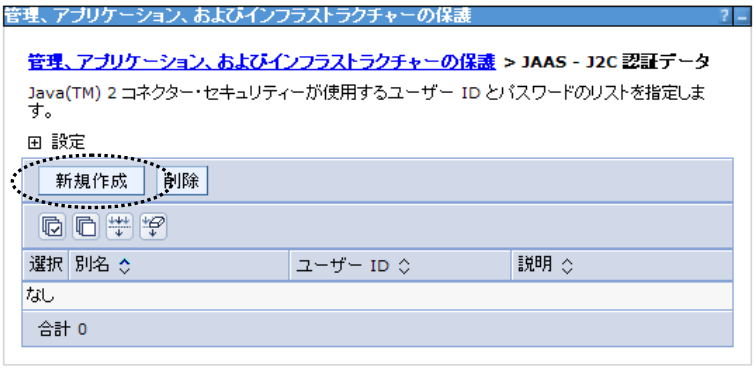


3.3.1.2.3.2 データベースに接続するDBユーザ情報を設定

1. [セキュリティー]-[管理、アプリケーション、およびインフラストラクチャーの保護]の[認証]-[Java 認証・承認サービス]-[J2C 認証データ] を選択します。



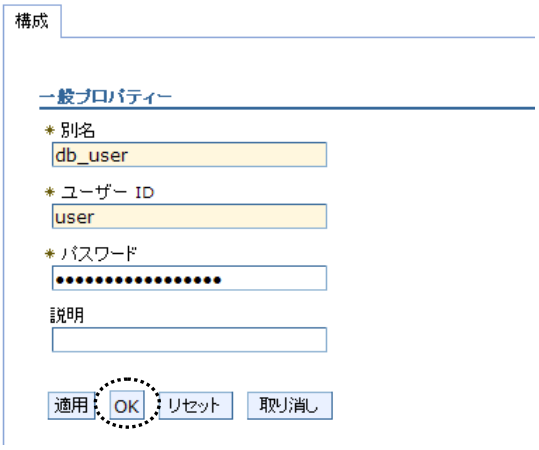
2. [新規作成] ボタンをクリックします。



3. 別名（任意）、DB ユーザ ID、パスワードを入力し、[OK] ボタンをクリックします。

ここでは別名を「db_user」とします。

これで、DB ユーザ情報の登録は終わりです。

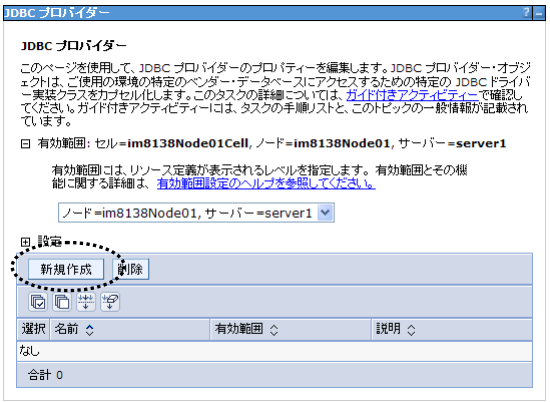


3.3.1.2.3.3 JDBC プロバイダーの設定

3.3.1.2.3.3.1 Oracleの場合

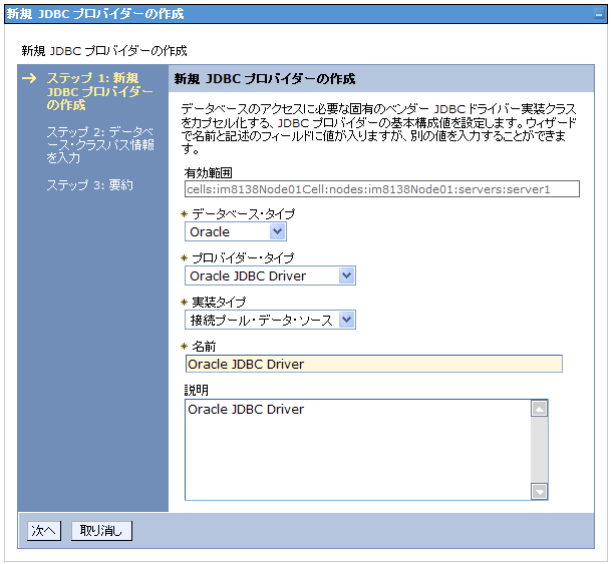
1. メニューから[リソース]- [JDBC]- [JDBC プロバイダー] を選択します。

2. 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンを押します。



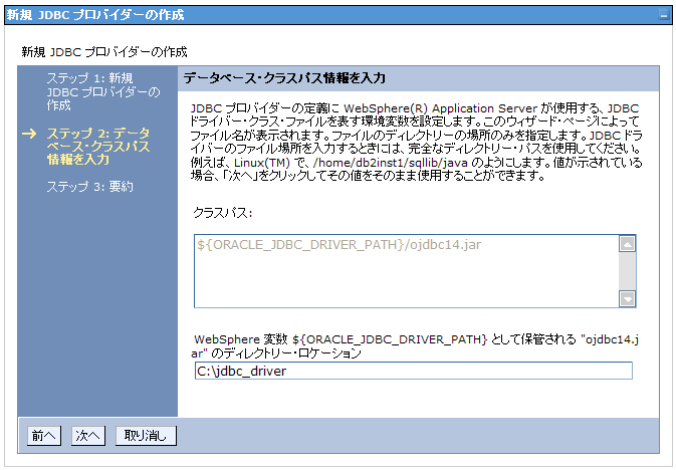
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3. [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンを押します。



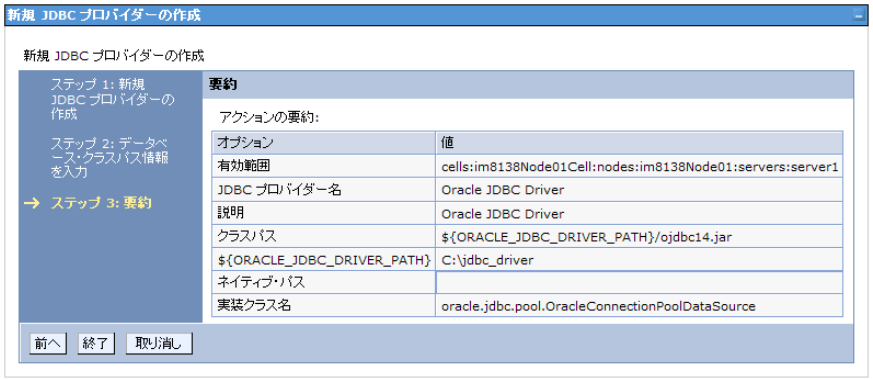
データベース・タイプ	プロバイダー・タイプ	実装タイプ
Oracle	Oracle JDBC Driver	接続プール・データ・ソース

4. JDBC ドライバのディレクトリ・ロケーションを設定し、[次へ]ボタンを押します。



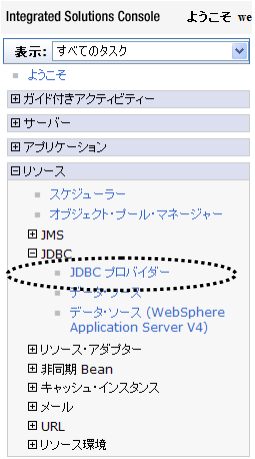
5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンを押します。

これで、JDBC プロバイダーの設定は終わりです。

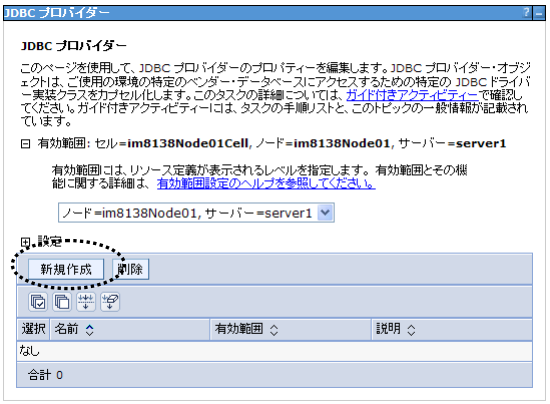


3.3.1.2.3.3.2 DB2 の場合

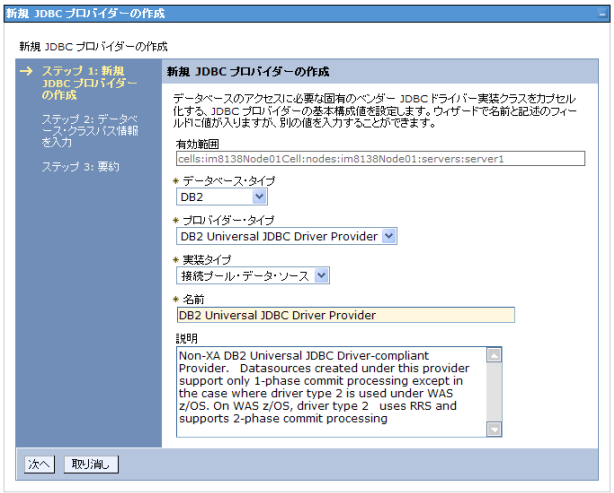
1. メニューから[リソース]- [JDBC]- [JDBC プロバイダー] を選択します。



2. 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンを押します。



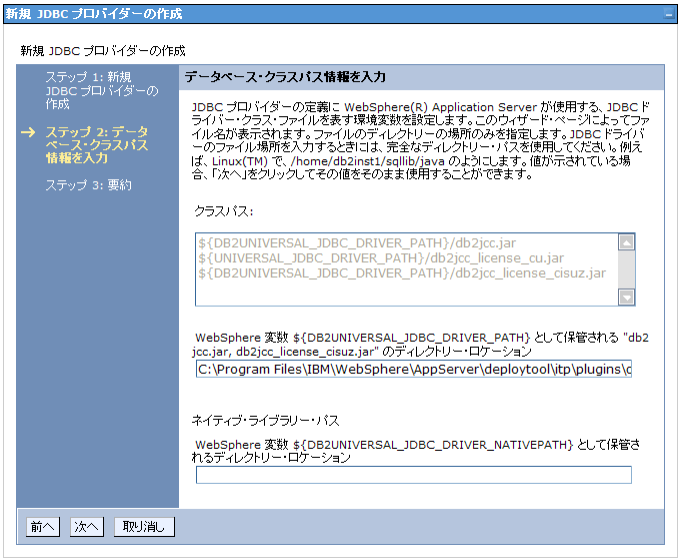
3. [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンを押します。



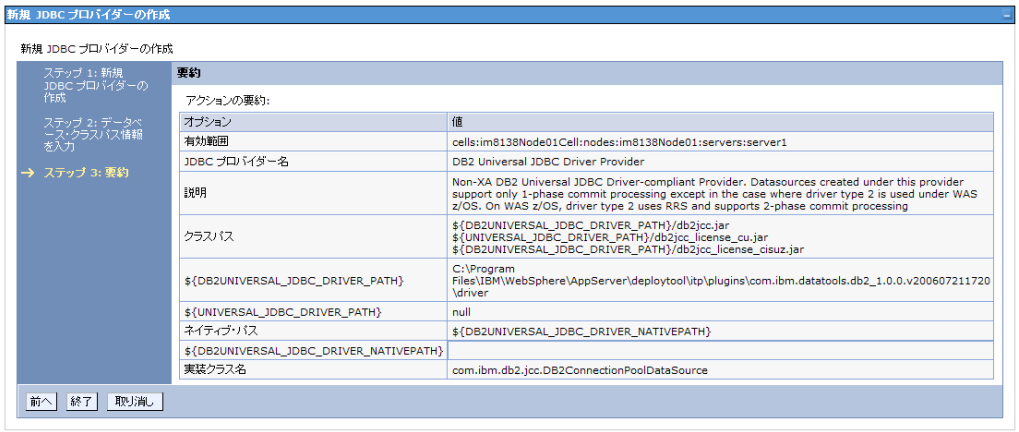
データベース・タイプ	プロバイダー・タイプ	実装タイプ
DB2	DB2 Universal JDBC Provider	接続プール・データ・ソース

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4. JDBC ドライバのディレクトリ・ロケーションを設定し、[次へ]ボタンを押します。



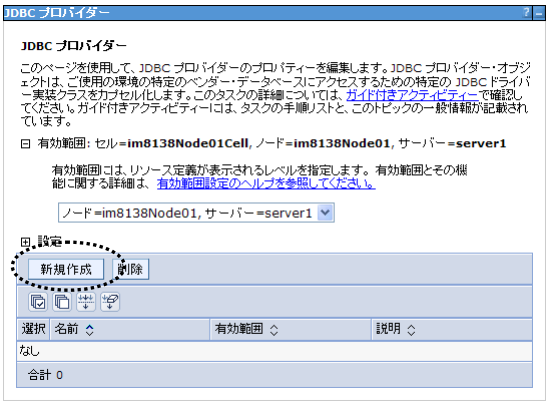
5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンを押します。
これで、JDBC プロバイダーの設定は終わりです。



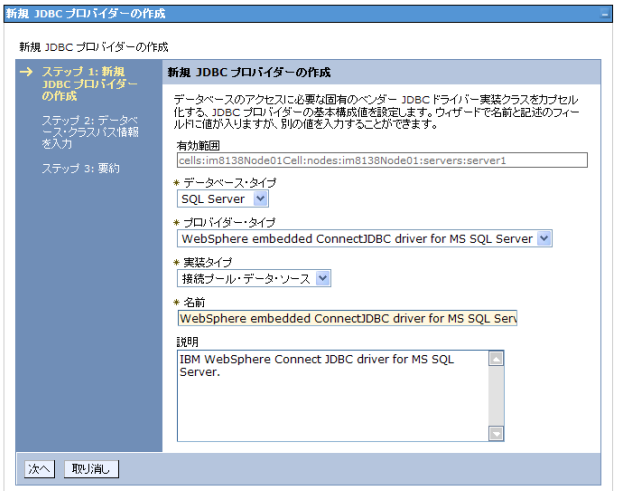
3.3.1.2.3.3.3 Microsoft SQL Server 2005 の場合

1. メニューから[リソース]- [JDBC]- [JDBC プロバイダー] を選択します。

2. 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンを押します。



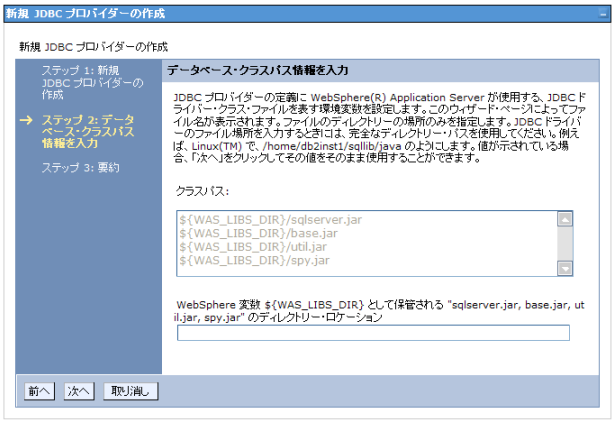
3. [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンを押します。



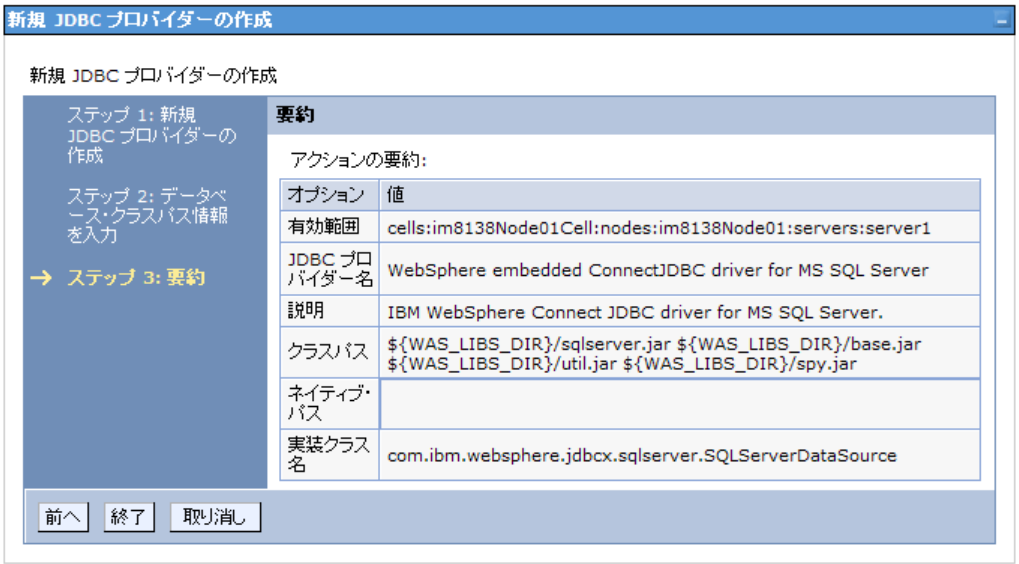
データベース・タイプ	プロバイダー・タイプ	実装タイプ
SQL Server	WebSphere embedded ConnectJDBC driver for MS SQL Server	接続プール・データ・ソース

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4. JDBC ドライバのディレクトリ・ロケーションを設定し、[次へ]ボタンを押します。

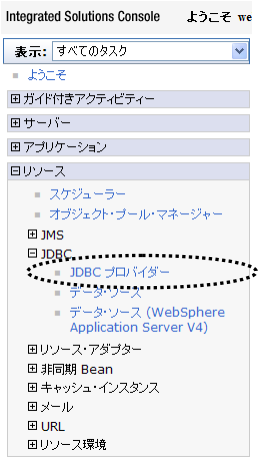


5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンを押します。
これで、JDBC プロバイダーの設定は終わりです。

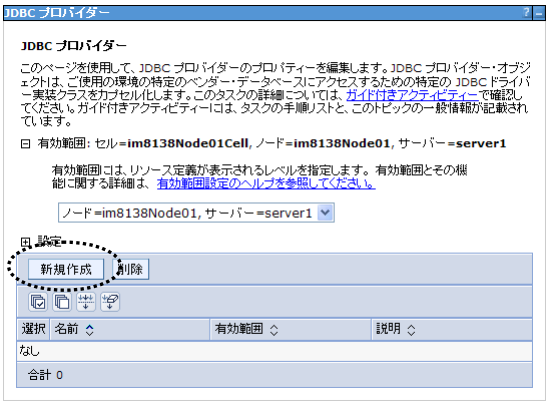


3.3.1.2.3.3.4 PostgreSQLの場合

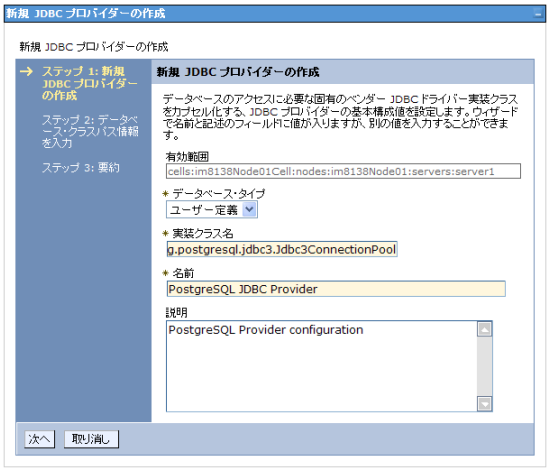
1. メニューから[リソース]- [JDBC]- [JDBC プロバイダー] を選択します。



2. 「JDBC プロバイダー」画面で [新規作成] ボタンを押します。



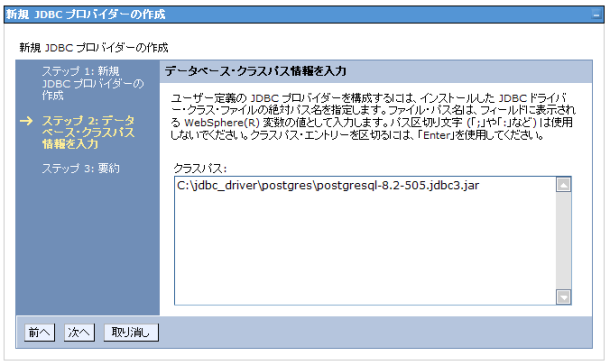
3. [データベース・タイプ]、[プロバイダー・タイプ]、[実装タイプ]を設定し、[次へ]ボタンを押します。



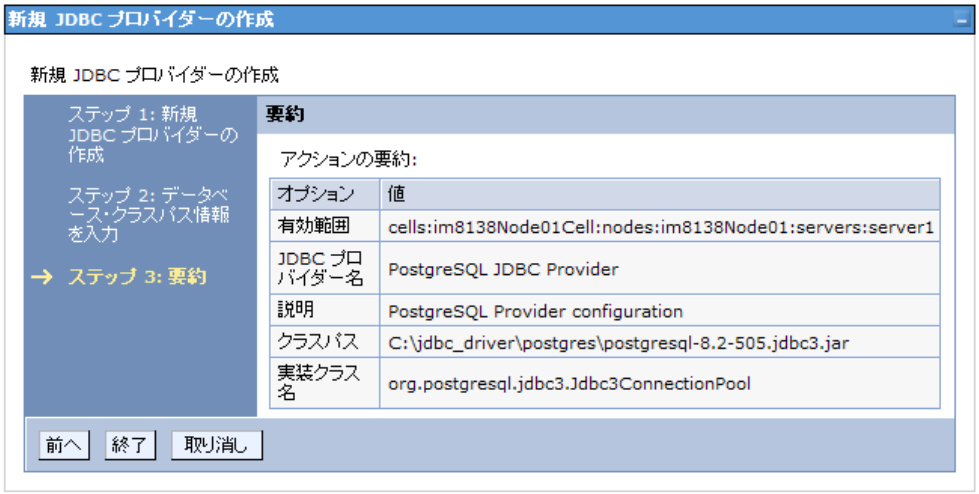
データベース・タイプ	実装クラス名
ユーザ定義	org.postgresql.jdbc3.Jdbc3ConnectionPool

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4. JDBC ドライバー・クラス・ファイルの絶対パス名を指定し、[次へ]ボタンを押します。



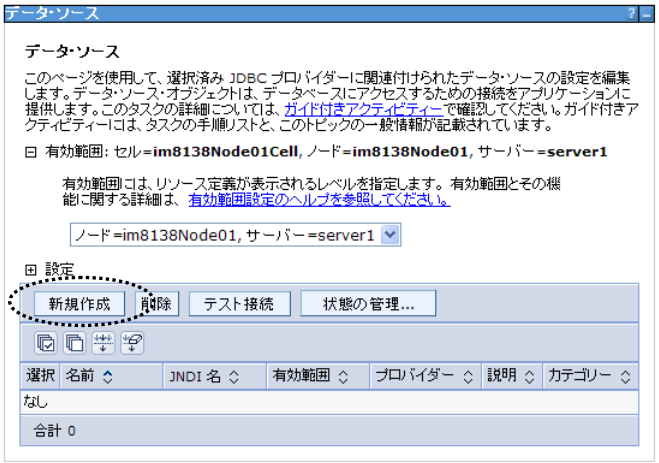
5. 設定内容を確認し、[終了]ボタンを押します。
これで、JDBC プロバイダーの設定は終わりです。



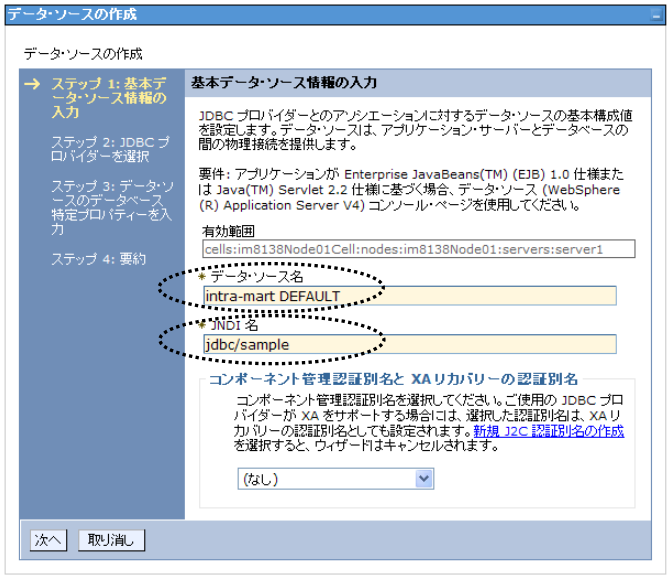
3.3.1.2.3.4 データ・ソースの設定

1. メニューから[リソース]- [JDBC]- [データソース] を選択します。

2. 「データ・ソース」画面で [新規作成] ボタンを押します。



3. [データ・ソース名] と [JNDI 名]を入力し、[次へ] ボタンを押します。
ここでは [データ・ソース名] を「intra-mart DEFAULT」、[JNDI 名] を「jdbc/sample」とします。



Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

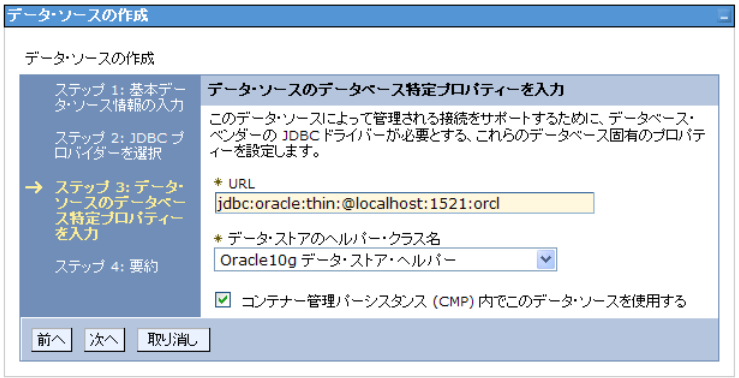
4. 「3.3.1.2.3.3 JDBC プロバイダーの設定」で作成したJDBCプロバイダーを選択し、[次へ] ボタンを押します。

5. データ・ソースのデータベース特定プロパティを入力し、 [次へ] ボタンを押します。

◆ Oracle の場合

[URL]、[データ・ストアのヘルパー・クラス名]を入力します。

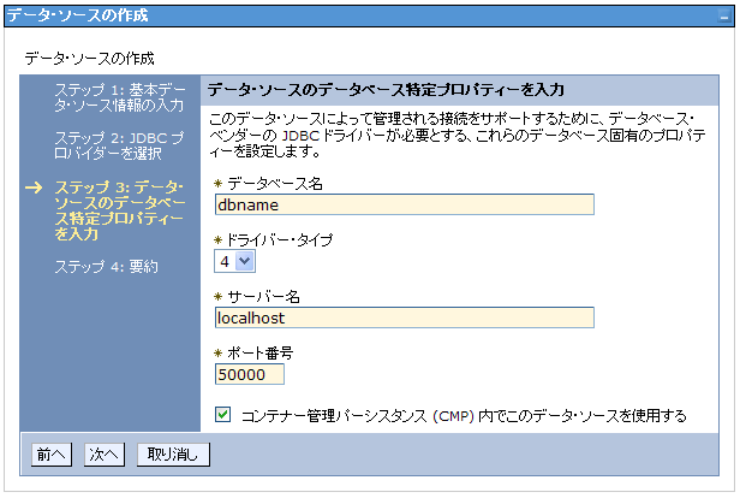
[データ・ストアのヘルパー・クラス名]は「Oracle10g データ・ストア・ヘルパー」を選択してください。



◆ DB2 の場合

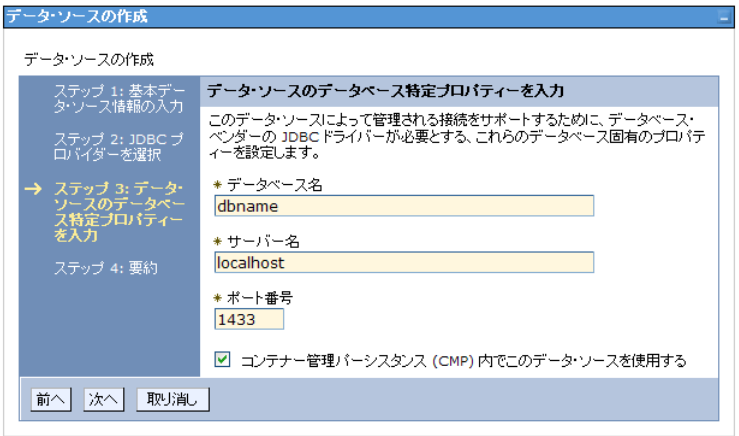
[データベース名]、[ドライバー・タイプ]、[サーバー名]、[ポート番号]を入力します。

[ドライバー・タイプ] は「4」を選択してください。



◆ SQL Server 2005 の場合

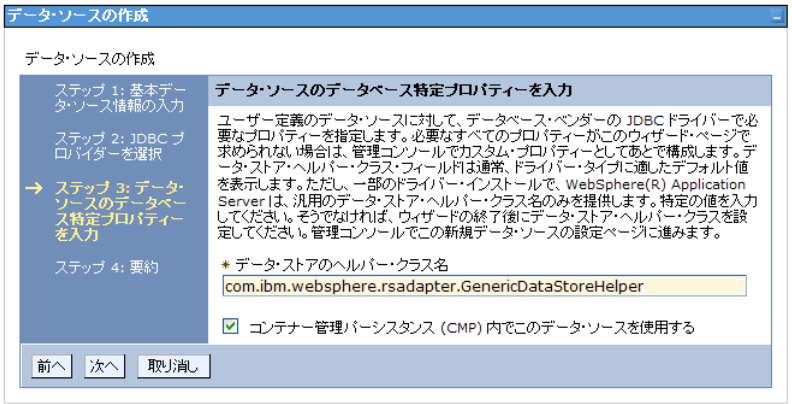
[データベース名]、[サーバー名]、[ポート番号]を入力します。



◆ PostgreSQL の場合

[データ・ストアのヘルパー・クラス名]に、

「com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper」を入力してください。

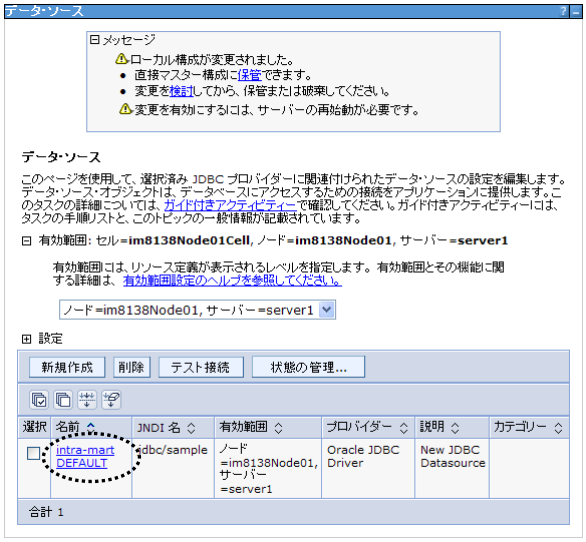


6. 設定内容を確認し、[終了]ボタンを押します。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.1.2.3.5 データ・ソースとDBユーザの関連付け

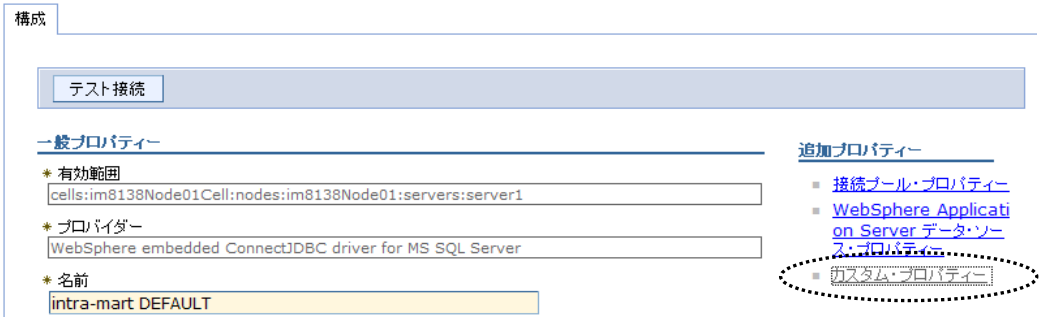
1. 再度、メニューから[リソース]- [JDBC]- [データ・ソース] を選択し、先ほど登録したデータソース名「intra-mart DEFAULT」のリンクをクリックします。



2. 「3.3.1.2.3.2 データベースに接続するDBユーザ情報を設定」で登録した[コンポーネント管理の認証別名] を選択し、[OK]ボタンをクリックします。

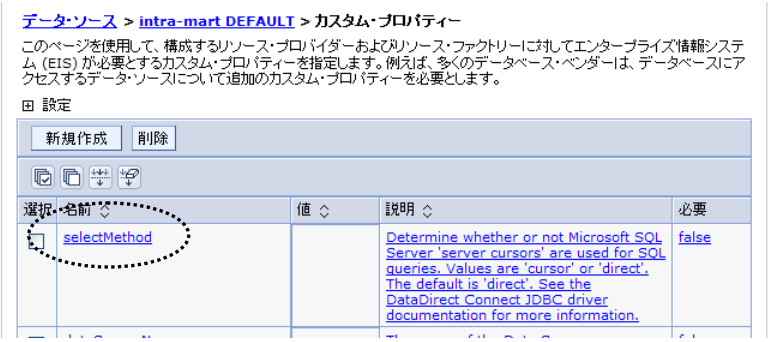
3.3.1.2.3.6 データ・ソースのカスタム・プロパティーの設定

1. カスタム・プロパティーを設定します。 [追加プロパティー]-[カスタム・プロパティー]を選択します。
（カスタム・プロパティーの設定は SQLServer2005、PostgreSQL を利用する場合に必要です）



◆ SQL Server 2005 の場合

[selectMethod] リンクをクリックします。



値に「Cursor」を設定し、[OK]をクリックします。

◆ PostgreSQL の場合

[serverName]、[databaseName]、[portNumber]を設定します。

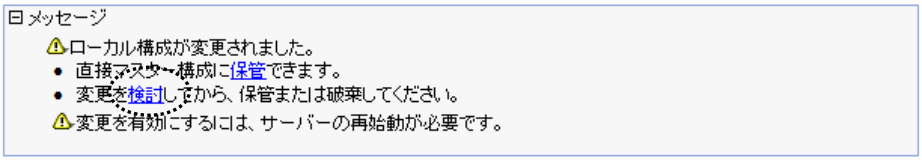
GenericDataStoreHelper を利用しているため、以下の警告が DB 利用時に出力されます。

「警告: GenericDataStoreHelper が使用されています。」

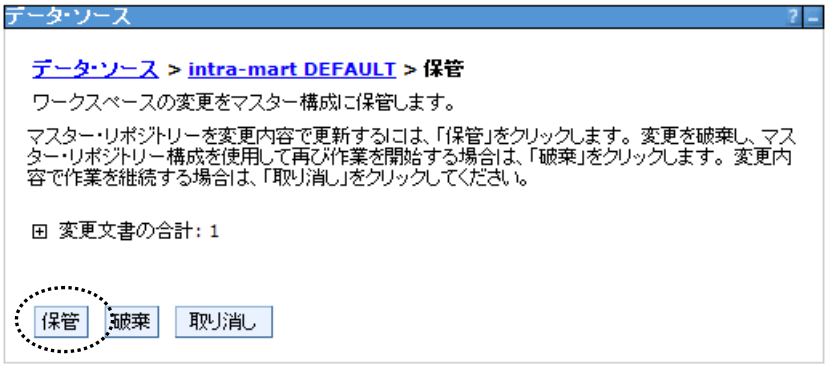
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.1.2.3.7 変更内容の保管

1. [メッセージ]欄の[検討]リンクをクリックします。



2. 変更内容を確認し、[保管]ボタンを押します。



以上で、WebSphere に DataSource を登録する作業は終了です。

3.3.1.2.4 WARファイルのデプロイ

WebSphere 上に intra-mart のアプリケーションを登録します。

この作業を行う前に、以下の作業が終了していることを確認してください。

- AFW がインストールされていること
- WAR ファイルが作成されていること
- WebSphere がインストールされていること
- DataSourceの設定が完了していること
  「3.3.1.2.3 WebSphere にDataSource(JDBC)を登録」を参照
- WAR ファイルがデプロイされていないこと(デプロイされている場合、アンデプロイすること)

これらの作業が終了している環境で、WAR ファイルのデプロイを行います。

1. data-source.xml の編集
   <% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml を編集します。
   詳細は「3.4.2 data-source.xmlの設定」を参照してください。

2. AFWのすべてのサーバを起動します。
   【重要】Server Managerおよび Service Platform(分散構成時のみ)が起動していないと、デプロイが成功しません。
   (Server ManagerおよびService Platformの起動については「4 起動と停止」を参照してください。)

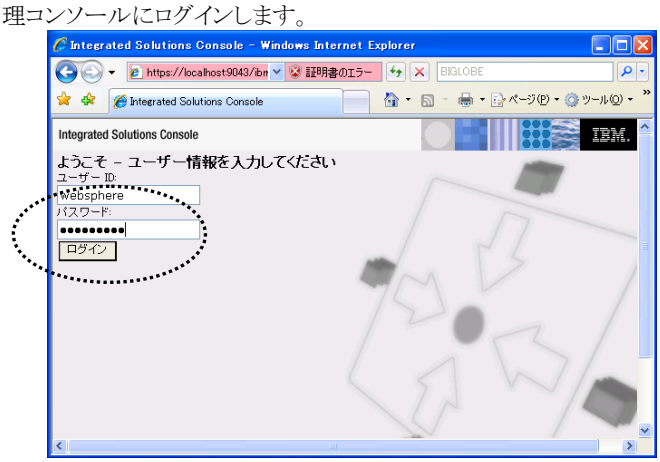
3. WAS の「ファースト・ステップ」を起動します。

4. WAS が停止している場合、「ファースト・ステップ」の [サーバの始動]で WAS を始動します。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

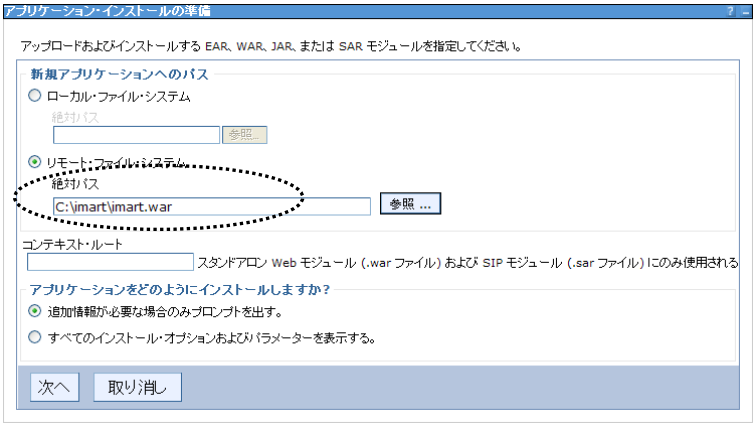
5. 「ファースト・ステップ」の [管理コンソール]で管理コンソールを起動します。

6. 管理コンソールにログインします。

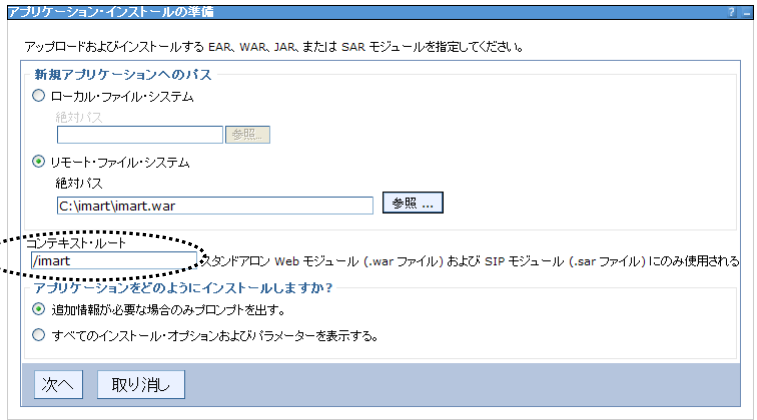


7. メニューから[アプリケーション]-[新規アプリケーションのインストール] を選択します。

8. [新規アプリケーションへのパス]を設定します。
[リモート・ファイル・システム] の[絶対パス]に imart.war のフルパスを入力します。



9. [コンテキスト・ルート] にコンテキストパスを入力し、[次へ]ボタンを押します。
ここでは [/imart] とします。



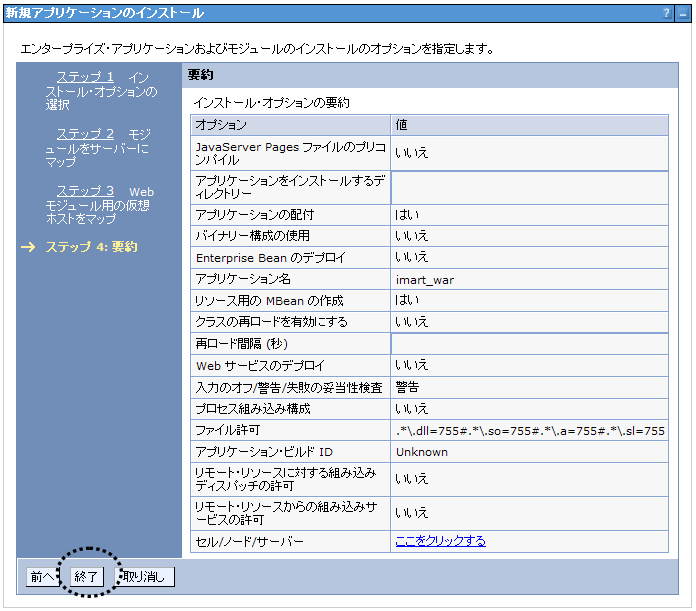
10. [JavaServer Pages ファイルのプリコンパイル]をチェックし、[次へ]ボタンを押します。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

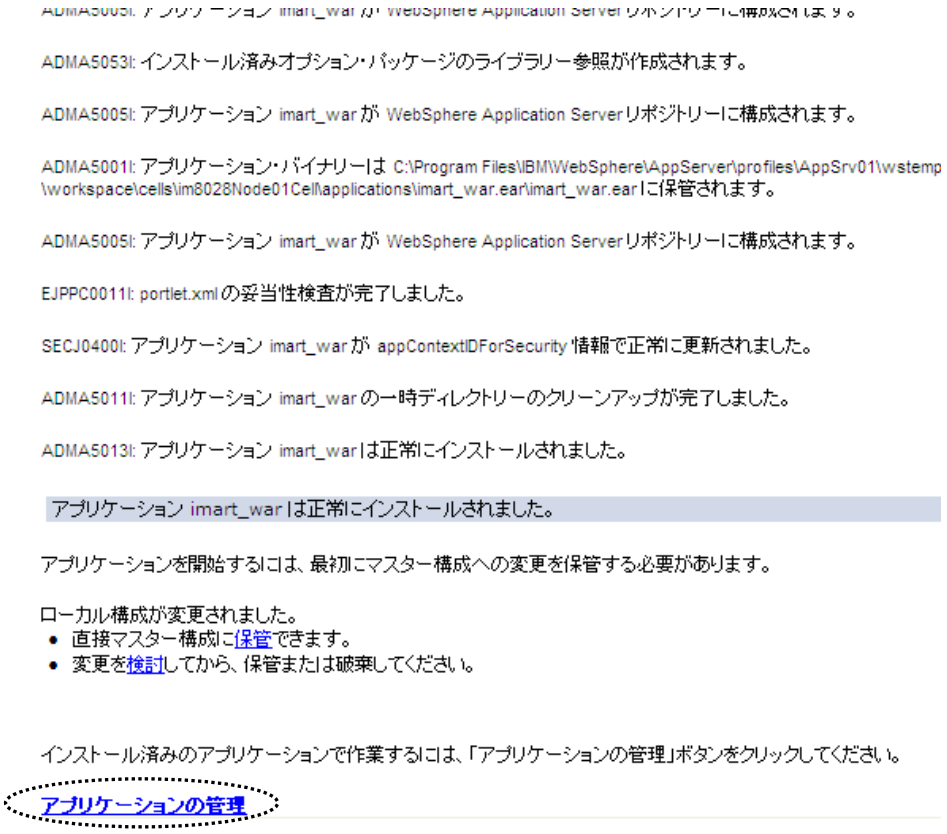
11. [次へ]ボタンを押します。

12. [次へ]ボタンを押します。

13. 設定内容を確認後、[終了]ボタンを押します。



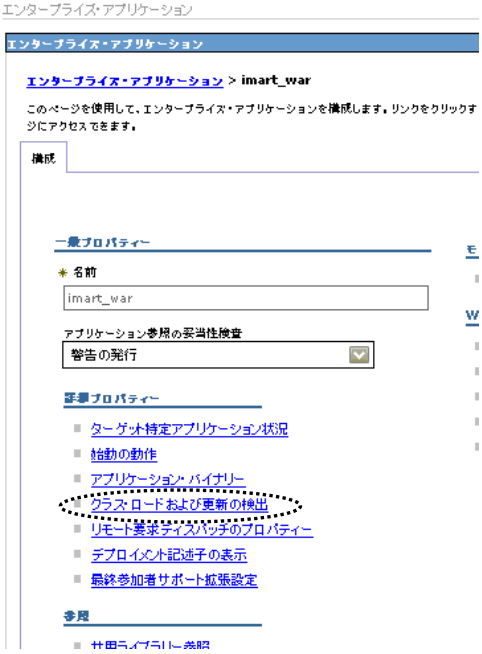
14. 「アプリケーション imart_war は正常にインストールされました。」が表示されたら[アプリケーションの管理]リンクをクリックします。



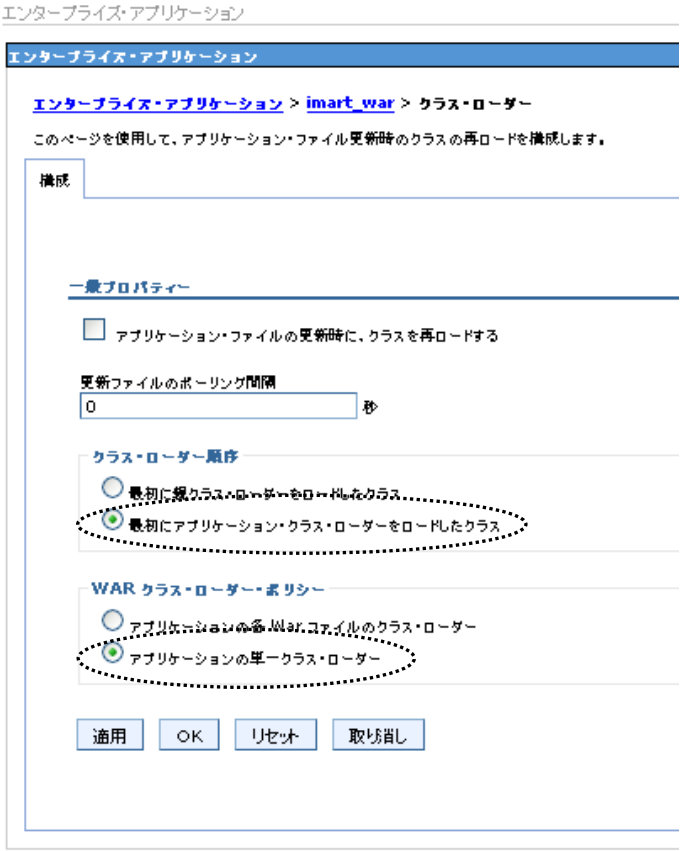
15. デプロイしたアプリケーションのリンクを選択します。ここでは「imart_war」のリンクをクリックします。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

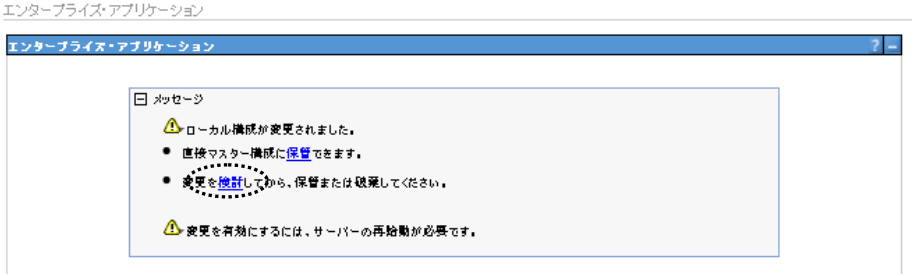
16. [クラス・ロードおよび更新の検出]を選択します。



17. 「クラス・ローダー順序」を「最初にアプリケーション・クラス・ローダーをロードしたクラス」、「WAR クラス・ローダー・ポリシー」を「アプリケーションの単一クラス・ローダー」に設定し、[OK]ボタンを押します。
（「更新ファイルのポーリング間隔」は環境に応じて設定してください）



18. [検討]リンクをクリックします。



19. 変更内容を確認し、[保管]ボタンを押します。

20. WebSphere を再起動します。

以上で、WAR ファイルのデプロイ作業は終了です。

3.3.1.2.4.1 一般ユーザでログイン後にClassCastExceptionが発生する場合

<%im_path%>/doc/imart/WEB-INF/lib に **portlet-api-1.0.jar を含めないようにしてください。**

<%im_path%>/doc/imart/WEB-INF/lib に portlet-api-1.0.jar が存在する場合、一般ユーザでログインすると、「java.lang.ClassCastException: com.sun.portal.portletcontainer.portlet.impl.RenderRequestImpl incompatible with javax.portlet.PortletRequest」が発生します。

この例外を回避するには、WAR ファイルをアンインストール後、WebSphere を停止し、WebSphere の「<%WAS_path%>/AppServer/profiles/プロファイル名/installedApps/セル名/imart_war.ear/」および「<%WAS_path%>/AppServer/profiles/プロファイル名/temp/ノード名/サーバー名/imart_war/」ディレクトリを削除します。

その後、WAR ファイルをもう一度作成し、デプロイをやり直してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.1.2.5 **ibm-web-ext.xmiの編集**

WAR ファイルのデプロイ後、設定ファイル ibm-web-ext.xmi を編集します。

通常この設定ファイルを編集することはありませんが、WebSphere の ver.6.1 の JSP コンパイラが標準で JDK1.5 をサポートしていないため、設定ファイルへの記述が必要となります (デフォルトでは JDK1.3 の設定になっています) 。

以下の手順に従って設定ファイルを編集してください。

1. <% **WAS_path** %>/profiles/プロファイル名/config/cells/ノード名/applications/imart_war.ear/deployments/imart_war/imart.war/WEB_INF/ibm-web-ext.xmi ファイルを開きます。

2. 以下の　　部分の属性を追加してください。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<com.ibm.ejs.models.base.extensions.webappext:WebAppExtension xmi:version="2.0" xmlns:xmi="http://www.omg.org/XMI"
xmlns:com.ibm.ejs.models.base.extensions.webappext="webappext.xmi" xmi:id="WebAppExtension_1212631327156">
  <webApp href="WEB-INF/web.xml#WebApp_1212631327156"/>
  <jspAttributes xmi:id="JSPAttribute_1212631327156" name="reloadEnabled" value="true"/>
  <jspAttributes xmi:id="JSPAttribute_1212631327157" name="reloadInterval" value="10"/>
  <jspAttributes xmi:id="JSPAttribute_113" name="jdkSourceLevel" value="15"/>
</com.ibm.ejs.models.base.extensions.webappext:WebAppExtension>
```

3. 属性を追加後、ファイルを保存します。サーバを起動させます。既にサーバが起動している場合は、再起動し、ローカルで編集した内容を反映させてください。

   ※ 編集内容をサーバ側に反映させずにアプリケーションを起動すると、競合エラーが起こる場合があります。

3.3.2 WebLogicの設定

AFW を WebLogic で利用できるように設定を行います。
ここでは、WebLogic をインストールしたディレクトリを **<%WebLogic_path%>** と表記します。
また、Application Runtime をインストールしたディレクトリを **<%im_path%>** と表記します。
WebLogic 上で AFW を稼働させる場合には以下の条件を満たしている必要があります。

- WebLogic に DataSource が登録されていること
- デプロイする WAR ファイルが存在すること
- <% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml が設定されていること

これらの条件を満たしている環境で、war ファイルのデプロイを行います。

3.3.2.1 WebLogic Application Serverのデプロイ例

AFW へアクセスする URL は/imart で説明します。
（「/imart」以外のコンテキストルートを利用する場合、「6.6 コンテキストルートを変更する場合」を参照してください。）

以下の説明では、**Weblogic Server 10J（Linux 版）** を例にしています。
（WebLogic の他のリビジョン、エディションの場合、設定方法が異なる場合がありますので、ご不明な点は WebLogic の販売元または製造元へお問い合わせください。）

WebLogic Application Server のデプロイ手順を、以下に示します。

1. im_portal_commonの組み込み
   （詳細は「3.3.2.1.1 im_portal_commonの組み込み」を参照）
2. WARファイルの作成
   （詳細は「3.3.2.1.2 WARファイルの作成」 参照）
3. WebLogicにDataSource（JDBC）を登録
   （詳細は「3.3.2.1.3 WebLogicにDataSource（JDBC）を登録」を参照）
4. WARファイルのデプロイ
   （詳細は「3.3.2.1.4 WARファイルのデプロイ」を参照）

※ 3 は毎回行う必要はありません。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.2.1.1 im_portal_commonの組み込み

im_portal_common を組み込み、intra-martのポータルを有効にさせます。

以下の手順に従ってください。

1. <%**im_path**%>/bin/im_portal_common/*.jar ファイルをコピーします。
2. <%**im_path**%>/doc/imart/WEB-INF/lib にコピーしたファイルを置きます。

3.3.2.1.2 WARファイルの作成

AFW の WAR ファイルを作成します。

主な内容は以下の通りです。

- ◆ JSTL の有効化
- ◆ WAR ファイルの作成
  (コンテンツの変更やクラスの再コンパイル等を行った場合、この作業が必ず必要となります。)
- ◆ weblogic.xml ファイルの作成
- ◆ weblogic-application.xml の作成
- ◆ JSP のコンパイル
- ◆ aar ファイルの作成
- ◆ WebLogic 不要ライブラリの削除

以下の手順に従い、WAR ファイルを作成してください。

1. JSTL の有効化
   以下の手順に従い、JSTL ライブラリの組み込みを行います。

① <%**WebLogic_path**%>/wlserver_10.0/common/deployable-libraries/jstl-1.2.war を解凍し、**jstl-1.2.jar** を取り出します。

② 取り出した **jstl-1.2.jar** を<%**im_path**%>/doc/imart/WEB-INF/lib にコピーします。

2. WAR ファイルの作成(1 回目)

① コンソール画面で以下のディレクトリに移動します。
<%**im_path**%>/bin

② 以下のコマンドを実行して WAR ファイルを作成します。

```
zippack  -o  <WAR ファイル名>  <コンテキストルートパス>
```

［例］

Windows	:	zippack -o ..¥imart.war ..¥doc¥imart
UNIX	:	zippack.sh -o ../imart.war ../doc/imart

```
$ cd <%im_path%>/bin
$ ./zippack.sh -o ../imart.war ../doc/imart
```

このコマンドを実行することで、**<%im_path%>/imart.war** として WAR ファイルが作成されます。

3. weblogic.xml ファイルを以下の内容で作成します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<weblogic-web-app>
    <container-descriptor>
        <prefer-web-inf-classes>true</prefer-web-inf-classes>
        <servlet-reload-check-secs>-1</servlet-reload-check-secs>
    </container-descriptor>

    <jsp-descriptor>
        <page-check-seconds>-1</page-check-seconds>
        <precompile>false</precompile>
    </jsp-descriptor>
</weblogic-web-app>
```

4. 作成した weblogic.xml を<%**im_path**%>/doc/imart/WEB-INF にコピーします。

5. weblogic-application.xml ファイルを以下の内容で作成します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<weblogic-application>
    <prefer-application-packages>
        <package-name>com.ctc.wstx.*</package-name>
        <package-name>javax.xml.*</package-name>
        <package-name>org.apache.*</package-name>
    </prefer-application-packages>
</weblogic-application>
```

6. 作成した weblogic-application.xml を<%**im_path**%>/doc/imart/**META-INF**/にコピーします。
(※ weblogic-application.xml を配置しないと、Axis2(AXIOM)で生成された XML のネームスペースが消える場合があります。)

7. JSP のコンパイルを行います。
(JSP のコンパイルを行わないと、weblogic.xml の weblogic-web-app/container-descriptor/prefer-web-inf-classes を true に設定した場合、カスタムタグが利用出来なくなる場合があります。)

```
$ cd <%WebLogic_path%>wlserver_10.0/server/bin
$ ./setWLSEnv.sh

$ java weblogic.jspc -webapp <%im_path%>/imart.war -d <%im_path%>/doc/imart/WEB-INF/classes -compileAll
```

※JSP コンパイル時に OutOfMemory エラーが起き、正常にコンパイルが行えない場合は
オプションとして-Xmx を利用してください。

```
$ java -Xmx128m weblogic.jspc ~(以下同様)
```


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

8. web.xml に JSPClassServlet と MIME マッピングを設定
JSP の再コンパイルを防ぐために、JSPClassServlet を使用します。
マスカットを使用するために、MIME マッピングを設定します。
<%**im_path**%>doc/imart/WEB-INF/web.xml の最後に以下を追加します。

```
  <servlet>
      <servlet-name>JSPClassServlet</servlet-name>
      <servlet-class>weblogic.servlet.JSPClassServlet</servlet-class>
  </servlet>
  <servlet-mapping>
      <servlet-name>JSPClassServlet</servlet-name>
      <url-pattern>*.jsp</url-pattern>
  </servlet-mapping>
  <mime-mapping>
      <extension>json</extension>
      <mime-type>application/json</mime-type>
  </mime-mapping>
  <mime-mapping>
      <extension>xml</extension>
      <mime-type>text/xml</mime-type>
  </mime-mapping>
  <mime-mapping>
      <extension>js</extension>
      <mime-type>application/x-javascript</mime-type>
  </mime-mapping>
</web-app>
```

9. .aarファイルの作成
<%**im_path**%>/doc/imart/WEB-INF/services/配下にサービス用のディレクトリがある場合、全てのディレクトリを、それぞれ.aarファイルに圧縮します（ディレクトリが無い場合は 9、10の手順は必要ありません）。

(例)<% **im_path** %>/doc/imart/WEB-INF/services/im_ws_auth_sample

```
$ cd <%im_path%>/bin
$./zippack.sh
-o ../doc/imart/WEB-INF/services/im_ws_auth_sample.aar ../doc/imart/WEB-INF/services/im_ws_auth_sample
```

10. services.listの編集
9で作成した.aarファイルの名称を<%**im_path%**>/doc/imart/WEB-INF/services/services.list
に追記します。

```
# Licensed to the Apache Software Foundation (ASF) under one
# or more contributor license agreements. See the NOTICE file
# distributed with this work for additional information
# regarding copyright ownership. The ASF licenses this file
# to you under the Apache License, Version 2.0 (the
# "License"); you may not use this file except in compliance
# with the License. You may obtain a copy of the License at
#
# http://www.apache.org/licenses/LICENSE-2.0
#
# Unless required by applicable law or agreed to in writing,
# software distributed under the License is distributed on an
# "AS IS" BASIS, WITHOUT WARRANTIES OR CONDITIONS OF ANY
# KIND, either express or implied. See the License for the
# specific language governing permissions and limitations
# under the License.
#
version-1.4.aar
im_ws_auth_sample.aar
```

11. WAR ファイルの作成(2 回目)
以下のコマンドを実行して再度 WAR ファイルを作成します。

```
$ cd <%im_path%>/bin
$ ./zippack.sh -o ../imart.war ../doc/imart
```

3.3.2.1.3 WebLogicにDataSource（JDBC）を登録

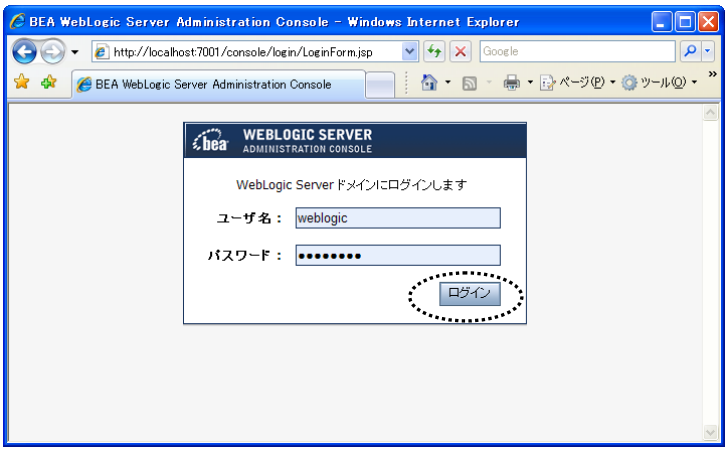
管理コンソールを使用した DetaSource の設定方法について、例を挙げて説明します。
ここでは Oracle、DB2、SQL Server、PostgreSQL について説明します。
Oracle、DB2、SQL Server については、WebLogic に付属している BEA WebLogic Type 4 JDBCドライバを使用します。PostgreSQL は別途 JDBC ドライバをインストールしてください。

※ DataSource の登録は、一度だけ行えばよい作業です。デプロイ作業毎に行う必要はありません。
※ 別途インストールした JDBC ドライバをご使用になる場合は、適宜設定内容を変更してください。

1. WebLogicServer を起動します。

2. ブラウザから管理コンソールを開きます。
   (例) http://ホスト名:ポート番号/console

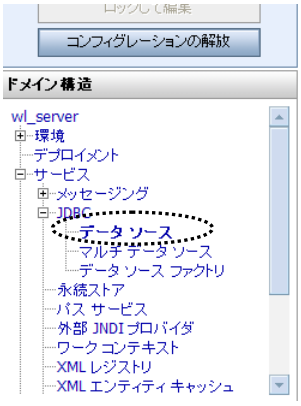
3. ログイン画面からログインします。



4. 左メニューの[ロックして編集]ボタンをクリックします。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

5. 左メニューの [サービス]-[JDBC]-[データ ソース] を選択します。



6. 「JDBC データソースの概要」画面で、[新規作成]ボタンをクリックします。

7. 新しい JDBC データ ソースを作成します。ここでは、データソースの名前を「intra-mart DEFAULT」、JNDI 名を「jdbc-sample」とします。

以下に、データベースごとの設定方法を記載します。

3.3.2.1.3.1 Oracleの場合

1. [名前]、[JNDI 名]、[データベースの種類]、[データベースドライバ]を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

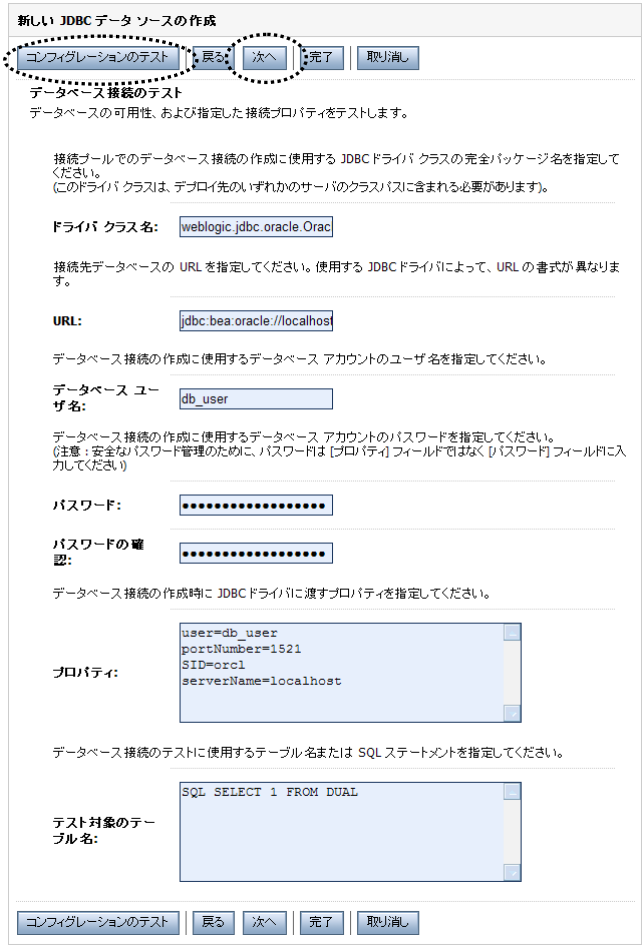
データベースの種類	データベース ドライバ
Oracle	*BEA's Oracle Driver (Type 4) Versions:9.0.1,9.2.0,10

2. [次へ]ボタンをクリックします。

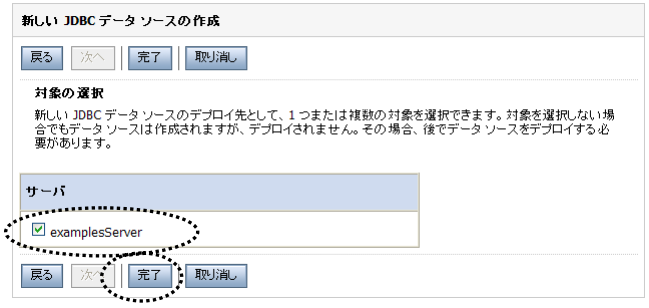
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベースユーザ名]、[パスワード] を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

4. [コンフィグレーションのテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、 [次へ]ボタンをクリックします。(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)



5. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[完了]ボタンをクリックします。



6. 左メニューの[変更のアクティブ化]ボタンをクリックします。

これで、JDBC データ ソースの登録は終わりです。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

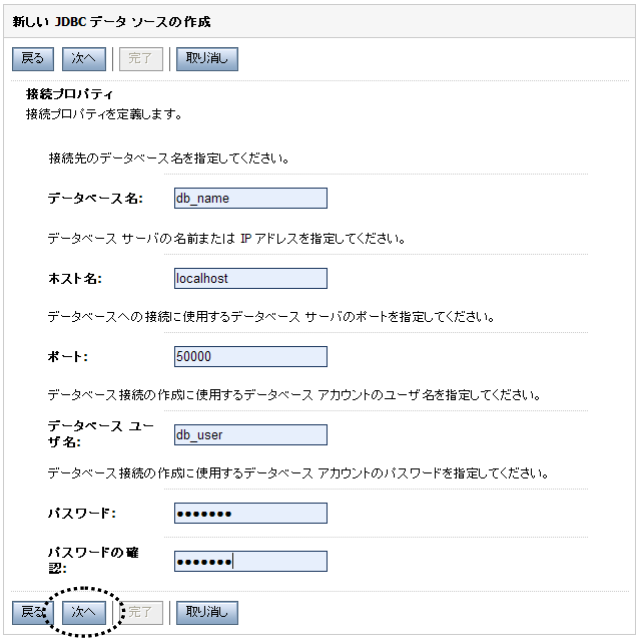
3.3.2.1.3.2 DB2 の場合

1. [名前]、[JNDI 名]、[データベースの種類]、[データベースドライバ]を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

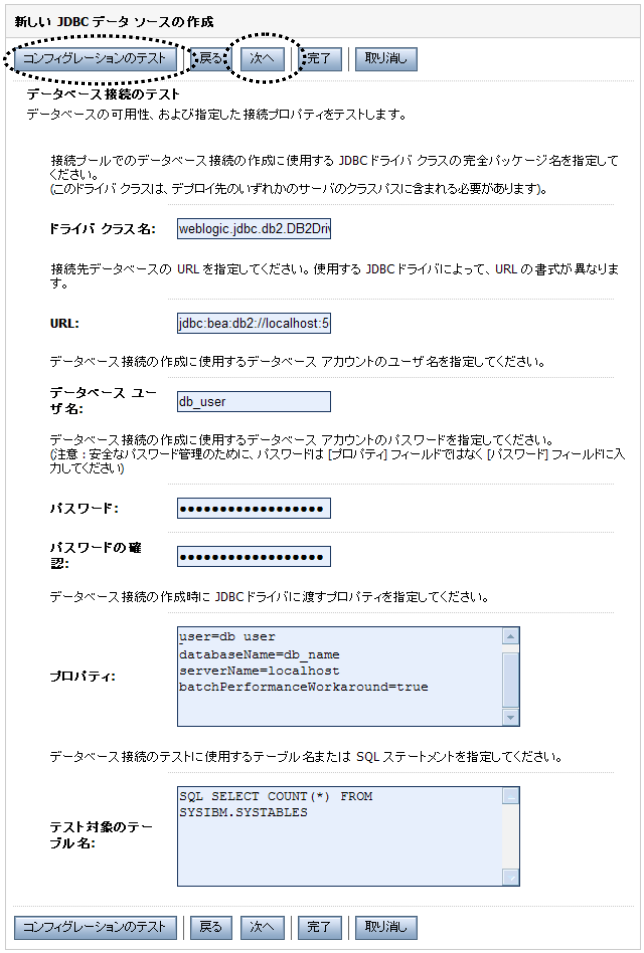
データベースの種類	データベース ドライバ
DB2	*BEA's DB2 Driver (Type 4) Versions:7.X,8.X

2. [次へ]ボタンをクリックします。

3. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベースユーザ名]、[パスワード] を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。



4. [コンフィグレーションのテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、 [次へ]ボタンをクリックします。(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)



Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

5. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[完了]ボタンをクリックします。

6. 左メニューの[変更のアクティブ化]ボタンをクリックします。

これで、JDBC データ ソースの登録は終わりです。

3.3.2.1.3.3 SQL Serverの場合

1. [名前]、[JNDI 名]、[データベースの種類]、[データベースドライバ]を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

データベースの種類	データベース ドライバ
MS SQL Server	*BEA's MS SQL Server Driver (Type 4) Versions:7.0,2000,2005

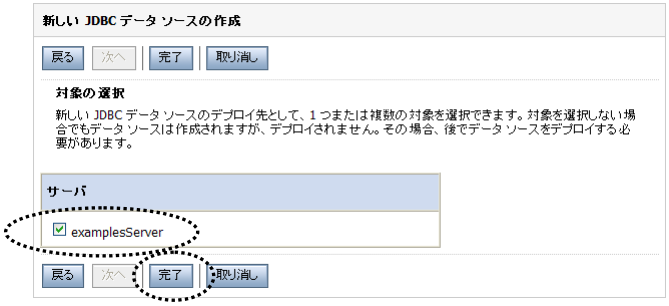
2. [次へ]ボタンをクリックします。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベースユーザ名]、[パスワード] を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

4. [コンフィグレーションのテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、 [次へ]ボタンをクリックします。(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)

5. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[完了]ボタンをクリックします。



6. 左メニューの[変更のアクティブ化]ボタンをクリックします。

これで、JDBC データ ソースの登録は終わりです。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.3.2.1.3.4 PostgreSQLの場合

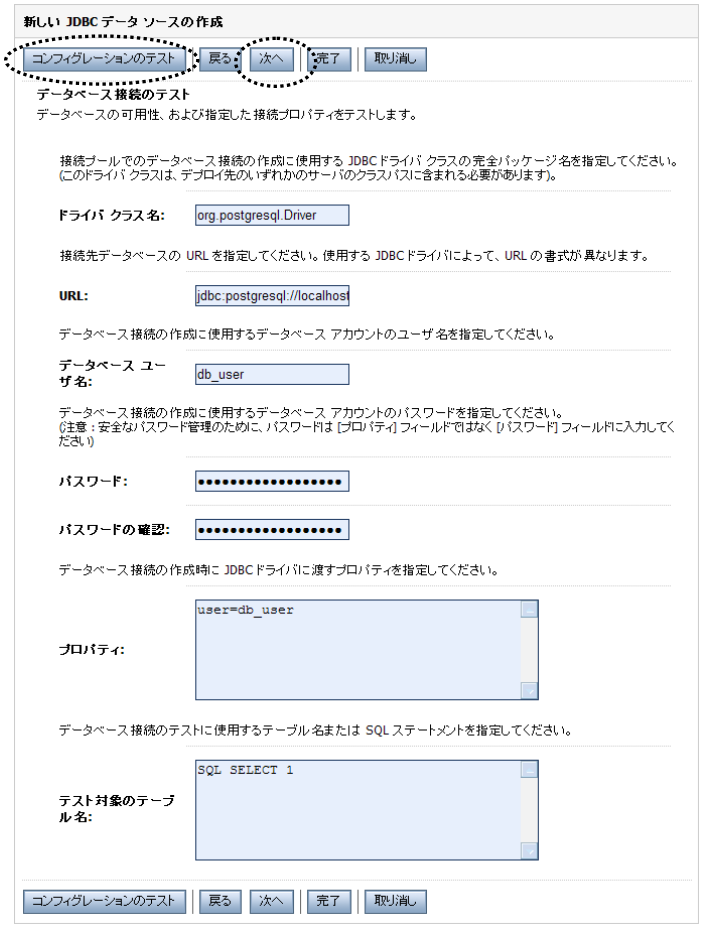
1. [名前]、[JNDI 名]、[データベースの種類]、[データベースドライバ]を設定し、 [次へ]ボタンをクリックします。

データベースの種類	データベース ドライバ
PostgreSQL	PostgreSQL's Driver (Type 4) Versions: Any

2. [次へ]ボタンをクリックします。

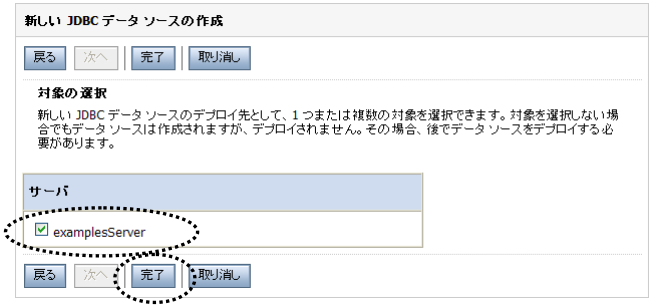
3. [データベース名]、[ホスト名]、[ポート]、[データベースユーザ名]、[パスワード] を設定し、[次へ]ボタンをクリックします。

4. [コンフィグレーションのテスト]を行い、接続テストに成功することを確認後、 [次へ]ボタンをクリックします。(接続テストに失敗する場合は、設定を再度見直してください)



Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

5. JDBC データ ソースのデプロイ先をチェックし、[完了]ボタンをクリックします。



6. 左メニューの[変更のアクティブ化]ボタンをクリックします。

これで、JDBC データ ソースの登録は終わりです。

3.3.2.1.4 WARファイルのデプロイ

WebLogic 上に intra-mart のアプリケーションを登録します。

この作業を行う前に以下の作業が終了していることを確認してください。

- AFW がインストールされていること
- WAR ファイルが作成されていること
- WebLogic がインストールされていること
- データソースの設定が完了していること
  「3.3.2.1.3 WebLogicにDataSource（JDBC）を登録」を参照
- WAR ファイルがデプロイされていないこと（デプロイされている場合、アンデプロイすること）

これらの作業が終了している環境で、WAR ファイルのデプロイを行います。

1. data-source.xml の編集

   <% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml を編集します。

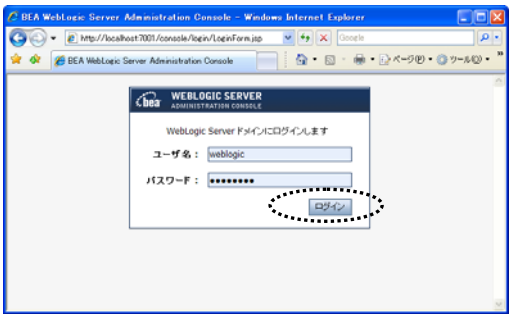
   詳細は「3.4.2 data-source.xmlの設定」を参照してください。

2. AFWのすべてのサーバを起動します。
   【重要】Server Managerおよび Service Platform（分散構成時のみ）が起動していないと、デプロイが成功しません。（Server ManagerおよびService Platformの起動については「4 起動と停止」を参照してください。）

3. WebLogicServer を起動します。

4. ブラウザから管理コンソールを開きます。
   (例) http://ホスト名:ポート番号/console

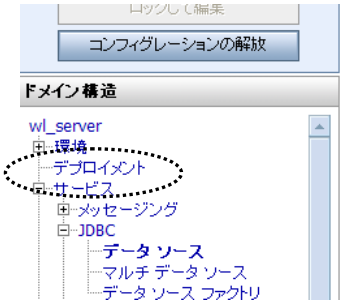
5. ログイン画面からログインします。



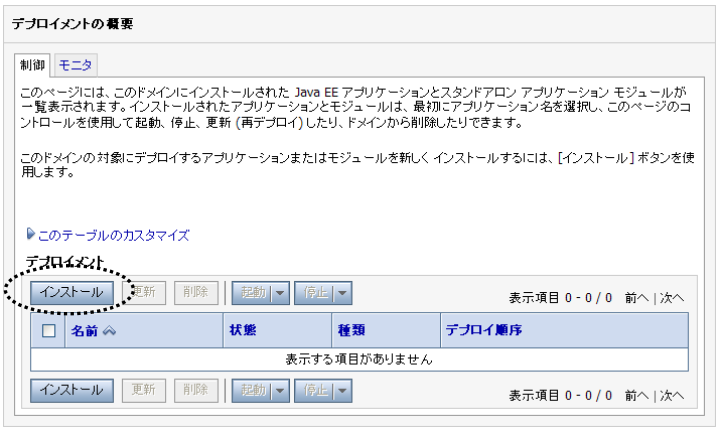
6. 左メニューの[ロックして編集]ボタンをクリックします。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

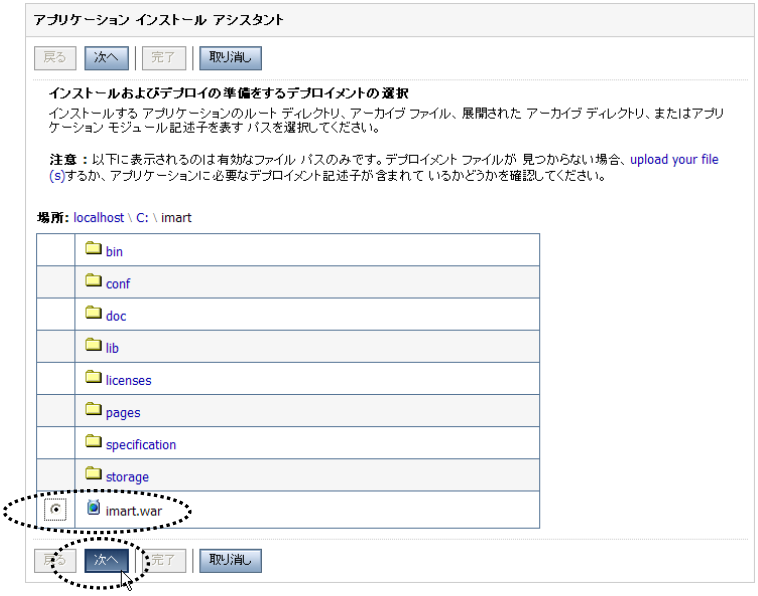
7. 左メニューの [デプロイメント] を選択します。



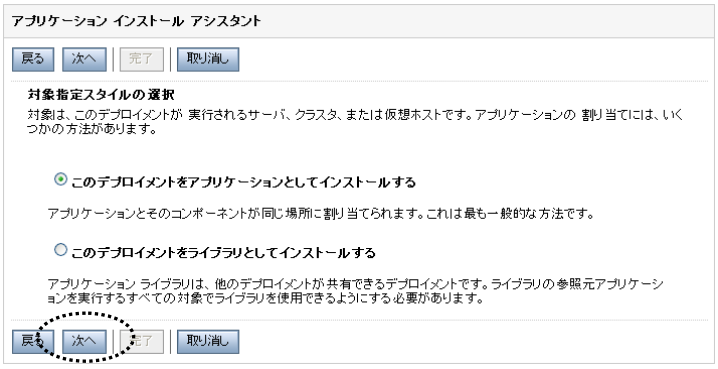
8. 「デプロイメントの概要」画面で、[インストール]ボタンをクリックします。



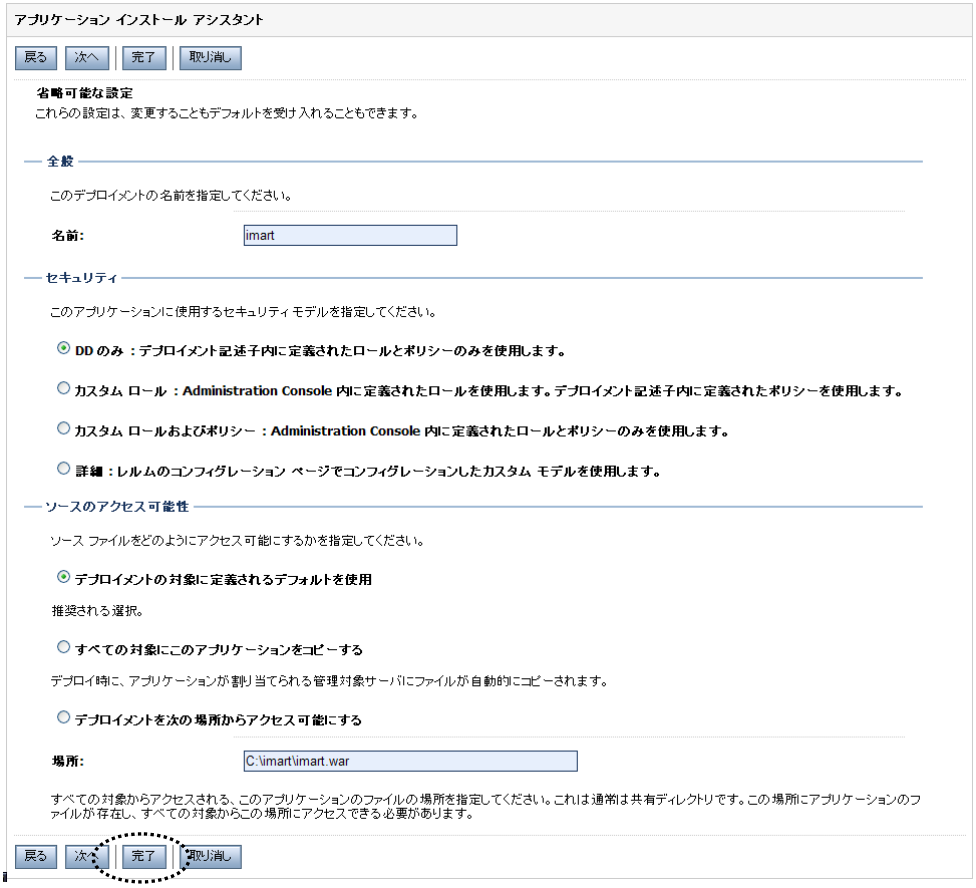
9. 「WARファイルの作成」で作成したimart.warを選択し、[次へ]ボタンをクリックします。



10. [次へ]ボタンをクリックします。



11. [次へ]ボタンをクリックします。

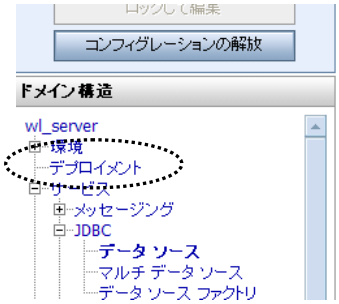


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

12. [完了]ボタンをクリックします。

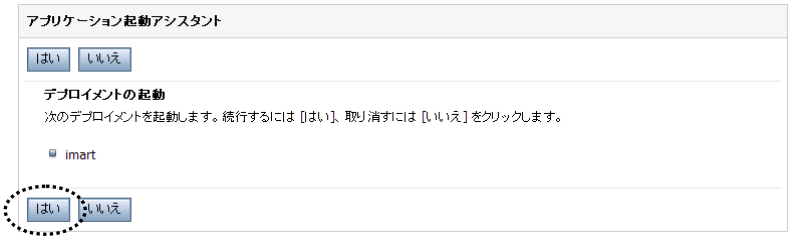
13. 左メニューの[変更のアクティブ化]ボタンをクリックします。

14. 左メニューの [デプロイメント] を選択します。



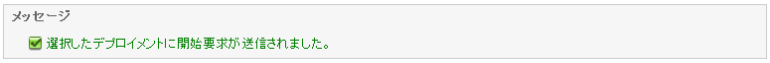
15. [imart]をチェックし、[起動]ボタンの[全ての要求を処理]をクリックします。

16. [はい]ボタンをクリックし、起動します。



java.lang.IllegalStateException: Server-Manager connect error: Network connection is closed.
が発生した場合は、もう一度、起動処理を行ってください。

メッセージ欄に「選択したデプロイメントに開始要求が送信されました。」が表示されれば、デプロイ作業は終了です。



Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.4 データベース接続の設定

intra-mart はデータベースに JDBC 経由で接続します。

データベースに関する各設定、および、データベースへの接続に関する注意点は、本製品に付属のリリースノートに記載されている制限事項をお読みください。

3.4.1 準備

本製品が接続するためのアカウントをデータベース側に準備しておいてください。

また、本製品がデータを保存するために利用する表領域を十分に確保しておいてください。

※ **Oracle** 利用時の注意点
CREATE VIEW 権限 が付与されていることを確認してください。
Oracle Database 11g Release 1 では、CONNECT ロールには CREATE VIEW 権限が予め付与されておりません。そのため、CREATE VIEW 権限を明示的に付与する必要があります。
Oracle11gでの表領域およびユーザ登録方法の例を、「付録D Oracle11gでの表領域、およびユーザの作成方法 (128ページ)」にて説明しています。あわせて、ご参照ください。

※ **Microsoft SQL Server** 利用時の注意点
照合順序を設定し、大文字・小文字を区別する設定でデータベースを作成することを推奨します。
また、文字コードを「UNICODE」で運用している場合、<% Storage Service の root %>/system/basic/ 配下にある SQL ファイル内のカラム型「VARCHAR」を「NVARCHAR」に変更してください。

※ **PostgreSQL** 利用時の注意点
弊社では、文字エンコーディングを「EUC_JP」に設定したデータベースでのみ動作試験を行っております。

※ **DB2** 利用時の注意点
データベース作成時、「デフォルトのバッファー・プールと表スペースのページ・サイズ」に「32k」を設定する必要があります。

3.4.1.1 Oracle Database 11g リリース 1 (11.1) 以降の注意点

DB の DATE 型フィールドを、スクリプト開発モデル API「DatabaseManager」で取得する際、Oracle のバージョン(JDBC ドライバのバージョンを含む)によって異なる JavaScript 型が返却されます。

3.4.1.1.1 事象

Oracle Database 11g リリース 1 (11.1) より、デフォルトで「oracle.sql.DATE」が「java.sql.Timestamp」にマッピングされるようになりました。(なお、Oracle Database 9.0.1 から 11.0 では、「oracle.sql.DATE」が「java.sql.Date」にマッピングされていました)

この影響により、DB の DATE 型フィールドを、スクリプト開発モデル API「DatabaseManager」で取得する場合、Oracle のバージョン(JDBC ドライバのバージョンを含む)によって異なる JavaScript 型が返却されます。

具体的には、

- Oracle Database 9.0.1 から 11.0 を利用している場合は、JavaScript の Date 型が返却され、
- Oracle Database 11.1 以降 を利用している場合は、JavaScript の String 型が返却されます。

3.4.1.1.2 対応方法

Java のシステムプロパティ「**oracle.jdbc.mapDateToTimestamp**」を **false** に設定してください。
具体的には、ApplicationRuntime の conf/imart.xml「intramart/platform/java/server/command/option」を以下のように編集してください。

- 修正前

```
<option>-cp %SYSTEMCLASSPATH% -Xms%XMS% -Xmx%XMX% -Djava.awt.headless=true
 -Dcom.sun.management.jmxremote</option>
```

- 修正後

```
<option>-cp %SYSTEMCLASSPATH% -Xms%XMS% -Xmx%XMX% -Djava.awt.headless=true
 -Dcom.sun.management.jmxremote -Doracle.jdbc.mapDateToTimestamp=false</option>
```

Java のシステムプロパティ「oracle.jdbc.mapDateToTimestamp」の詳細は Oracle のドキュメントをご参照ください。
Oracle Database JDBC 開発者ガイドおよびリファレンス 11g リリース 1(11.1)- [A リファレンス情報] - [埋込み SQL92 構文] - [Oracle オブジェクト型から SQL DATE データ型へのマッピング]

(http://otndnld.oracle.co.jp/document/products/oracle11g/111/doc_dvd/java.111/E05720-02/apxref.htm#i1005144)

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.4.2 data-source.xmlの設定

<% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml を編集します。

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<data-source>

    <system-data-source>
        <connect-id>default</connect-id>
        <resource-ref-name><%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </system-data-source>

    <group-data-source>
        <login-group-id>default</login-group-id>
        <resource-ref-name><%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </group-data-source>

</data-source>
```

（例： AFWでIBM WebSphere Application Server 6.1 を利用している場合）

「3.3.1.2.3.4 データ・ソースの設定」で設定したJNDI名が"jdbc/sample"のとき

<resource-ref-name>jdbc/sample</resource-ref-name> となります。

（例： AFW で BEA WebLogic Server 10 を利用している場合）

「3.3.1.2.3 WebLogicにDataSource（JDBC）を登録」で設定した参照名が"jdbc-sample"のとき

<resource-ref-name>jdbc-sample</resource-ref-name> となります。

システムデータベースの設定 <system-data-source>

（マルチデータベース）複数設定可能です。すべてのログイングループが利用できるデータベースです。

system-data-source	システムデータベースのデータソース設定を行います。
connect-id	接続 ID（system-data-source でユニークなもの）
resource-ref-name	データソースを表す jndi 名の設定を行います。

ログイングループデータベースの設定 <group-data-source>

ログイングループ毎に 1 つのみ設定します。ログイングループのデフォルトデータベースとなります。

group-data-source	ログイングループデータベースのデータソース設定を行います。
login-group-id	ログイングループ ID
resource-ref-name	データソースを表す jndi 名の設定を行います。

※ データベースの設定を変更した場合は、アプリケーションランタイムの再起動が必要です。

3.5 JavaMailおよびJAF(Javabeans Activation Framework)について

intra-mart で提供しているメール送信 API を利用するには、以下のライブラリが必要です。

- JavaMail 1.4.1
- JAF(Javabeans Activation Framework) 1.1.1

intra-mart をインストールすると、上記のライブラリもインストールされます。intra-mart の使用は、上記のライセンスにも同意したものとします。これらの条項に同意できない場合は、それらすべての JAR ファイルを削除してください。

最新モジュールは下記 URL よりダウンロードすることが出来ます。（2010 年 11 月 22 日現在）

JavaMail	http://www.oracle.com/technetwork/java/index-jsp-139225.html
JAF	http://www.oracle.com/technetwork/java/javase/downloads/index-135046.html

解凍後のライブラリを以下のディレクトリにコピーします。ラウンドロビンを行う場合は、すべての Application Runtime がインストールされている Service Platform にコピーしてください。

<% Application Runtime の root %>/doc/imart/WEB-INF/lib/

- activation.jar
- dsn.jar
- imap.jar
- mail.jar
- mailapi.jar
- pop3.jar
- smtp.jar

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.6 携帯端末の利用について

3.6.1 かんたんログイン機能の利用について

かんたんログイン機能では、モバイル端末個体識別番号での認証に加え、かんたんログイン用ログインページの URL に自動的に付加したアクセスキーと iWP/iAF で保持しているアクセスキーでの認証が行われます。

モバイルパスワードを変更すると、アクセスキーも変更されます。これにより、以前アクセスしていた古いアクセスキー付き URL ではログインできないようになります。

定期的にモバイルパスワードを変更されない場合は、携帯電話に保存した URL から、かんたんログインが可能ですので、かんたんログイン用ログインページの URL を他人に知られないようご注意ください。

なお、かんたんログイン機能をご利用の場合は、Web サーバで、携帯電話からしかアクセスできないよう IP アドレス制限を実施していただく事をおすすめいたします。Web サーバで、IP アドレス制限をかける場合は、各携帯電話会社のホームページなどをご確認いただき、各携帯電話会社のサーバの IP アドレス帯域からのアクセスのみ許可する設定をお願いいたします。

以降、かんたんログイン機能を利用する際に必要な設定について説明します。

3.6.1.1 NonceResetListener4MobileEasyLoginクラスの登録

かんたんログイン機能を利用する場合は、NonceResetListener4MobileEasyLogin クラスを、 <% Server Manager の root %>/conf/access-security.xml に設定する必要があります。NonceResetListener4MobileEasyLogin の設定は、かんたんログインのセキュリティを向上させる為に必要です。設定されていない場合は、かんたんログイン用のアクセスキー取得時に、 AccessSecurityConfigException がスローされて、かんたんログイン機能を利用する事ができません。以下に設定例を記載します。

■ 修正前

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<access-security>

  <access-config>
    ・
    ・
    <account>
      <accessor>
        <accessor-class>jp.co.intra_mart.foundation.security.StandardAccountAccessor</accessor-class>
<!--
        <init-param>
          <param-name>cryption-class</param-name>
          <param-value>jp.co.intra_mart.foundation.security.cryption.NoCryption</param-value>
        </init-param>
-->
      </accessor>
    </account>
    ・
    ・
```

■

■ 修正後

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<access-security>

  <access-config>
    ・
    ・
    <account>
      <accessor>
        <accessor-class>jp.co.intra_mart.foundation.security.StandardAccountAccessor</accessor-class>
<!--
        <init-param>
          <param-name>cryption-class</param-name>
          <param-value>jp.co.intra_mart.foundation.security.cryption.NoCryption</param-value>
        </init-param>
-->
      </accessor>
      <query-writer-listener>
        <writer-listener-class>
          jp.co.intra_mart.foundation.security.mobile.NonceResetListener4MobileEasyLogin
</writer-listener-class>
      </query-writer-listener>
      <post-writer-listener>
        <writer-listener-class>
          jp.co.intra_mart.foundation.security.mobile.NonceResetListener4MobileEasyLogin
        </writer-listener-class>
      </post-writer-listener>
    </account>
    ・
    ・
```

■

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

3.6.1.2 parameter.xmlのパラメータ「im.web_server.url」の設定

かんたんログイン用の URL は以下の形式です。
（詳しくは、jp.co.intra_mart.foundation.security.mobile.MobileEasyLoginUtil の API リストを参照してください。）

```
${Web サーバの URL} + ${コンテキストパス} + "/" + ${ログイングループ ID} + ${モバイル用拡張子} + "?" + ${アクセスキー}
```

${Webサーバの URL}は、<% Server Manager の root %>/conf/parameter.xml の「im.web_server.url」で設定可能です。Apache 等の Web サーバを利用している場合は、適宜設定してください。以下に設定例を記載します。

■ 設定例

```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<system-param>
  ・
  ・
  <param>
    <param-name>im.web_server.url</param-name>
    <param-name>http://{Web サーバのホスト名}:{Web サーバのポート番号}</param-name>
  </param>
  ・
  ・
```

4 起動と停止

4.1 起動と停止の順番について

4.1.1 intra-mart AppFrameworkの場合

運用するサーバの構成（スタンドアロン、またはネットワーク分散型）により、サーバの起動および停止の順番に違いがあります。
起動順を守らなくてもサーバ動作に支障はありませんが、Application Runtime が動作する Application Server 起動時に、ネットワークエラーが発生することがあります（ネットワークエラーがエラーログに記録されます）。

スタンドアロン環境の場合

■ サーバの起動順（推奨）

1. Server Manager
2. Application Server（全 Service Platform）

■ サーバの停止順（推奨）

1. Application Server（全 Service Platform）
2. Server Manager

ネットワーク分散型環境の場合

■ サーバの起動順（推奨）

1. Server Manager
2. Service Platform
3. Application Server（Application Runtime）

■ サーバの停止順（推奨）

1. Application Server（Application Runtime）
2. Service Platform
3. Server Manager

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4.2 Server Manager／Service Platformの起動・停止方法

4.2.1 Windowsの場合

4.2.1.1 スタートメニューから起動させる場合

Windows でインストールを行うと、コマンドプロンプトでサーバを起動するメニューが追加されます。

[スタートメニュー]-[プログラム]-[intra-mart AppFramework Ver7.0] の

intra-mart Server Manager

intra-mart Service Platform （分散型のみ）

各サーバの起動メニューの実体は、以下のバッチファイルです。

Server Manager : % Server Manager をインストールしたパス%¥bin¥**manager.bat**

Service Platform : % Service Platform をインストールしたパス%¥bin¥**server.bat**

本製品では、各.bat ファイルを編集する必要はありませんが

各サーバの起動コマンドを変更したい場合は、各サーバ用の.bat ファイルを編集してください。

Server Manager は、コマンドプロンプト上に**[Server-Manager started offer of service]** というメッセージが表示されれば起動完了です。

Service Platform は、コマンドプロンプト上に **[Service-Platform started offer of service]** というメッセージが表示されれば起動完了です。

停止させるときは、コマンドプロンプト上で［**Ctrl+C**］キーを押してください。

4.2.1.2 Windowsのサービスとして動作させる場合

各サーバ（Server Manager、 Service Platform）は Windows のサービスプログラムとして登録することが可能です。

4.2.1.2.1 注意事項

- Windows のサービスとして動作させる場合、サービス起動後、ログアウトを行うと、サーバが停止してしまう現象があります。これを回避する方法は、起動する各サーバの設定を以下のように行ってください。
  <%im_path%>/conf/imart.xml の
  intra-mart/platform/java/server/command/option の項目に
  -Xrs オプションを追加してください。

- インストール直後は、まずコマンドプロンプトで各サーバを起動させて、正常に動作することを確認してから、サービスの登録（詳細は「4.2.1.2.3 サーバのサービス化」を参照）を行ってください。

- プログラムの開発中はコマンドプロンプトで動作させることをお勧めします。
  （コマンドプロンプトにエラーメッセージなどが出力されますので、問題解決に役立ちます）

4.2.1.2.2 intra-mart ServiceManagerの起動

各サーバを Windows のサービスプログラムとして登録するには、**intra-mart ServiceManager** を使用します。

Windows に intra-mart をインストールすると、**intra-mart ServiceManager** の起動メニューが追加されます。
以下の起動メニューより、intra-mart Service Manager を起動して下さい。

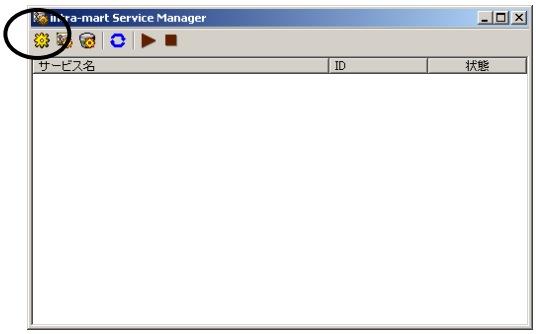
[スタートメニュー]-[プログラム]-[intra-mart AppFramework Ver7.0]-[Admin Tools**]** の
intra-mart ServiceManager

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4.2.1.2.3 サーバのサービス化

intra-mart ServiceManager を起動後、以下の手順でサーバのサービス化を行って下さい。

ServiceManager の （新規サービス登録）ボタンを押します。

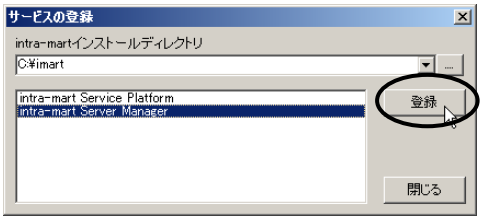


[イントラマートインストールディレクトリ]に、サーバをインストールしたパスを入力します。

（ ボタンを押すと、ディレクトリより選択することもできます。）

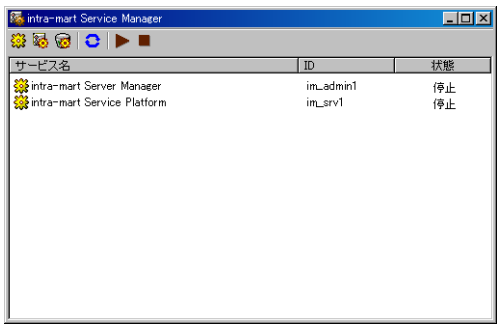
サービス化できるサーバが表示されます。

サービス化するサーバを選択し、[登録] ボタンを押します。



「サービス名称確認」画面が表示されます。必要であればサービス名称を変更してください。
[OK] ボタンを押すとサービスが登録されます。

登録したサーバが表示されていれば、サーバのサービス化は完了です。



Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4.2.1.2.4 サービス起動設定ファイルについて

intra-mart を Windows のサービスとして動作させる際の設定ファイルが以下に用意されています。

- ServerManager のサービス起動設定ファイル
  - **<%im_path%>/bin/MgrService.ini**
- ServicePlatform のサービス起動設定ファイル
  - **<%im_path%>/bin/SrvService.ini**

サービス起動設定ファイルの設定項目は以下の通りです。

設定項目	説明
jdk_home	JDK のホームディレクトリ
class	起動クラス
options	Java 起動オプション
log	ログ出力オプション

4.2.1.2.4.1 設定項目「jdk_home」について

設定項目 **jdk_home** に関する動作は以下の通りです。

- サービス起動設定ファイルにて **jdk_home** の設定を行った場合、
  <%**jdk_home** の設定ディレクトリ%>/bin/java.exe を利用して、Windows サービスの起動を行います。
- サービス起動設定ファイルの **jdk_home** の設定を省略した場合は、OS 環境変数「**JAVA_HOME**」を JDK のホームディレクトリとみなします。
- OS 環境変数「**JAVA_HOME**」が未設定の場合は、レジストリからカレントの JDK ホームディレクトリを取得します。

4.2.1.2.4.2 ログ出力方法

Windows サービスにて intra-mart を起動した際のログは以下のように出力されます。

4.2.1.2.4.2.1 ServerManagerのログ

ログファイル	説明
<%**im_path%>/log/MgrService/environment.log**	サービス起動時の環境ログ
<%**im_path%>/log/MgrService/stderr.log**	起動中の標準エラー出力のログ
<%i**m_path%>/log/MgrService/stdout.log**	起動中の標準出力のログ(※1)

4.2.1.2.4.2.2 ServicePlatformのログ

ログファイル	説明
<%**im_path%>/log/SrvService/environment.log**	サービス起動時の環境ログ
<%**im_path%>/log/SrvService/stderr.log**	起動中の標準エラー出力のログ
<%**im_path%>/log/SrvService/stdout.log**	起動中の標準出力のログ(※1)

(※1) stdout.log は、サービス起動設定ファイルの設定項目「log」が
「**true**」に設定されている場合のみ出力します。

4.2.2 UNIX系OSの場合

4.2.2.1 シェルで動作させる場合

4.2.2.1.1 Server Manager の起動と停止

シェルを起動します。

<%im_path%>/bin に移動して、以下のコマンドを実行します。

```
./manager.sh ↵
```

コマンドプロンプト上に **[Server-Manager started offer of service]** というメッセージが表示されれば起動完了です。

※ システムログの出力を有効にしているときのみ表示されます（デフォルトは有効）。

（注意）インストール時に用意されている 起動コマンドファイル（manager.sh） はサンプルです。
環境に合わせて内容を変更する必要があります。

停止させるときは、シェル上で［**Ctrl+C**］キーを押してください。

4.2.2.1.2 Service Platform の起動と停止

シェルを起動します。

<%im_path%>/bin に移動して、以下のコマンドを実行します。

```
./server.sh ↵
```

コマンドプロンプト上に **[Service-Platform started offer of service]** というメッセージが表示されれば起動完了です。

※ システムログの出力を有効にしているときのみ表示されます（デフォルトは有効）。

（注意）インストール時に用意されている 起動コマンドファイル（server.sh） はサンプルです。
環境に合わせて内容を変更する必要があります。

停止させるときは、シェル上で［**Ctrl+C**］キーを押してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

4.2.2.2 バックグラウンド実行させる場合

各サーバ（Server Manager、Service Platform）はバックグラウンド実行することが可能です。

4.2.2.2.1 注意事項

- インストール直後は、まずシェルで各サーバを起動させて、正常に動作することを確認してから、以下のバックグラウンド実行の作業を行ってください。
  （詳細は「4.2.2.2.2 Server Managerのバックグラウンド実行」および「4.2.2.2.3 Service Platformのバックグラウンド実行」を参照）
- プログラムの開発中はシェルで動作させることをお勧めします。
  （シェルにエラーメッセージなどが出力されますので、問題解決に役立ちます）
- 各シェルファイルのサンプルには、バックグラウンド実行による**起動コマンドの例**が **コメント（#）**で記述されています。バックグラウンド実行する場合は**コメント部分（#）**を参考に、内容を変更してご使用ください。

4.2.2.2.2 Server Managerのバックグラウンド実行

<%im_path%>/bin ディレクトリに、以下のファイルがあります。

manager.sh （シェルファイルのサンプル）

※ manager.sh はバックグラウンド実行のサンプルですので、
システム環境に合わせてファイル名、内容などを変更してご使用ください。

- 起動方法（例）
  起動 ： **./manager.sh start**
  停止 ： **./manager.sh stop**

4.2.2.2.3 Service Platformのバックグラウンド実行

<%im_path%>/bin ディレクトリに、以下のファイルがあります。

server.sh （シェルファイルのサンプル）

※ server.sh はバックグラウンド実行のサンプルですので、
システム環境に合わせてファイル名、内容などを変更してご使用ください。

- 起動方法（例）
  起動 ： **./server.sh start**
  停止 ： **./server.sh stop**

4.3 Application Serverの起動・停止方法

AFW をご利用の場合、Application Server の起動が必要となります。
(Application Server とは、ここでは WebSphere、WebLogic を指します。)

Application Runtime は Application Server 上で起動します。Application Runtime を起動する場合、あらかじめ Server Manager および ServicePlatform (分散構成時のみ)が起動されている必要があります。
Application Server の起動・停止方法については、各 Application Server のマニュアルを参照してください。

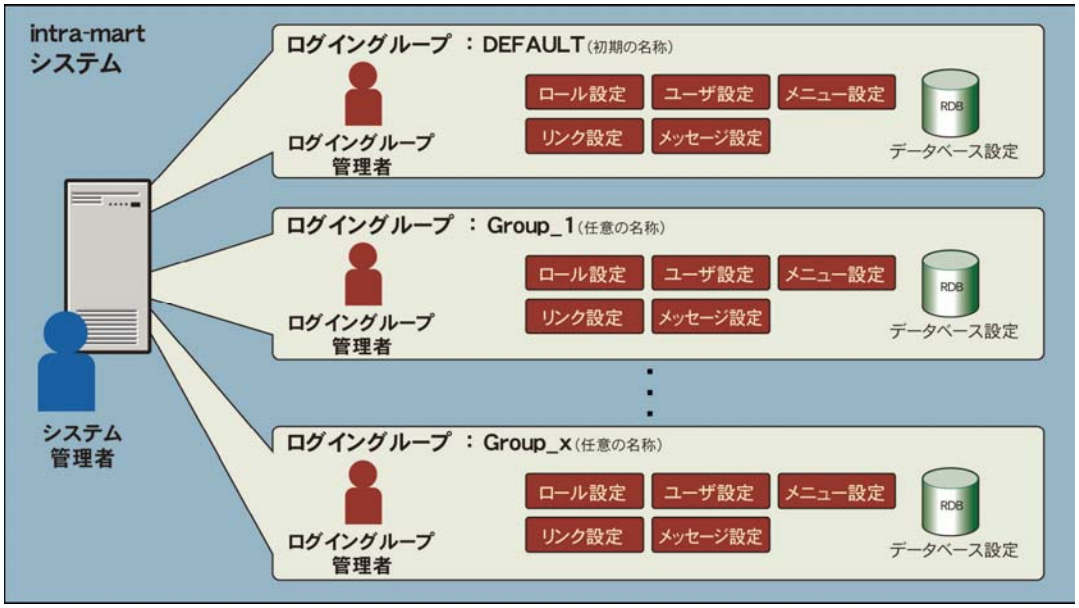
4.3.1 ヘッドレスモードの設定方法

X11 を搭載していない UNIX などの OS は、グラフィックスをサポートしていないため、通常グラフモジュールを使用することができません。 但し、ヘッドレスモードをサポートしている Java VM を使用している場合、Java 環境変数「**java.awt.headless**」を true に設定することにより、非グラフィックス環境の場合でもグラフモジュールやワークフローのフロー表示などを使用することが可能です。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

5 intra-mart へのログイン

intra-mart Ver7.0 では、共同で利用するそれぞれのグループを「ログイングループ」、その管理者を「ログイングループ管理者」と呼んでいます。そして、これら「ログイングループ」や「ログイングループ管理者」を統括管理するのが「システム管理者」です。



本章では、ログイングループ管理者で intra-mart にログインするまでの手順を説明します。

1. システム管理者でログイン
   (詳細は「5.1 システム管理者でログイン」を参照)
2. ログイングループの作成
   (詳細は「5.2 ログイングループの作成」を参照)
3. 初期データインポート
   (詳細は「5.3 初期データインポート」を参照)
4. ログイングループ管理者でログイン
   (詳細は「5.4 ログイングループ管理者でログイン」を参照)

■ intra-mart の理解をさらに深めるため、本製品に付属の以下のドキュメントをご参照ください。

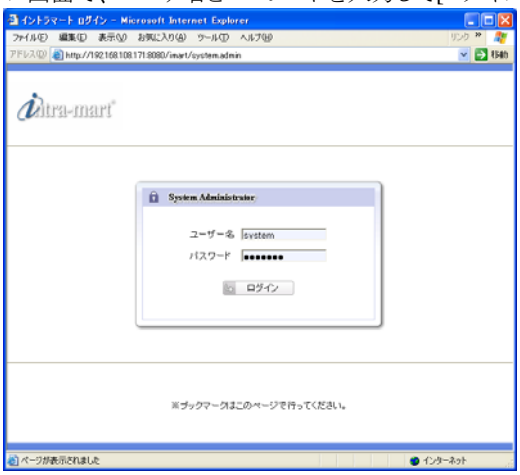
- ◆ チュートリアルガイド
- ◆ アドミニストレータ・ガイド
- ◆ プログラミング・ガイド

5.1 システム管理者でログイン

システム管理者は、以下の手順に従って intra-mart にログインします。

1. ブラウザから、以下のような URL を発行します。
   http:// ホスト名:ポート番号 / エイリアス名 / system.admin
   （例） http://hostname:8080/imart/system.admin

2. ログイン画面で、ユーザ名とパスワードを入力して[ログイン]ボタンをクリックします。



インストール直後のシステム管理者のユーザ名とパスワードは次のようになっています。

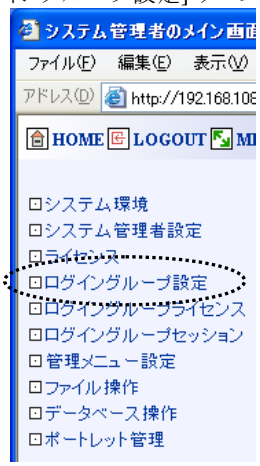
ユーザ名	system
パスワード	manager

ログイン後、以下の画面が表示されます。

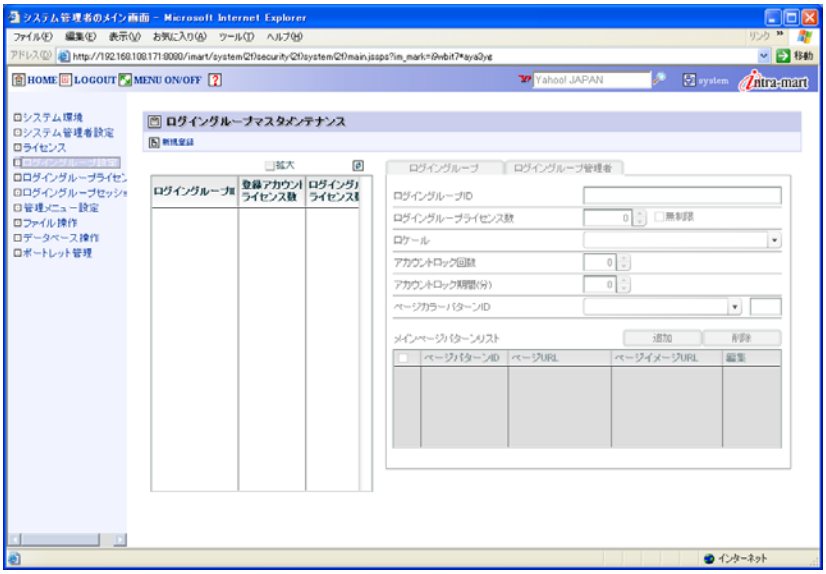
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

5.2 ログイングループの作成

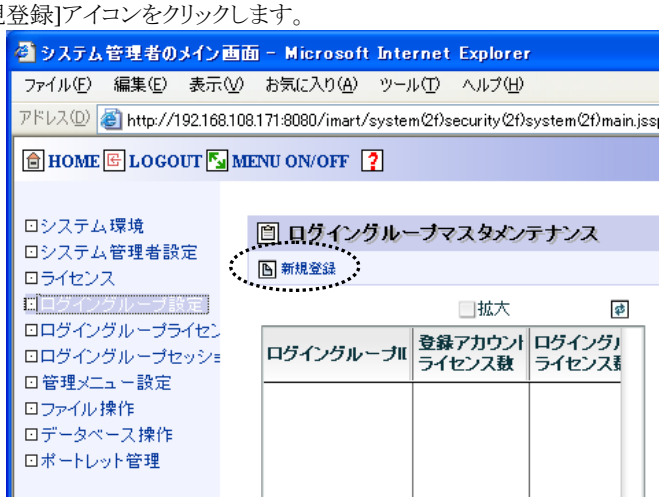
1. [ログイングループ設定] メニューを選択します。



以下の画面が表示されます。

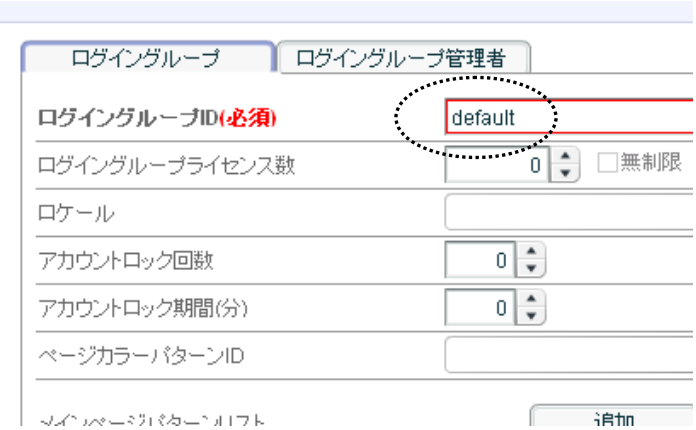


2. [新規登録]アイコンをクリックします。

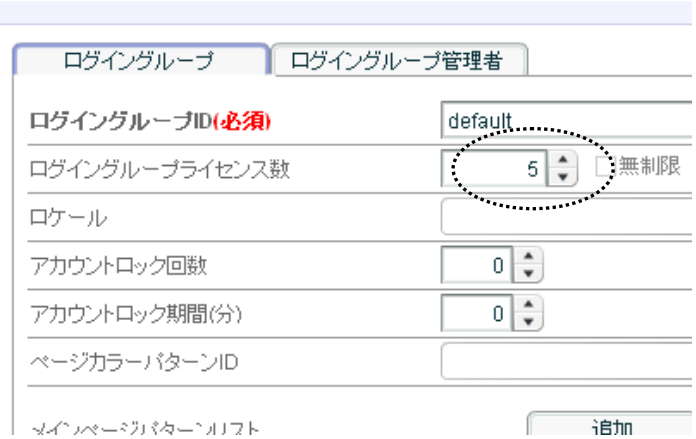


3. 「ログイングループID」を入力します。
ログイングループIDは、<% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml の data-source/group-data-source/login-group-id の設定と同じIDを設定します。

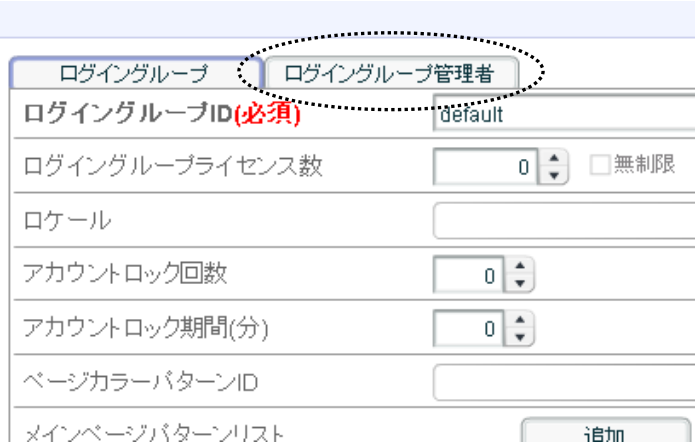
ここでは、「default」と入力します。



4. 「ログイングループライセンス数」を入力します。

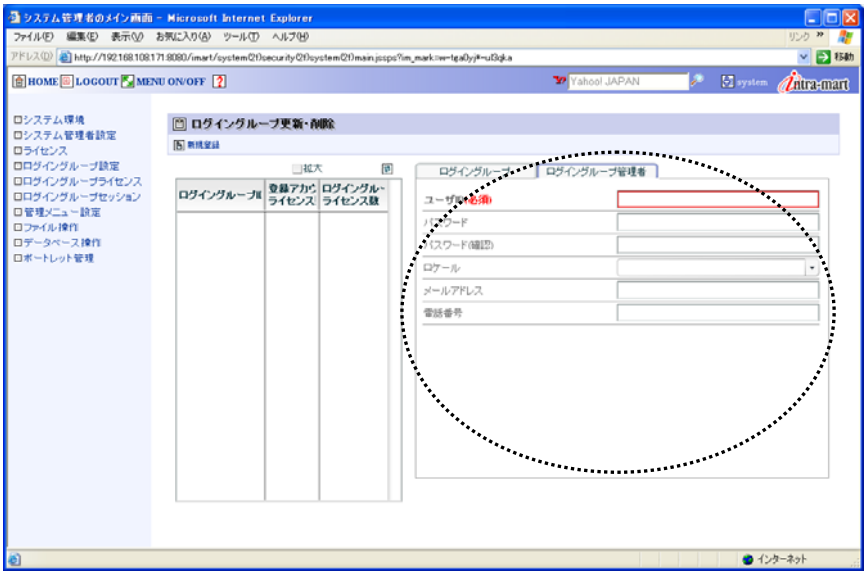


5. [ログイングループ管理者]タブをクリックします。

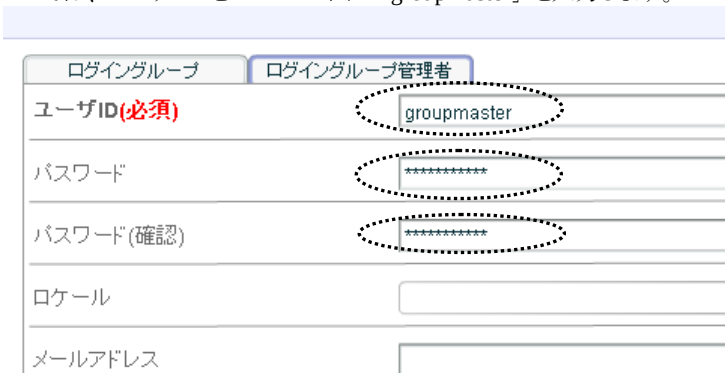


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

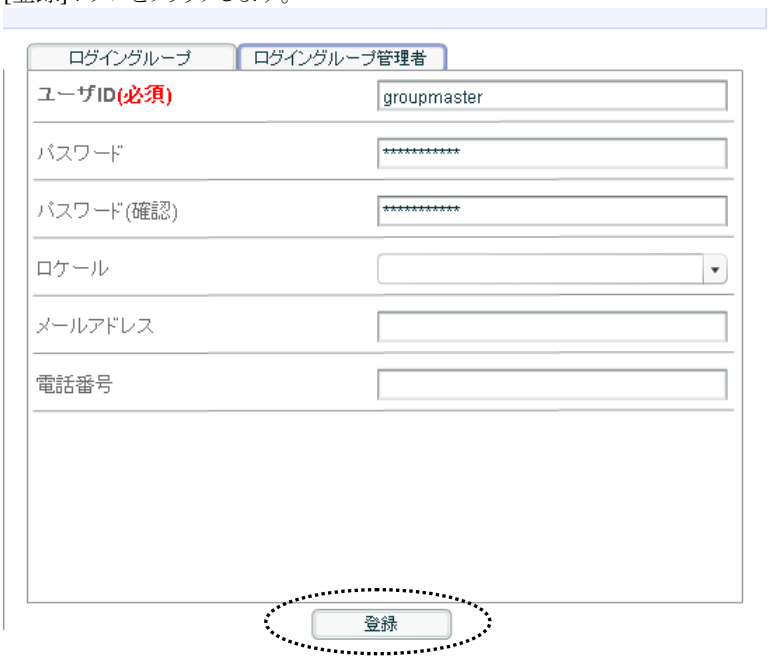
以下の画面が表示されます。



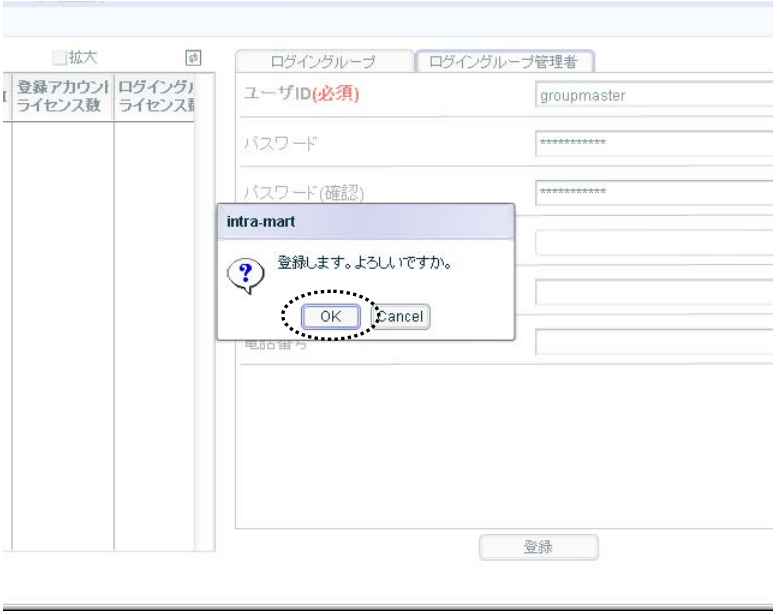
6. 「ユーザID」、「パスワード」、「パスワード(確認)」を入力します。
ここでは、ユーザID と パスワードに「groupmaster」と入力します。



7. [登録]ボタンをクリックします。



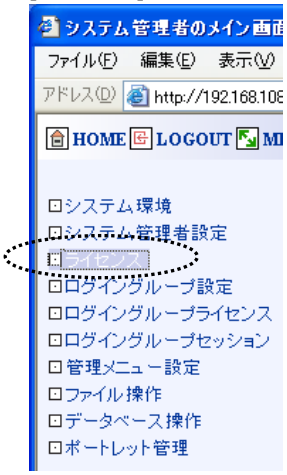
8. [OK]ボタンをクリックします。



以下の画面が表示されれば、ログイングループの登録は完了です。

5.3 初期データインポート

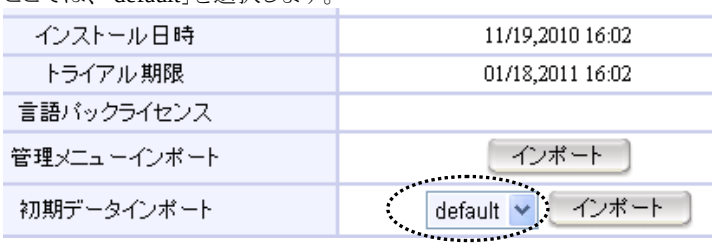
1. [ライセンス]メニューを選択します。



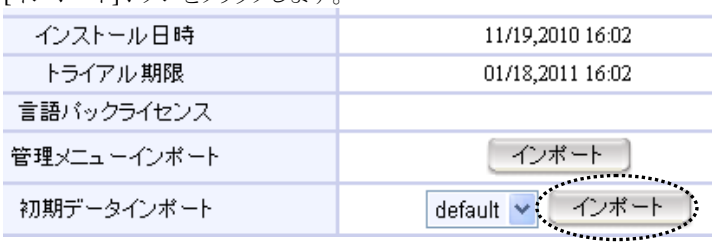
Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

以下の画面が表示されます。

2. [初期データインポート]欄のコンボボックスで、インポート対象のログイングループを選択します。
ここでは、「default」を選択します。



3. [インポート]ボタンをクリックします。



以下の画面が表示されたら、初期データインポートは完了です。

システムライセンス/初期データインポート結果

ライセンス画面へ戻る

項目	結果
テーブル作成(データベース)	テーブル作成に成功しました。 system/basic/appCreateTable.sql system/basic/itemCreateTable.sql system/basic/portalCreate.sql system/basic/vcCreateTable.sql system/basic/tmCreateTable.sql
ロール	インポートが成功しました。 system/basic/init-role.xml
アカウント	インポートが成功しました。 system/basic/init-account.xml
メニュー	インポートが成功しました。 system/basic/init-menu.xml system/basic/init-menu-item.xml
カレンダー	インポートが成功しました。 system/basic/init-calendar.xml
バッチ	インポートが成功しました。 system/basic/init-batch-master.xml
アクセスコントローラ	インポートが成功しました。 system/basic/init-access-controller.xml
Webサービスアクセス	インポートしませんでした。
レコード作成(データベース)	インポートが成功しました。 system/basic/appInsert.sql system/basic/portalInsert.sql system/basic/itemInsert.sql
拡張インポート(プログラム)	インポートが成功しました。 system/init/distribute_batch_config.js jp.co.intra_mart.foundation.portal.common.portletadmin.mbeans.PortletImport system/init/import_portal.js

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

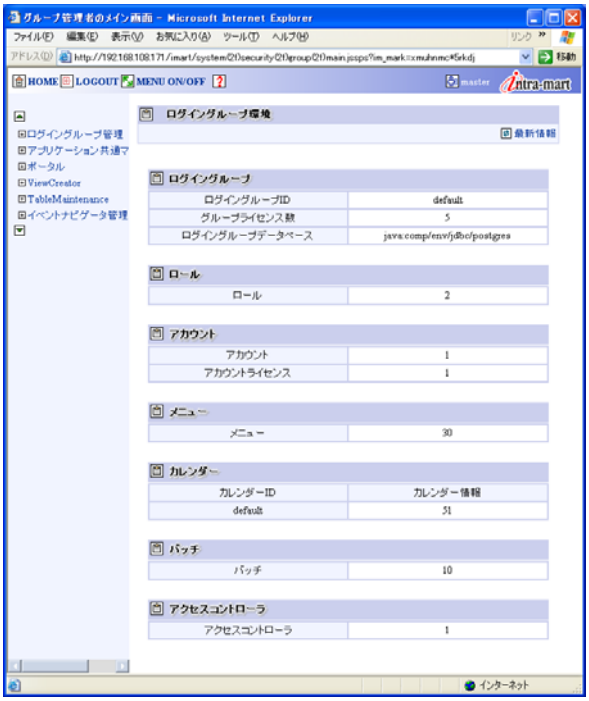
5.4 ログイングループ管理者でログイン

ログイングループ管理者は、以下の手順に従って intra-mart にログインします。

1. ブラウザから、以下のような URL を発行します。
   http:// ホスト名:ポート番号 / エイリアス名 / ログイングループID.manager
   （例）http://hostname:8080/imart/default.manager

2. ログイン画面で、ユーザ名とパスワードを入力して[ログイン]ボタンをクリックします。
   ここでは、「5.2 ログイングループの作成 6」で設定した、
   ログイングループ管理者のユーザ名とパスワードを入力します。

ログイン後、以下の画面が表示されます。



6 intra-mart 環境の再構築方法

6.1 JDKを変更する場合

以下のファイルに記述されている JDK のパスを変更してください。

6.1.1 Windowsの場合

ディレクトリ	ファイル(行数)
<%**im_path**%>/bin	admin.bat(1)
	manager.bat(1)
	server.bat(2)
	srvcom.bat(1)
	zippack.bat(1)
<%**im_path**%>/bin/tools	licedit.bat(1)
	js2class.bat(1)
<%**im_path**%>/conf	imart.xml(215, 222)

6.1.2 UNIX系OSの場合

ディレクトリ	ファイル(行数)
<%**im_path**%>/bin	admin.sh(16)
	manager.sh(16)
	srvcom.sh(16)
	zippack.sh(16)
<%**im_path**%>/bin/tools	licedit.sh(1)
<%**im_path**%>/conf	imart.xml(214,221)

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

6.1.3 修正例

6.1.3.1 imart.xmlファイルの修正例

■ 修正前

```
<intra-mart>
  <platform>
      ・
      ・
    <java>
      <home>C:/jdk1.5.0_08</home>
      <server>
        ・
        ・
        <command>
          <exefile>C:/jdk1.5.0_08/bin/java</exefile>
          <option>-cp %SYSTEMCLASSPATH% -Xms%XMS% -Xmx%XMX% -Djava.awt.headless=true</option>
          <argument/>
        </command>
      </server>
        ・
        ・
    </java>
    ・
    ・
```

■ 修正後

```
<intra-mart>
  <platform>
      ・
      ・
    <java>
      <home>C:/jdk1.5.0_12</home>
      <server>
        ・
        ・
        <command>
          <exefile>C:/jdk1.5.0_12/bin/java</exefile>
          <option>-cp %SYSTEMCLASSPATH% -Xms%XMS% -Xmx%XMX% -Djava.awt.headless=true</option>
          <argument/>
        </command>
      </server>
        ・
        ・
    </java>
    ・
    ・
```

6.1.3.2 .batファイルの修正例

■ 修正前

```
"C:/jdk1.5.0_08¥bin¥java" -cp C:/imart¥bin¥imart.jar -Xms16m -Xmx128m jp.co.intra_mart.bin.server.
ServerController %1 %2 %3 %4 %5 %6 %7 %8 %9
```

■ 修正後

```
"C:/jdk1.5.0_12¥bin¥java" -cp C:/imart¥bin¥imart.jar -Xms16m -Xmx128m jp.co.intra_mart.bin.server.
ServerController %1 %2 %3 %4 %5 %6 %7 %8 %9
```

6.1.3.3 .shファイルの修正例

■ 修正前

```
## Please set the installation path of JDK.
JAVA_HOME=C:/jdk1.5.0_08
export JAVA_HOME
```

■ 修正後

```
## Please set the installation path of JDK.
JAVA_HOME=C:/jdk1.5.0_12
export JAVA_HOME
```


Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

6.2 IPアドレスを変更する場合

intra-mart をインストール後、imart.xml の設定ファイルを編集することで、IP アドレスの変更が可能です。
IP アドレスを変更するには、**最初に OS やサーバ等で IP アドレス変更の設定をする必要がないかご確認ください。**
OS 等で IP アドレスを変更後、intra-mart の設定ファイルを編集してください。

6.2.1 imSPをインストールしたマシンのIPアドレスを変更する場合

intra-mart 製品をインストールしたマシンの「**<%im_path%>/conf/imart.xml**」を開き、
下記表の該当箇所を変更します。

ファイル	行数	タグ名称
imart.xml	9	intra-mart/platform/host/id intra-mart/platform/host/address

※ 各設定項目の詳細については、別冊「Service Platform 設定ガイド」を参照してください。
※ imart.xml の「intra-mart/platform/host/id」の変更は必須ではありませんが、変更することをお勧めします。

6.2.2 HTTPサーバのIPアドレスを変更する場合

intra-mart 製品をインストールしたマシンの「**<%im_path%>/conf/imart.xml**」を開き、
下記表の該当箇所を変更します。

ファイル	行数	タグ名称
imart.xml	173	intra-mart/platform/service/scheduler/connection-url

※ 各設定項目の詳細については、別冊「Service Platform 設定ガイド」を参照してください。
※ intra-mart/platform/service/scheduler/connection-url は **ScheduleSrv** をインストールしたときのみ有効となる設定です。インストールをしない場合は変更する必要はありません。
※ HTTP サーバには、Application Server、Web Server 等が含まれます。

6.2.3 imSMのIPアドレスを変更する場合

intra-mart 製品をインストールしたすべてのマシンの「**<%im_path%>/conf/imart.xml**」を開き、
下記表の該当箇所を変更します。

ファイル	行数	タグ名称
imart.xml	3	intra-mart/administration/host/address

※ 各設定項目の詳細については、別冊「Service Platform 設定ガイド」を参照してください。

6.3 ポート番号を変更する場合

intra-mart をインストール後、imart.xml の設定ファイルを編集することで、ポート番号の変更が可能です。ポート番号を変更するには、**最初に OS やサーバ等でポート番号変更の設定をする必要がないかご確認ください。**OS 等でポート番号を変更後、intra-mart の設定ファイルを編集してください。

6.3.1 HTTPサーバのポート番号を変更する場合

intra-mart 製品をインストールしたマシンの「**<%im_path%>/conf/imart.xml**」を開き、
下記表の該当箇所を変更します。

ファイル	行数	タグ名称
imart.xml	173	intra-mart/platform/service/scheduler/connection-url

※ 各設定項目の詳細については、別冊「Service Platform 設定ガイド」を参照してください。

※ intra-mart/platform/service/scheduler/connection-url は **ScheduleSrv** をインストールしたときのみ有効となる設定です。インストールをしない場合は変更する必要はありません。

※ imart.xml の「intra-mart/platform/host/id」の変更は必須ではありませんが、変更することをお勧めします。

6.3.2 imSMのポート番号を変更する場合

intra-mart 製品をインストールしたすべてのマシンの「**<%im_path%>/conf/imart.xml**」を開き、
下記表の該当箇所を変更します。

ファイル	行数	タグ名称
imart.xml	4	intra-mart/administration/network/port

※ 各設定項目の詳細については、別冊「Service Platform 設定ガイド」を参照してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

6.4 ログイングループ名を変更する場合

「3.4.2 data-source.xmlの設定」で設定したログイングループ名は、以下の手順で変更することができます。

> ※ ログイングループ名変更時の注意点
>
> ログイングループ名は**システム運用途中に変更できません**のでご注意ください。
> ここでは、システム運用開始前を前提として説明します。

1. <% Server Manager の root %>/conf/data-source.xml を編集します。
   data-source/group-data-source/login-group-id のタグ内容を変更してください。

   例： ログイングループを"default"から"nttd_im"に変更する場合

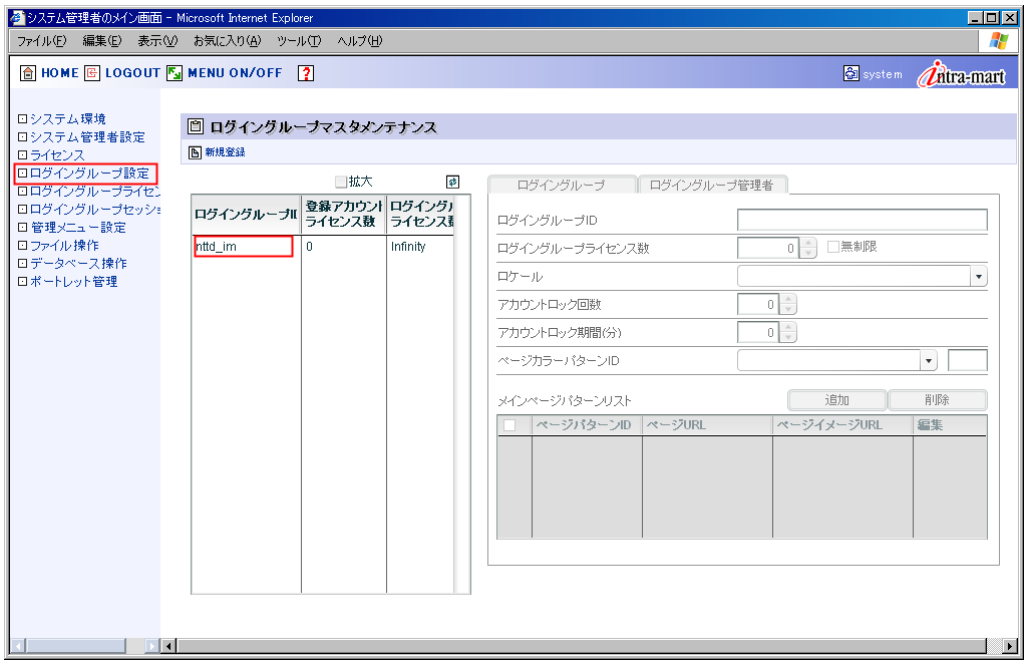
```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<data-source>

    <system-data-source>
        <connect-id>default</connect-id>
        <resource-ref-name>java:comp/env/<%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </system-data-source>

    <group-data-source>
        <login-group-id>default</login-group-id>
        <resource-ref-name>java:comp/env/<%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </group-data-source>

</data-source>
```

以下のように変更してください。

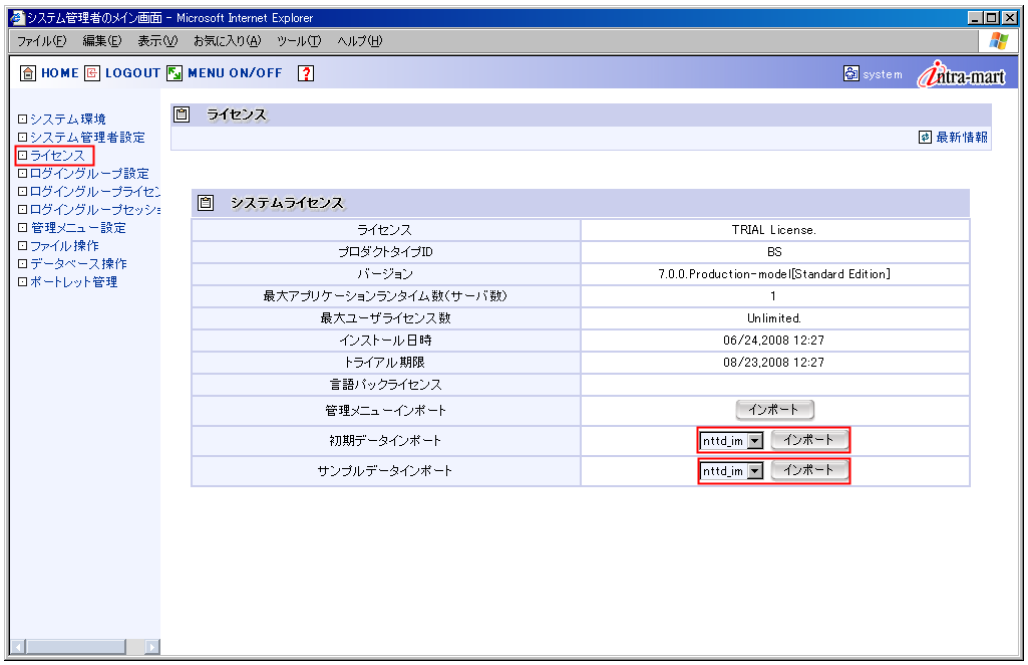
```
<?xml version="1.0" encoding="UTF-8"?>
<data-source>

    <system-data-source>
        <connect-id>default</connect-id>
        <resource-ref-name>java:comp/env/<%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </system-data-source>

    <group-data-source>
        <login-group-id>nttd_im</login-group-id>
        <resource-ref-name>java:comp/env/<%データソース参照名%></resource-ref-name>
    </group-data-source>

</data-source>
```

2. アプリケーションランタイムを再起動後、システム管理者でログインします。

3. メニューから[ログイングループ設定]を選択し、ログイングループを"nttd_im"という ID で作成してください。



4. メニューから[ライセンス]を選択し、作成したログイングループのデータをデータベースにインポートしてください。



5. データのインポート完了後、ログイングループの名前が変更されます。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

※ データのインポートを実行すると、既存の DB 領域に同じ名前のテーブルやデータを入れようとするため、SQL エラーが発生しますが、特に問題はありません。

システムライセンス/初期データインポート結果
ライセンス画面へ戻る

項目	結果
テーブル作成(データベース)	Sqlエラーが発生しました。 system/basic/appCreateTable.sql
ロール	インポートが成功しました。 system/basic/init-role.xml
アカウント	インポートが成功しました。 system/basic/init-account.xml
メニュー	インポートが成功しました。 system/basic/init-menu.xml system/basic/init-menu-item.xml

※ 下図の様に「データベース接続に失敗しました。」や、「インポートに失敗しました。」などのエラーが発生した場合は、データベースの設定、または data-source.xml の設定に問題がある可能性があります。
data-source.xml設定の詳細は「3.4.2 data-source.xmlの設定」を参照してください。

システムライセンス/初期データインポート結果
ライセンス画面へ戻る

項目	結果
テーブル作成(データベース)	データベース接続に失敗しました。 system/basic/appCreateTable.sql
ロール	インポートに失敗しました。 system/basic/init-role.xml
アカウント	インポートに失敗しました。 system/basic/init-account.xml
メニュー	インポートに失敗しました。 system/basic/init-menu.xml

6.5 試験環境等から環境を移行する場合

6.5.1 移行元のログイングループ管理者で、移行情報のエクスポート

移行元のログイングループ管理者でログインし、メニューから[アクセスセキュリティ情報入出力]-[エクスポート]を選択し、すべての情報をエクスポートしてください。

エクスポート
最新情報

	項目	カテゴリ	ファイル
☑	ロール	standard	role.xml
☑	アカウント	csv	user_account.csv
☑	メニュー	standard	menu.xml
☑	カレンダー	standard	calendar.xml
☑	バッチ	standard	batch.xml
☑	アクセスコントローラ	standard	access_controller.xml
☑	グループ管理権限ユーザメニュー	standard	admin_user_menu.xml
☑	Webサービスアクセス	standard	ws_access.xml

エクスポート

6.5.2 移行元データベースからデータベース格納データのエクスポート

移行元のログイングループで指定しているデータベースのデータを、各データベースソフトでの最適な方法で、エクスポートしてください。

6.5.3 移行先データベースへデータベース格納データのインポート

「6.5.2 移行元データベースからデータベース格納データのエクスポート」でエクスポートしたデータを、移行先のログイングループで指定しているデータベースへ、各データデータベースソフトでの最適な方法で、インポートしてください。

6.5.4 移行先環境へintra-martのインストール

「3 インストール」を参照し、移行先環境へintra-martをインストールしてください。
その際、ログイングループの作成までとし、以下の作業は実施しないでください。

- 初期データインポート
- サンプルデータインポート

intra-mart の各アプリケーションを利用している場合は、各アプリケーションもインストールしてください。

6.5.5 各種ファイル、ディレクトリの移動

移行先環境へ、移行元環境から、以下のファイル、ディレクトリを移動してください。

- 「6.5.1 移行元のログイングループ管理者で、移行情報のエクスポート」でエクスポートしたファイルを
  % [Storage Service]パス% /storage/ に配置してください。

- アプリケーションを作成した場合は、以下のファイル、ディレクトリを移動してください。
  - Web サーバコネクタに設置した静的コンテンツ（画像ファイル・CSS ファイル・CSJS ファイル）
  - スクリプト開発モデルで開発した HTML、JS ファイル
    （% [Resource Service] パス% /pages/src 以下のファイル・ディレクトリ）
  - JavaEE 開発モデルで開発した JSP、Class ファイル、jar ファイル
    % [Application Runtime] パス% /doc/imart 以下のファイル・ディレクトリを移動して、移行先で、war ファイルを作成して、Web アプリケーションサーバにデプロイしてください。
    web.xml は、移行元環境の web.xml をそのままコピーするのではなく、移行先の web.xml に対して差分を反映することをお勧めいたします。
  - メッセージファイル（properties ファイル）
    （% [Service Manager] パス% /conf/message の各ファイル

- PDF デザイナ、イントラマートスタートパック、Quick Binder、EX 申請など StorageService を利用するシステムを利用の場合は、% [Storage Service]パス% /storage/ の各ディレクトリを移動してください。

6.5.6 移行先のグループ管理者で移行情報のインポート

移行先のログイングループ管理者でログインし、メニューから[アクセスセキュリティ情報入出力]-[インポート]を選択し、「6.5.5 各種ファイル、ディレクトリの移動」で移動したエクスポートファイルをインポートして、intra-martを再起動してください。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

以上で、試験環境等から環境を移行する作業は終了です。

6.6 コンテキストルートを変更する場合

intra-mart は標準では、コンテキストルートが「/imart」として設定されています。
「/imart」以外のコンテキストルートに変更する場合、いくつか設定が必要となります。

設定方法については、「intra-mart WebPlatform セットアップガイド」の「エイリアスの変更方法」を参照してください。ただし、以下の項目は WebPlatform 用の設定ですので、AppFramework では不要です。

- http.xml のエイリアスの変更
- Web サーバのエイリアス変更

7 エクステンションおよびアプリケーションのインストール

7.1 エクステンションおよびアプリケーションのインストール

AFW をインストールしたディレクトリにエクステンションおよびアプリケーションをインストールしてください。

7.2 imart.warの再作成と再登録

ここでは、**AppRuntime** のルートディレクトリを**<%AppRuntime_path%>** と表記します。

imart.war には、**<%AppRuntime_path%>/doc/imart** の内容が格納されています。

エクステンションおよびアプリケーションをインストールした場合、imart.war の再作成および、再登録が必要となります。

手順を以下に示します。

1. **<%AppRuntime_path%>/bin** の
   zippack.bat (windows) または **zippack.sh** (UNIX 系 OS) を実行してください。
   <%AppRuntime_path%>/doc 以下のファイルが imart.war に格納されます。

2. imart.war 作成後、再度 WAR ファイルのデプロイを行ってください。
   WAR ファイルのデプロイ方法については、以下を参照して下さい。

参照		ページ
3.3.1	WebSphereの設定	36
3.3.2	WebLogicの設定	62

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

8 アンインストール

※ ユーザが作成したテーブルやビュー等がある場合は、データベースの初期化の前にバックアップを行ってください。

8.1 コマンドプロンプトで動作させている場合

起動している場合は、Ctrl＋C キーで停止させます。

Application Server の AppFramework に関する登録情報を削除します。
インストールしたディレクトリ **<%im_path%>** を削除します。
intra-mart が利用していたデータベースを初期化します。

8.2 サービスとして動作させている場合

起動している場合は、intra-mart ServiceManager から停止させます。
intra-mart ServiceManager から 各サーバをサービスから削除します。

Application Server の AppFramework に関する登録情報を削除します。
インストールしたディレクトリ **<%im_path%>** を削除します。
intra-mart が利用していたデータベースを初期化します。

8.3 Windowsの場合

Windows のスタートメニューに登録されている、intra-mart の起動メニューを削除します。

以下のディレクトリを削除して下さい。
C:¥Documents and Settings¥<%インストールした時のユーザ ID%>¥スタート メニュー¥プログラム¥intra-mart AppFramework Ver7.0

※ AFW のインストールでスタートメニューの登録名を変更した場合は、ディレクトリの場所も異なります。

9 付録 A intra-mart システム管理シート

intra-mart システム管理シート

※既に記述されている欄は該当のものに丸をおつけください。

Web サーバ (IWP のみ)	Web サーバ	Apache、 IIS
	バージョン	
	ホスト名(FQDN)	
Application Server	Application Server	Resin、 JBoss、 WebSphere、 WebLogic
	バージョン	
	ホスト名(FQDN)	
Java VM(JDK)	バーション	
データベース	種別	ORACLE、 MS-SQLServer、 IBM DB2、 PostgreSQL
	データベースバージョン	
	ネットワークデータベース名	
	最大接続数	
	接続形態	ネイティブ(JDBC THIN 接続)
	上記接続ドライババージョン	
SMTP サーバ	ホスト名(FQDN)	
intra-mart	システム管理者ユーザID/パスワード	system / *******
	ログイングループ ID	
	ログイングループ管理者ユーザID/パスワード	
	intra-mart アプリケーション名	
	intra-mart バージョン	
Web サーバ マシンスペック	CPU クラスおよび数量	
	メモリ	
	ハードディスク	
intra-mart サーバ マシンスペック (Web サーバと同一マシンの場合は未記入	CPU クラスおよび数量	
	メモリ	
	ハードディスク	
DB サーバ マシンスペック (Web サーバと同一マシンの場合は未記入)	CPU クラスおよび数量	
	メモリ	
	ハードディスク	
クライアント PC	機種	
	搭載ブラウザ	Firefox、 InternetExplorer
	搭載ブラウザバージョン	

※ バージョンについては、細かなリビジョン番号まで記載ください。

※ パスワードは記入しないで忘れないようにしておくか、記入した場合は、このシートを厳重に管理してください。

※ 運用するサーバ構成図を記入してください。

※ WebServerConnecoter(IWP(Resin)の場合のみ), intra-mart 各サーバモジュール(Application Runtime など)をどこにインストールしているか記入してください。

※ 差し支えなければ、各サーバの IP アドレス および各サーバモジュールが利用している通信ポート番号を記入してください。

システム構成図

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

10 付録 B インストールトラブルシューティング

インストール時のトラブルシューティングは、
別冊「**intra-mart WebPlatform/AppFramework Ver7.0 エラーガイド**」 に記載されています。
以下の注意事項とあわせてご参照ください。

10.1 注意事項

画面の動作が不安定なときは、ブラウザのキャッシュをクリアした後、サーバのドキュメントと毎回比較するように設定し、ブラウザを再起動してください。
上記以外に該当しない理由においても、インストール後、ログイン画面等が正常に表示等されない場合については、インストールならびに、適切な設定がされていない可能性がありますので、下記点についてご確認ください。

- 起動時における % [Application Runtime]パス % /log/platform/system.log ファイルに、
  起動情報が出力されます。→根本原因と関連するエラーメッセージ等は出力されていないか？
- インストール先のディレクトリが、他の[各 Service]インストール先と重複していないか？
- [Application Runtime]の起動に時間を要している。
  →IM-Administrator ツールにて、サーバの起動状態をご確認ください。
- [各 Service]の他、[ServerManager]をインストール、起動されているか？
- 他社製品等で、既に IP アドレスならびに、ポート番号が使用（Listen Port）されていないか？
- 各設定の IP アドレス、ポート番号に相違設定がないか？

以上を確認しても問題が回避されないようであれば、根本的なインストール、設定等が不適切である可能性があります。該当バージョンについては、たいへんデリケートな製品となっておりますので、
再インストールを行っていただく方が迅速に対応可能な場合もあります。ご検討ください。

11 付録 C 運用開始及び運用にともなう Tips（安定稼動を目指すために）

11.1 運用開始後

- 運用開始後の運用状況確認期間を必ずもうける。
  実際に運用を開始してからではないと取得できない「アクセスパターン」、「使用状況」、「稼動状況（環境周り）」を把握するために必要となる期間。
  - ◆ 取得する情報の例
    - アクセス数（平均、ピーク時等）、CPU 使用率、スループット※1
    - 処理内容の統計（どの処理がどのくらい行われているか等）※2
    - JavaVM メモリ使用状況（時系列での JavaVM 内部のメモリ使用率、FullGC 発生率等）※3

- 運用開始後の運用状況確認期間で得られた情報を元に環境の再設定や再構築を行う。
  取得した情報を元に「OS」、「JavaVM」等の環境設定やプログラム変更を行う。
  - ◆ 環境設定の例
    - CPU 稼動率やスループットによりハードウェアの増設等を検討。
    - よく使われている処理の効率を上げるためプログラム変更等を検討。
    - メモリ使用率が高い場合や FullGC の発生率（発生間隔）が高い場合は、プログラム変更等によりメモリ使用を少なくするようにすることや、JavaVM パラメータ設定（-Xms,-Xmx 等）により FullGC の発生率を減らすこと※4等を検討する。また、ハードウェア的にメモリ容量が少ない場合、メモリ増設を検討

11.2 運用

- 定期的な運用状況確認期間を必ずもうける。
  定期的に「アクセスパターン」、「使用状況」、「稼動状況（環境周り）」を把握するために必要となる期間。
  - ◆ 取得する情報の例
    - 上記、運用開始時と同様に行う。

- 定期的な運用状況確認期間で得られた情報を元に環境の再設定や再構築を行う。
  取得した情報を元に「OS」、「JavaVM」等の環境設定やプログラム変更を行う。
  - ◆ 環境設定の例
    - 上記、運用開始時と同様に行う。

Copyright 2000-2011 (株)NTT データイントラマート All rights Reserved.

11.3 備考

※1 アクセス数（平均、ピーク時等）は、アクセスログ等にて収集、CPU 使用率は、top コマンドや、パフォーマンスモニタ等で取得、スループットは実際アクセス計測等にて取得

※2 処理内容の統計は、アクセスログ、プログラムログ等にて収集

※3 JavaVM メモリ使用状況（時系列での JavaVM 内部のメモリ使用率は
intra-mart Administrator のメモリログで取得、FullGC 発生率は intra-mart Administrator のメモリログ（急激に使用可能メモリが増している個所）や JavaVM のパラメータ-verbose:gc 等により取得

※4 FullGC は GC 処理以外の処理がすべて一定時間停止（数秒から多くて20～30分程度）
するので FullGC がかかるのが1日に 1 回位まで少なく行われるようにする。
また、FullGC がかかるのを夜間に行われるように調整することにより運用時に FullGC の影響が極力なくなるようにする。（夜間に再起動も検討する。）

その他 JavaVM のパラメータの詳細は Oracle Java ホームページ「 **http://www.oracle.com/technetwork/java/** 」より入手して下さい。

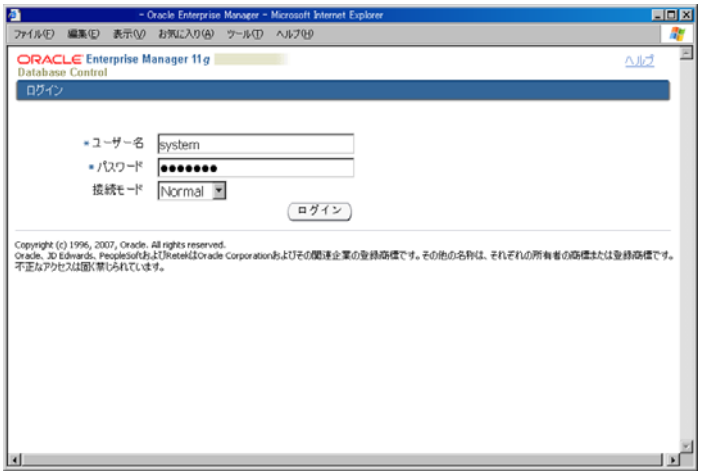
12 付録 D Oracle11g での表領域、およびユーザの作成方法

intra-mart を使用する場合、DBMS の使用が前提となり、intra-mart で DBMS として Oracle を使用する場合、最低、intra-mart 専用のユーザと権限を付与する必要があります。
以下、Oracle11g での表領域の作成、およびユーザ作成と権限付与の方法を記します。
※　以下の手順は、トライアルや開発用で一時的に使用する場合の方法で、一般業務等で使用する場合は、別途表領域等の DB 容量見積もりを行った上で、テーブルスペース等の設定を行ってください。

12.1 表領域の作成

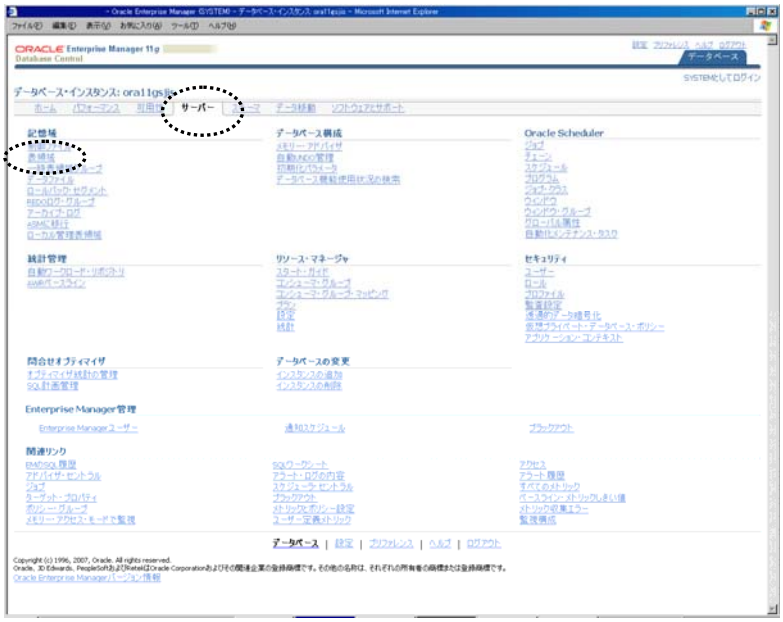
ユーザが固有に作成するデータを格納するための表領域を作成します。

1. ORACLE 11g Enterprise Manager のログイン画面を表示し、 管理者権限で DB に接続します。
接続先の URL 例 「http://localhost:5500/em」



Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

2. [管理]タブの[表領域]リンクをクリックします。



3. [作成]ボタンをクリックします。

4. [名前]に表領域名を入力し、[追加]ボタンをクリックします。

5. ファイルディレクトリ、サイズ等を設定し、[続行]ボタンを押します。

Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

6. [OK]ボタンを押します。

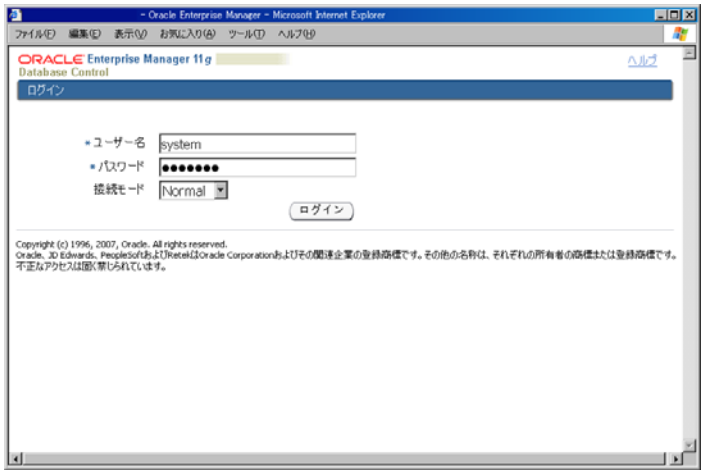
「オブジェクトは正常に作成されました」と表示されれば成功です。

詳しくは、Oracle Enterprise Manager Online Help の「表領域の作成、編集、削除」トピックを参照してください。

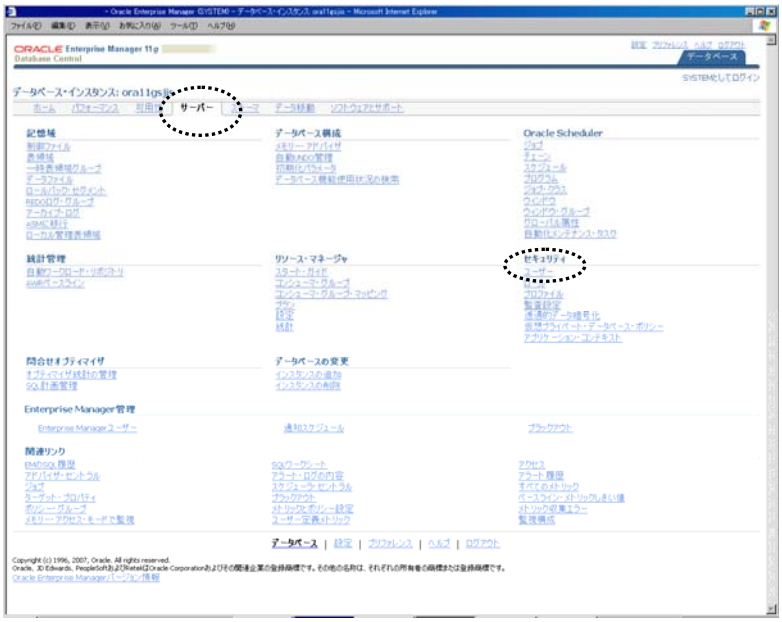
12.2 ユーザの作成

intra-mart で使用する Oracle ユーザを作成します。

1. ORACLE 11g Enterprise Manager のログイン画面を表示し、 管理者権限で DB に接続します。
   接続先の URL 例 「http://localhost:5500/em」

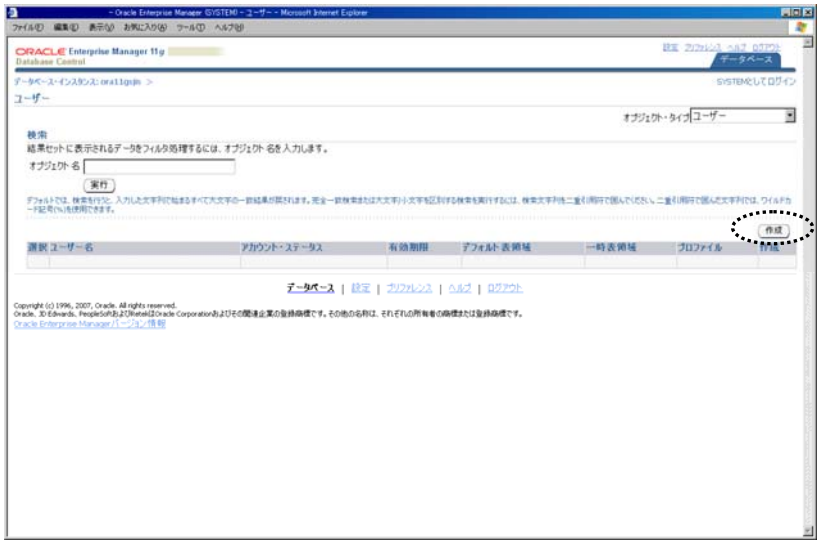


2. [サーバ]タブの[ユーザー]リンクをクリックします。

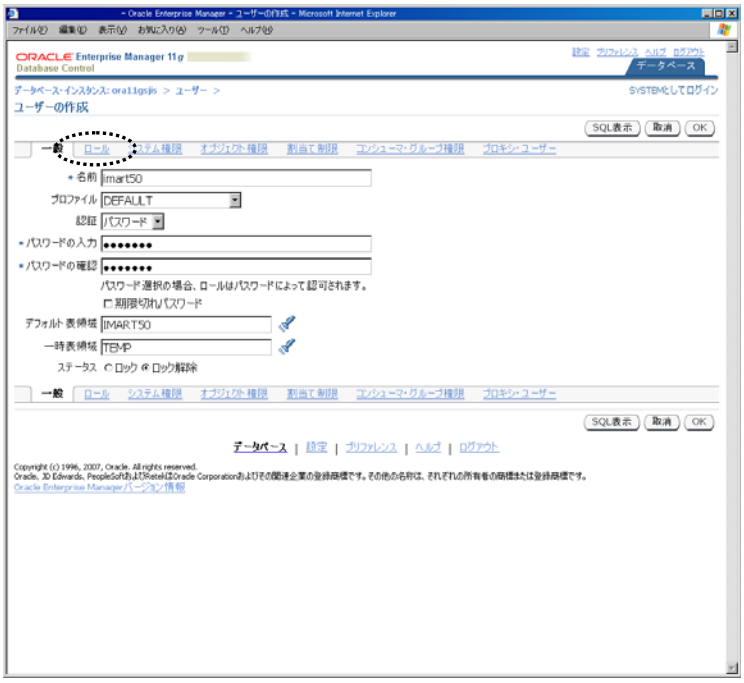


Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

3. [作成]ボタンをクリックします。



4. 名前、パスワード、表領域等を設定し、[ロール]タブを選択します。



5. [リストを編集]ボタンをクリックします。

6. CONNECT ロールと RESOURCE ロールを与え、[OK]ボタンをクリックします。

7. [OK]ボタンをクリックします。

「オブジェクトは正常に作成されました」と表示されれば成功です。

詳しくは、Oracle Enterprise Manager Online Help の「データベース・ユーザーの作成、編集、削除」トピックを参照してください。

Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

12.2.1 CREATE VIEW権限の付与

intra-mart を利用するには、CREATE VIEW 権限が必要です。

Oracle Database 11g Release 1 の CONNECT ロールには CREATE VIEW 権限が予め付与されておりません。

そのため、CREATE VIEW 権限を明示的に付与する必要があります。

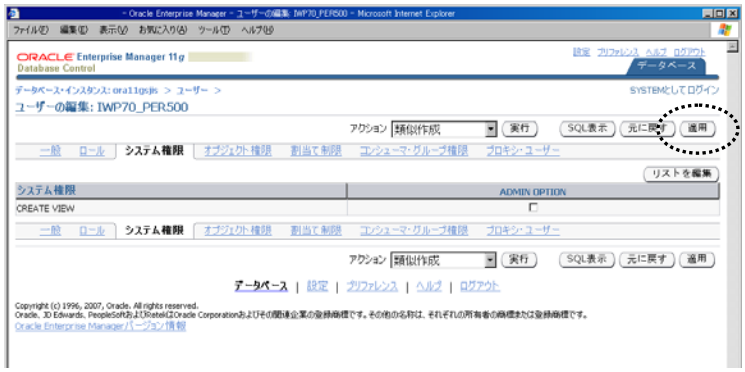
1. CREATE VIEW 権限を付与するユーザを指定し、[編集]ボタンをクリックします。

2. [システム権限]タブを選択します。

3. [リストを編集]ボタンをクリックします。

4. CREATE VIEW 権限を与え、[OK]ボタンをクリックします。

5. [適用]ボタンをクリックします。



「ユーザー XXXX は正常に変更されました」と表示されれば成功です。

Copyright 2000-2011 株式会社 NTT データ イントラマート All rights Reserved.

intra-mart AppFramework Ver.7.0
セットアップガイド

2011/06/30 第8版

Copyright 2000-2011 株式会社NTTデータ イントラマート
All rights Reserved.
TEL: 03-5549-2821
FAX: 03-5549-2816
E-MAIL: info@intra-mart.jp
URL: http://www.intra-mart.jp/